調　査　研　究

清洲城下町の堀の復元

金原　宏

Ⅰ　はじめに

清洲城は、15世紀後半、応仁・文明の乱前後の築城とされている。文献上では、文明10年（1478）の「親元日記」が初見である。その後、清洲城は、次第に尾張支配の中心となり、尾張統一を目指す信長も弘治元年（1555）ここに進出している。信長の小牧進出後もおそらく廃城とならなかったと思われる。本能寺の変後は、遺臣らの会議が清洲城で開かれ尾張を領した織田信雄が城主となっている。以後、豊臣政権下では、豊臣秀次、福島正則、関ヶ原合戦後は、松平忠吉、徳川義直と尾張の領主を城主としたが、慶長15年（1610）名古屋城築城に伴う「清洲越し」によって城と城下はすべて解体している。

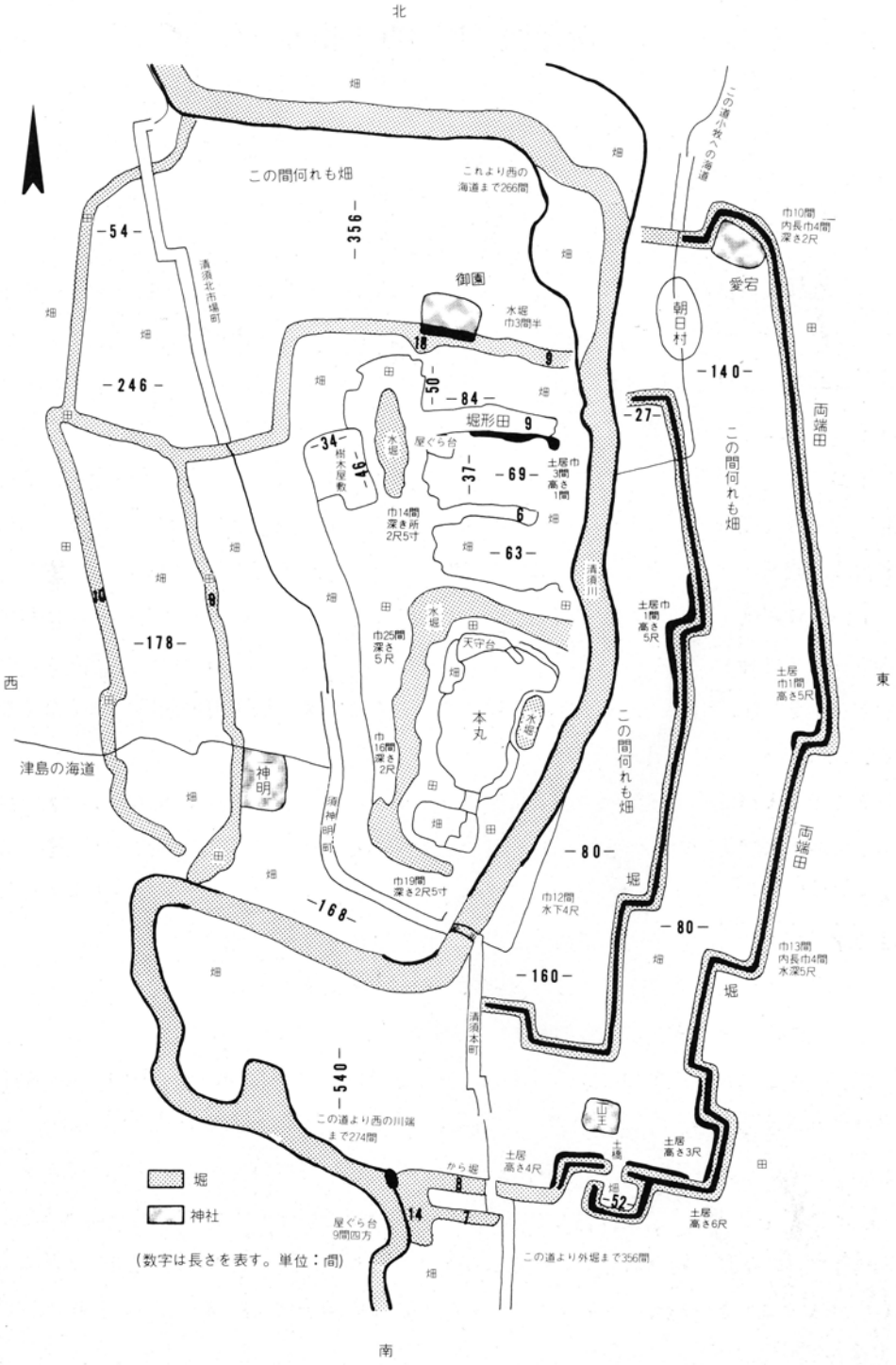
清洲城移転後、この地域は開墾を命じられ、農村化することになる。町跡には、わずかに残存した社寺や農家と周辺の村々から入耕した人々によって、再び新田が形成されたのである。その後、清洲は、美濃路の宿場になったとはいえ、城下町の面影は全くなくなってしまったといっても過言ではない。

そこで、本研究は、発掘調査の結果を考慮して、清洲村古絵図[1]を基本に、近世の村絵図から堀の遺構の残存状況を抽出し、堀の配置をみた。そして、それを照合しながら、地籍図と航空写真によって地割を検討し、堀の遺構をみた。さらに、堀の遺構を比定される地域の地質調査を行い、清洲城下町の堀の配置を現在の清洲町の地図に照合した。

Ⅱ　清洲城下町の堀の復元

1　発掘調査と清洲村古絵図

昭和60年度の発掘調査の結果、清洲城下町遺跡において清洲城の中堀、朝日西遺跡において外堀が検出された。第２図は、清洲城下町遺跡の堀の土層セクションである。堀の規模は、幅17m、深さ1.5mで、神明社の南側を東西に走っている。これを第１図の清洲村古絵図と照合すると、古絵図の堀も神明社の南側を東西に走り、堀の規模も幅９間、深さ３～４尺で、ほぼ発掘調査結果と同じ数値を示している。また、朝日西遺跡の外堀についても同様のことがいえる。したがって、本研究では、清洲村古絵図を基本に、堀の推定復元をすすめていくことにする。



第1図　清洲村古絵図(蓬左文庫所蔵より作成)

2　村絵図からの堀の復元

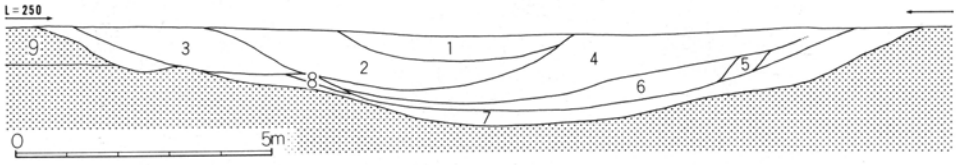
清洲城下町の範囲内にかかわる村絵図として、清洲村絵図(1838年)、朝日村絵図(1841年)、寺野村絵図（1841年)、田中村絵図（1841年）があるが、ここでは清洲村絵図を一例として考察をすすめる（第５図)。村絵図から堀の遺構を抽出する際に、次の２点に注目した。

ⅰ）用水路・川田

張洲府志[2]に「〔五条橋〕在ニ清洲驛中一。是往昔城　湟引ニ河水一。**是城門之橋也。**」とあるように、旧河道を巧みに利用した清洲城下町のあり方を考えると、堀跡を狭くして田や用水路として利用したと考えられるからである。

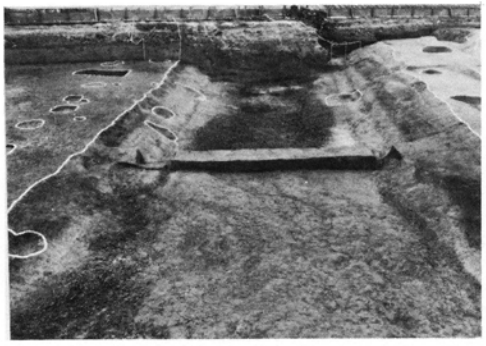
ⅱ）新田

尾張徇行記[3]に「此村ハ城府ノ址也。慶長年中城ヲ　名古屋ニ遷シ玉フ後、其地ヲ開墾シテ、村落トナレリ、サレヘ寛文年ノ覚書ニハ清洲新田トアリ。」とあるように、慶長15年（1610）の「清洲越し」の後、城下が開墾されて新田名がつけられている。特に、堀跡は、新田開発に適した場であったと考えられる。村絵図に残る新田は、古川新田、辰・寅等の干支の付いた新田、安藤新田がある。古川は、五条川を利用した堀跡に付いた名前と考えられ、それが新田と結びついて古川新田となったのであろう。干支の付いた新田は多数あるが、ここでは、古川新田に連続するものだけとりあげた。なお、干支は検地を受けた年



1．淡灰褐色砂　2．灰褐色砂　3．灰褐色砂(砂質強)　4．灰褐色砂　5．茶褐色シルト
6．暗青灰色砂　7．灰色砂　8．暗灰色砂　9．黄褐色砂

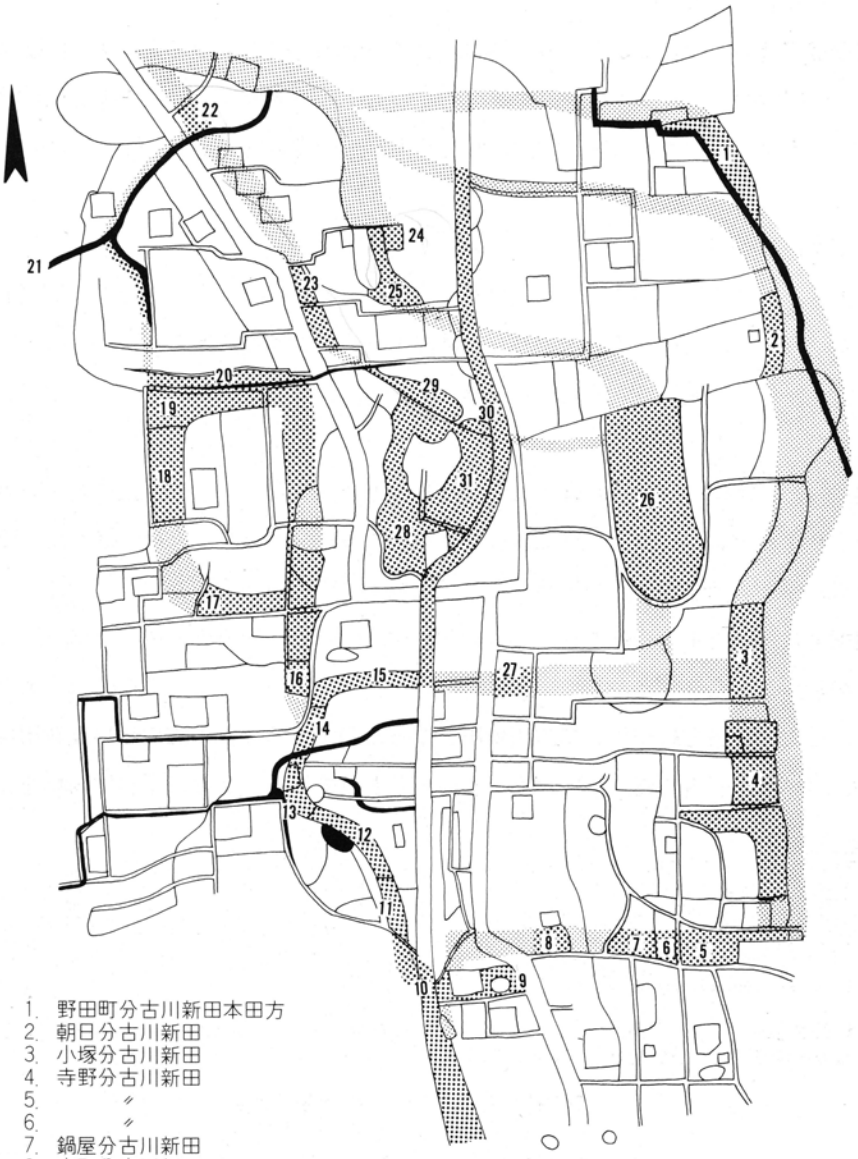
第２図　清洲城下町　中堀土層断面図



第３図　朝日西遺跡(外堀)



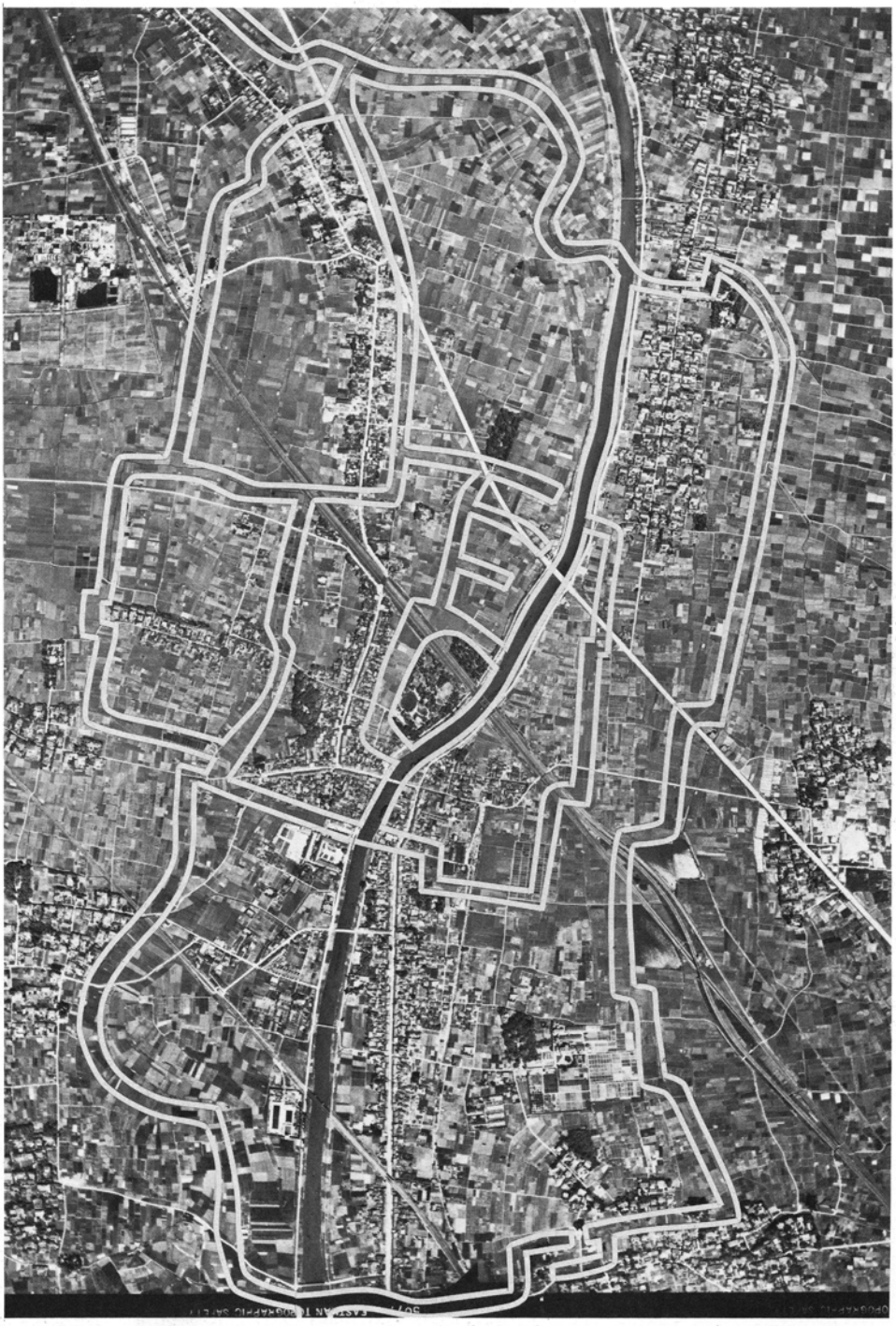
第４図　清洲城下町遺跡(中堀)



第5図　清洲村絵図からの堀の復元



第6図　地籍図からの堀の復元



第7図　航空写真からの堀の復元

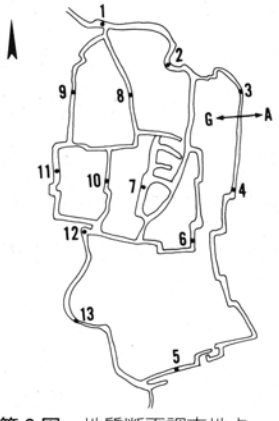
のものであり、辰新田（1652年）、寅新田（1662年）、西市場戌新田（1694年）、午新田（1726年）、未新田[4]（1751年）である。安藤新田[5]は、安藤善六の請負によるものである。

3　地籍図からの堀の復元

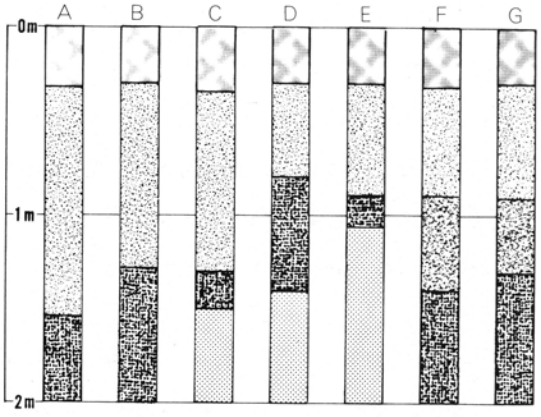
村絵図からの堀の推定をもとに、地籍図からの堀の抽出を行なった（第6図参照）。地籍図は、昭和13年清洲町・新川町土地宝典所収のものを使用したが、これらは、明治21年の地籍図が基になっている。地籍図から堀の遺構を抽出する際に次の2点に注目した。

ｉ）堀に関係する字名

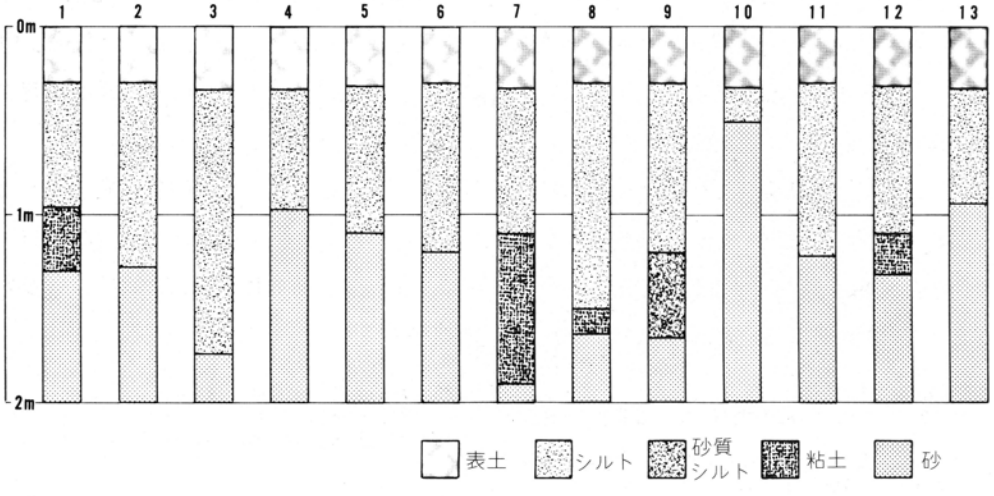
「清洲越し」から約300年も経過している関係からすぐに結びつけることはできないが、「内堀」「外堀」の字名は城下町時代の堀を示すものであろう。また、「管田」「埋田」「川田」「錠田」「堤添」「古堤」「御替地」「土居」も堀に関係する字名と考え、付近の地割を慎重に検討した。



第8図　地質断面調査地点



第9図　地質断面図



第10図　地質断面図

ⅱ）特徴ある地割

堀の遺構は、特徴ある地割を示している。水田に注目し、一筆の土地が同じ幅をもって細長く帯状に区画され、さらに連続性をもっている地割を抽出した。これらは、明らかにまわりの地割とは異なっている。

4　航空写真からの堀の復元

昭和21年、アメリカ軍撮影の航空写真を使用した（第７図）。地割は、地籍図とほとんど変わらないが、田畑等の区別や地質の違いを判別するために使用した。

5　地質断面図

第８図に示した地点での発掘調査やボーリング調査から、堀の地質断面図を作成した。第９図は、昭和59・60年度朝日西遺跡の調査結果から作成したものである。外堀を横断する形で、東Ⓐから西Ⓖに５ｍ間隔で地質をみた。この中で、Ｃ～Ｅが堀の中、ＡＢ、ＦＧは堀の両側である。地質を比較すると、Ｃ～Ｅは水量が多く流れの速いところであったことがうかがえる。つまり、旧河道を利用して堀が作られていたことがわかる。城下町当時の堀については、「東槎録(6)」に「海を引きて濠と為す。水深く且つ濶く、舟楫通行す。」とあり、堀の水深は深く、幅も広く水量が多かったことを示しており、Ｃ～Ｅの断面図と一致している。こうした考えをもとに、堀と比定した地域で、ボーリング調査による地質断面図を作成した。第10図の１～13地点とも２ｍ以内の高いレベルで砂層がみられ、前述の堀の地質（Ｃ～Ｅ）と同じであることから、ほぼ旧河道を利用した堀であると考えられる。

Ⅲ　おわりに

清洲村古絵図を基に、村絵図、地籍図、航空写真、発掘調査、ボーリング調査によって清洲城下町の堀の復元を行い、堀の配置を現在の清洲町の地図に照合した（第11図）。その結果、堀は、北方の春日村落合を分岐点に、南の清洲町丸ノ内を合流点にし、外堀、中堀、内堀の三重となって清洲城下町をめぐっていた。堀に囲まれた城下町の規模は、南北2.7km、東西1.6mで「関東の巨鎮」としての城下町であったことがうかがえる。

ところで、本研究においては、清洲村古絵図を基本にしたため、第11図等の堀の復元は信雄の城下町拡張期から「清洲越し」までの配置に近い。しかし、地籍図、航空写真等で検討すると、他にも堀の遺構であると思われるものが数多くみられる。これらは、信長入城の頃の遺構であると考えられる。今後の研究に期待したい。

〔注〕

(1)　逢左文庫所蔵
(2)　清洲志　津梁の条（松平君山『張洲府志』巻第十　1952）３頁
(3)　清洲の条（『尾張徇行記』第３巻　名古屋市教育委員会　1966）204頁
(4)　注(3)と同じ　203頁
(5)　注(3)と同じ　220頁
(6)　『清洲町史』（清須町史編さん委員会　1969）160頁



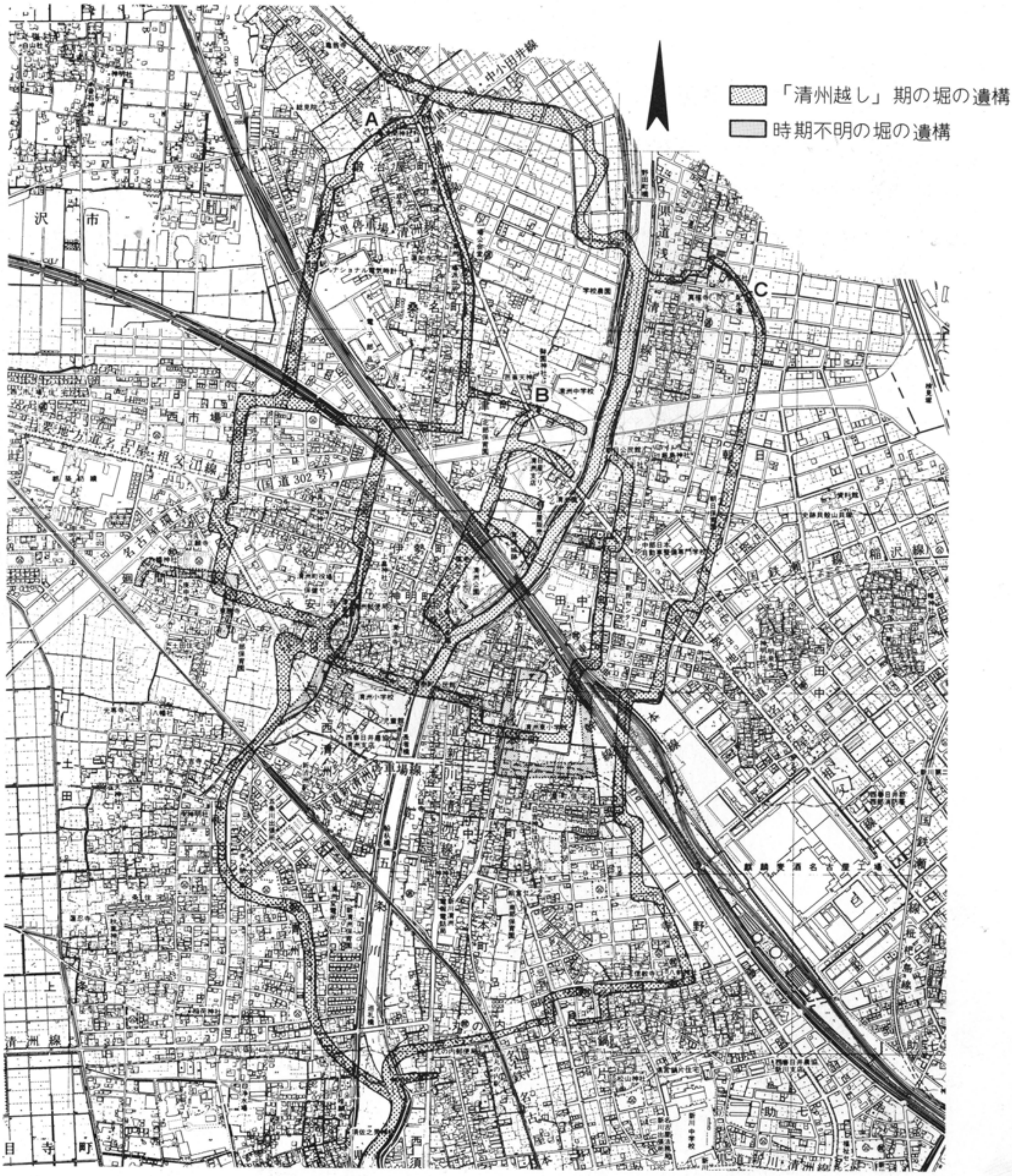
A



B



C



第11図　清洲城下町の堀の復元　　1：2000

人・獣骨類の出土した大溝

— 朝日西遺跡59C・D区ＳＤ11の紹介 —

江原昭善*・松本　真**・木下　実***・遠藤才丈・小澤一弘

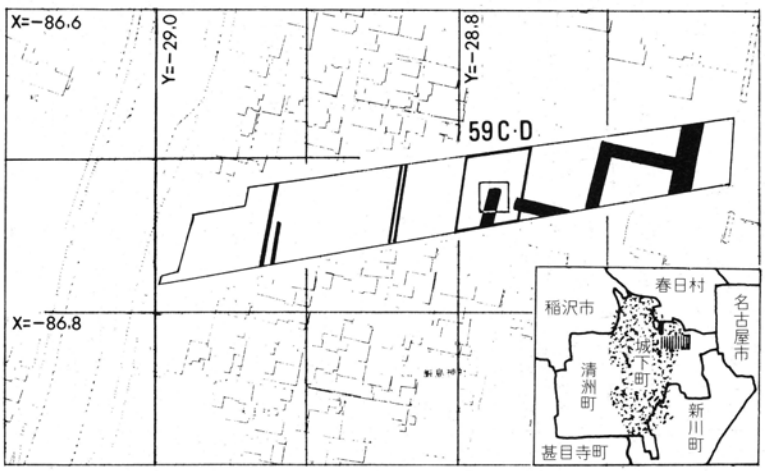
Ⅰ　ＳＤ11について

1．遺構の位置と出土状態

昭和59年12月、環状２号線予定地内の朝日西遺跡59C・D区において、多数の人骨と犬骨が、他の遺物群とともに大溝より検出された（図版Ⅰ）。これらの資料は、近世初頭の興味ある精神生活の一端を垣間見せており、人骨等の鑑定結果とともにここに紹介し、あわせて先学の御教示を仰ぐ次第である。

人・獣骨類の出土した大溝ＳＤ11は、屋敷地を画する溝の一つで、清洲城下町の東北端に展開した寺社地における溝群のなかでもっとも西側に位置する（第１図）。南北方向に外堀と併走し、幅７ｍ、深さ0.8ｍ、長さ17ｍ程の規模であるが、なお調査区外へと南走している。

遺物群は、この溝の東北側に大小の群塊状態で検出され、いづれも溝の下層に安定的に堆積した黒褐色土～暗緑灰色粘質土層中より出土している。出土骨については、人骨も犬骨も、まったく解剖学的配列を示さず、かつ混然とした状態で出土している。しかも、第１表

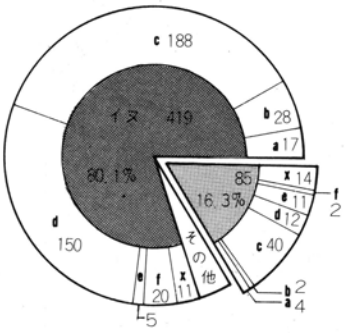


第１図　ＳＤ11位置図

＊　京都大学霊長類研究所教授　　執筆分担（Ⅱ）
＊＊　京都大学霊長類研究所研修員　　〃
＊＊＊　京都大学霊長類研究所技官　　〃

に見る如く特定の骨種に限定されているのである。いづれにせよ、出土状況は、あるまとまりをもって、溝の東肩より次々に投棄されたことを示しているであろう。

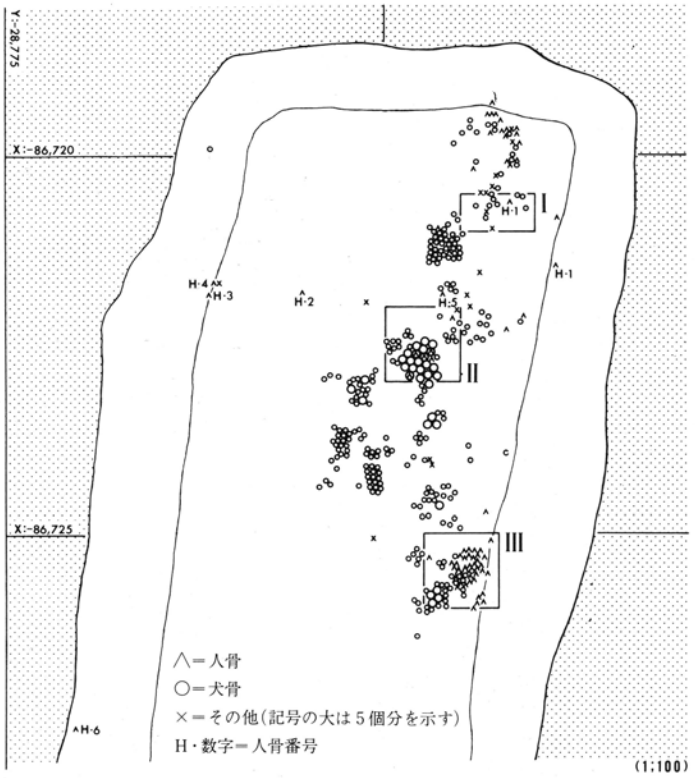
こうした遺物群の投棄された時期は、溝が機能していた時期とは考え難く、溝の廃絶時、即ち「清須越」の始まる慶長15年（1610）前後のことと思われる。



a＝頭骨
b＝下顎骨
c＝肋骨
d＝椎骨
e＝四肢骨
f＝寛骨
x＝その他
（数字は個数を表す）

第1表　人・獣骨類種別構成

（下顎骨は頭骨の一部だが、本論では別に扱った。）

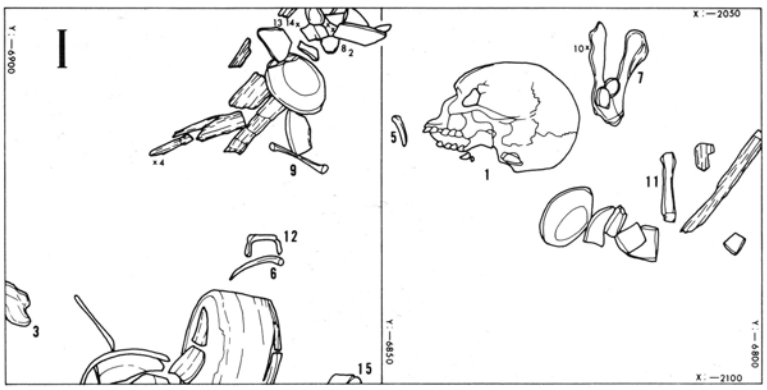


第2図　人・獣骨類出土分布図

ヒト　頭骨　1

イヌ　頭骨　2
下顎骨　3
肋骨　4～6
寛骨　7・8
上腕骨　9
尺骨　10
脛骨　11

カメ　12～15

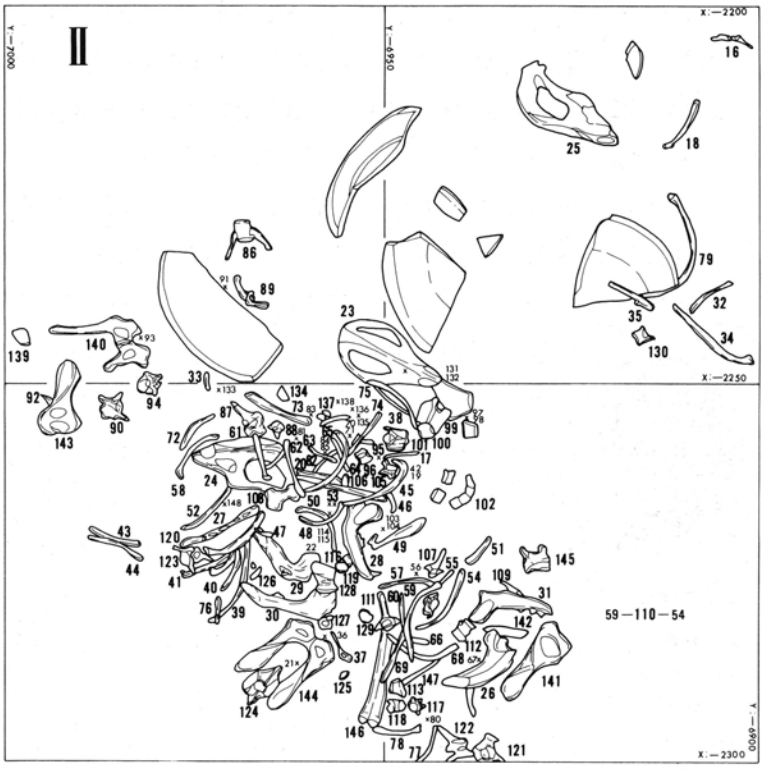


第3図　出土状態図

ヒト　肋　骨　17～22

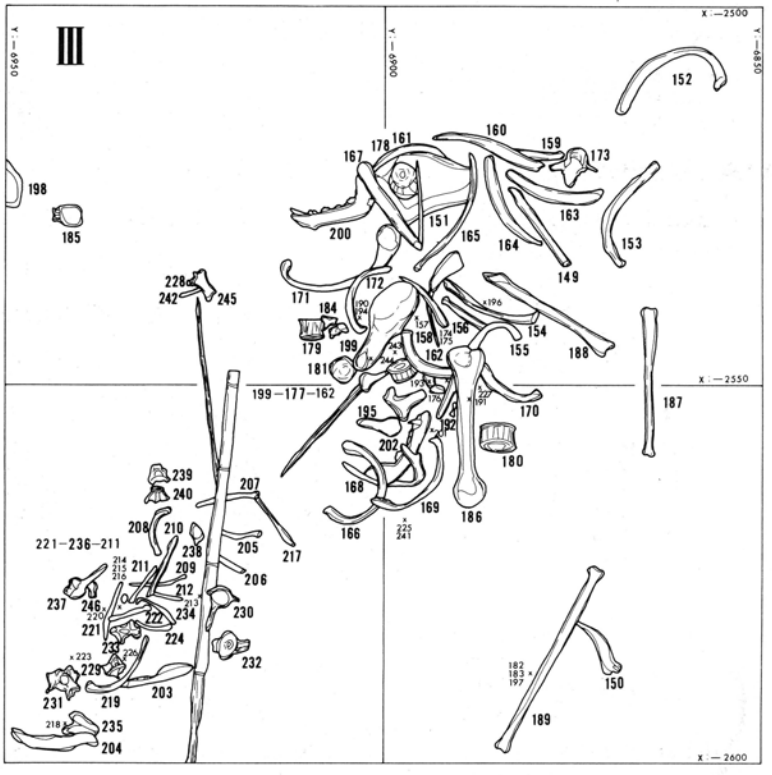
イヌ　頭　骨　23～25
　　下顎骨　26～31
　　肋　骨　32～85
　　椎　骨　86～138
　　寛　骨　139～144
　　仙　骨　145
　　脛　骨　146
　　腓　骨　147
　　歯　148

カメ　16



ヒト　鎖　骨　149・150
　　肩甲骨　151
　　肋　骨　152～172
　　椎　骨　173～183
　　胸　骨　184
　　上腕骨　185・186
　　橈　骨　187
　　尺　骨　188
　　腓　骨　189
　　指　骨　190～192
　　足根骨　193～195
　　趾　骨　196
　　歯　197

イヌ　頭　骨　198・199
　　下顎骨　200～204
　　肋　骨　205～228
　　椎　骨　229～242
　　寛　骨　243・244
　　仙　骨　245
　　歯　246

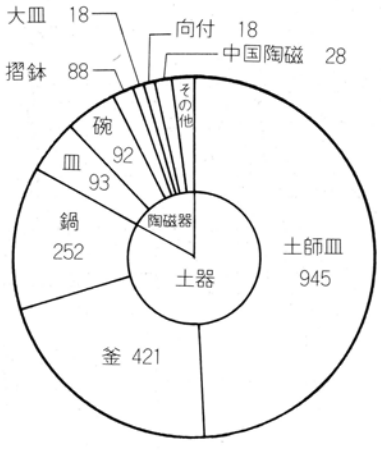


第4図　出土状態図

2．骨以外の遺物

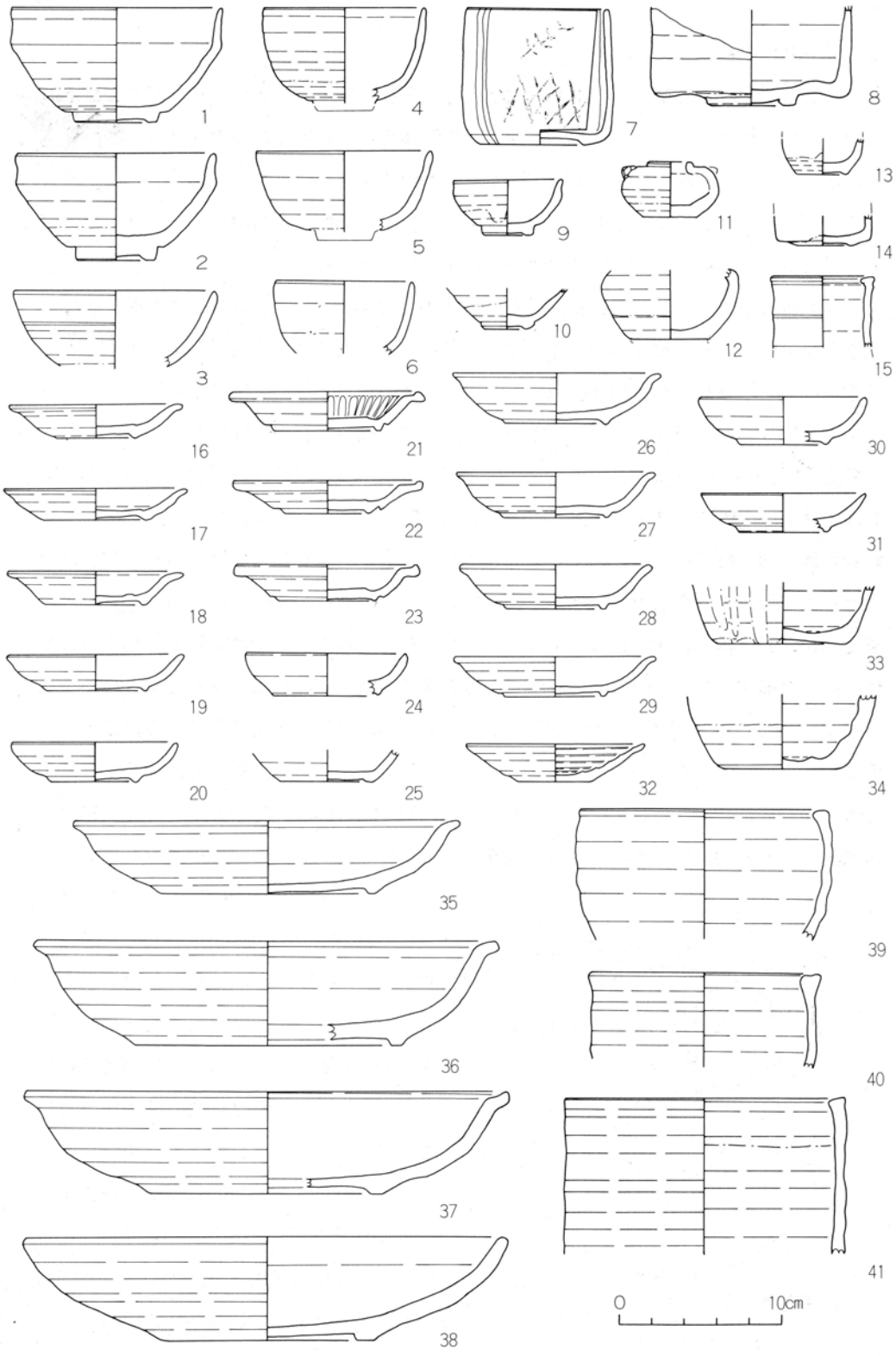
ＳＤ11の下層粘質土中からの出土遺物は、その種類、量ともにきわめて豊富で、なかでも土師質土器が多く、やきものの中では全体の80％を占る。陶磁器類では瀬戸・美濃産の碗、皿、向付、茶入れ、摺鉢や中国陶磁が、土器類では土師質土器の皿、鍋、釜、土製犬、土鈴などが、木製品類では漆器の椀、箸、折敷、杓子、柄杓、曲物桶、下駄、数珠玉、編笠、呪符木簡、柿経、堆黒屈輪文香合蓋などが出土している。

１は鉄釉天目茶碗、２は長石釉天目茶碗、３は灰釉丸碗、４、５は長石釉丸碗、６は鉄絵を下絵に描いた長石釉丸碗、７は一面ごとに鉄絵を下絵に描いた長石釉角向付、８は長石釉茶碗、９は鉄釉小碗、10は灰釉小碗、11は小型の灰釉水注、12は鉄釉水注、13は鉄釉茶入れ、14は長石釉小壺、15は鉄釉香炉、16～20は灰釉皿、21は灰釉菊皿、22、23は灰釉折縁皿、24、25は鉄釉皿、26～31は長石釉皿で、31の内面には鉄絵が下絵に描かれている。32は内面に同心円状の凸帯のある無釉の皿、33、34は鉄釉壺、35は黄瀬戸の鉢、36～38は鉄釉の鉢、39～41は鉄釉水指し、42、43は摺鉢で、これらの瀬戸・美濃産の施釉陶器はいずれも大窯製品で、織部焼の製品は出土していないのである。44～51は土師質土器の鍋、釜で、44、45は羽釜、46～48は三足両耳釜、49～51は内耳鍋で、52は陶製の三足内耳鍋で煤が付いた痕跡はない。53～95は土師質土器の皿で、53～57は耳皿、58～62は底部に穿孔のある手捏小皿で、58では３ケ所の穿孔がある。63～79は底部に糸切り痕の残る皿で、大別すると、大・中・小の三種類があり、中型の中に耳皿が含まれる。80～95は手捏の小皿である。96～101は中国陶磁の染付けで、102～105は土製犬、106は土鈴である。107～109は外面黒漆、内面朱漆の椀で外面に朱漆で鶴などが描かれている。110は内外面とも朱漆の椀であるが、高台内は黒漆で朱漆による文字が見られる。111は黒漆の香合、112は独楽、113は横櫛、115は箸筒で、竹筒の中に114の箸が二膳分はいった状態で出土したが欠損のため上端部は不明である。116は汁杓子、117は飯杓子、118は子供用連歯下駄、119は曲物桶、120は堆黒屈輪文香合蓋で、黒、朱、黒、朱、黒漆の塗り重ねである。121～129は呪符木簡で、この他に柿経の断簡なども出土している。

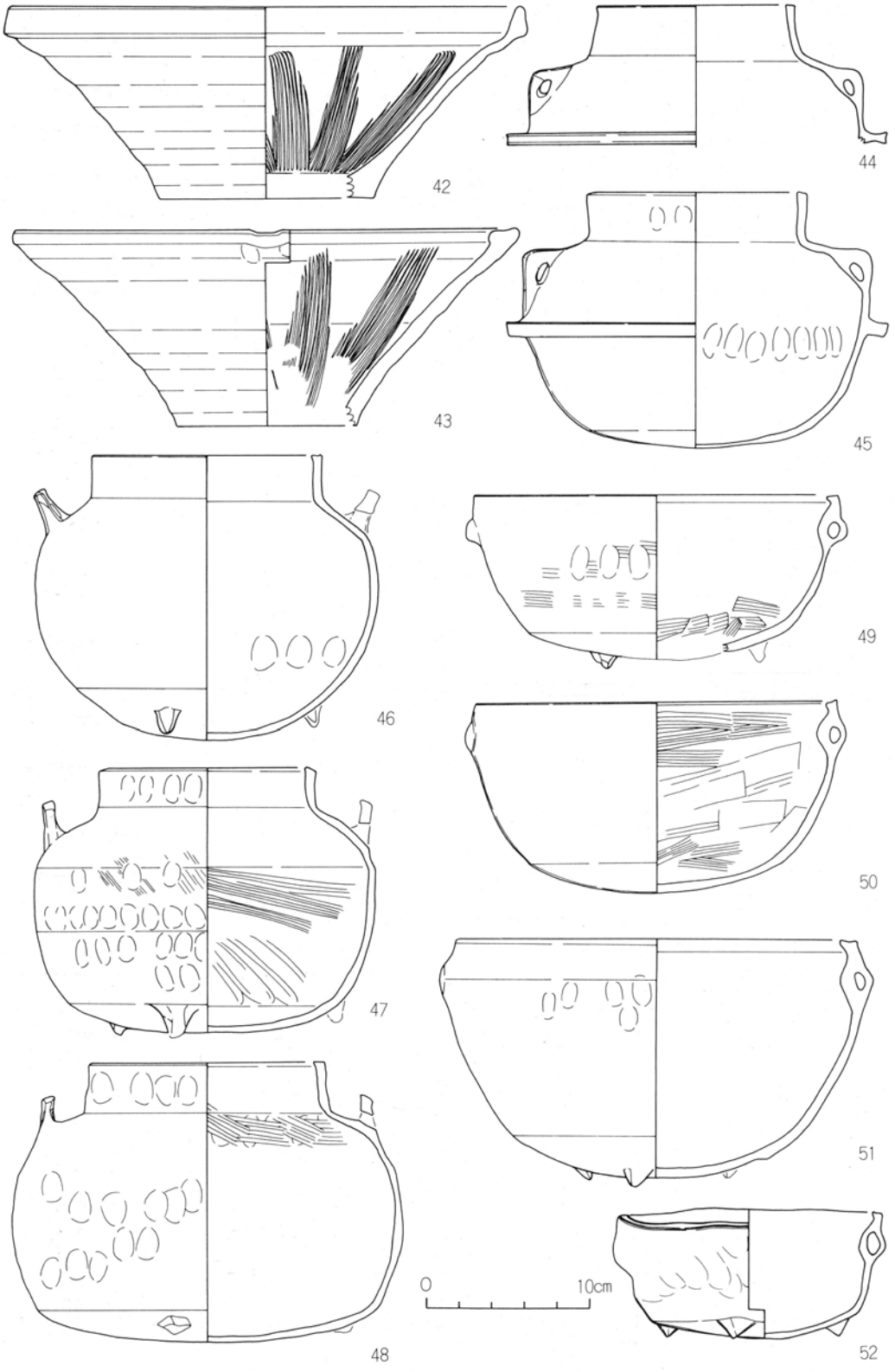


第２表　器種別構成
（数字は破片数を表す）

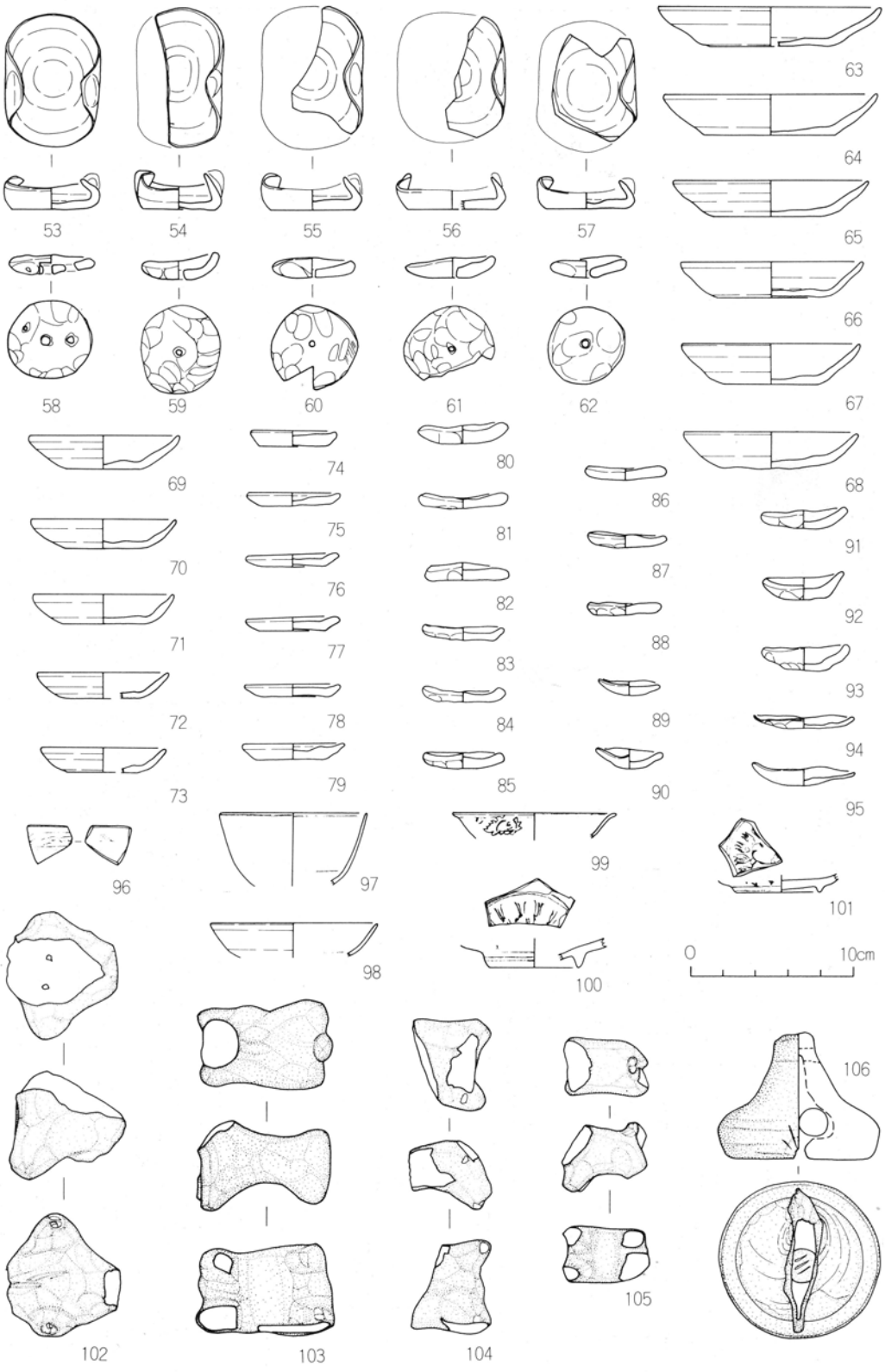
これらの遺物は16世紀の後半から17世紀初頭にかけての良好な一括資料である。


1
4
7
8
2
5
9
11
13
14
3
6
10
12
15
16
21
26
30
17
22
27
31
18
23
28
33
19
24
29
34
20
25
32
35
39
36
40
37
41
38
0
10cm

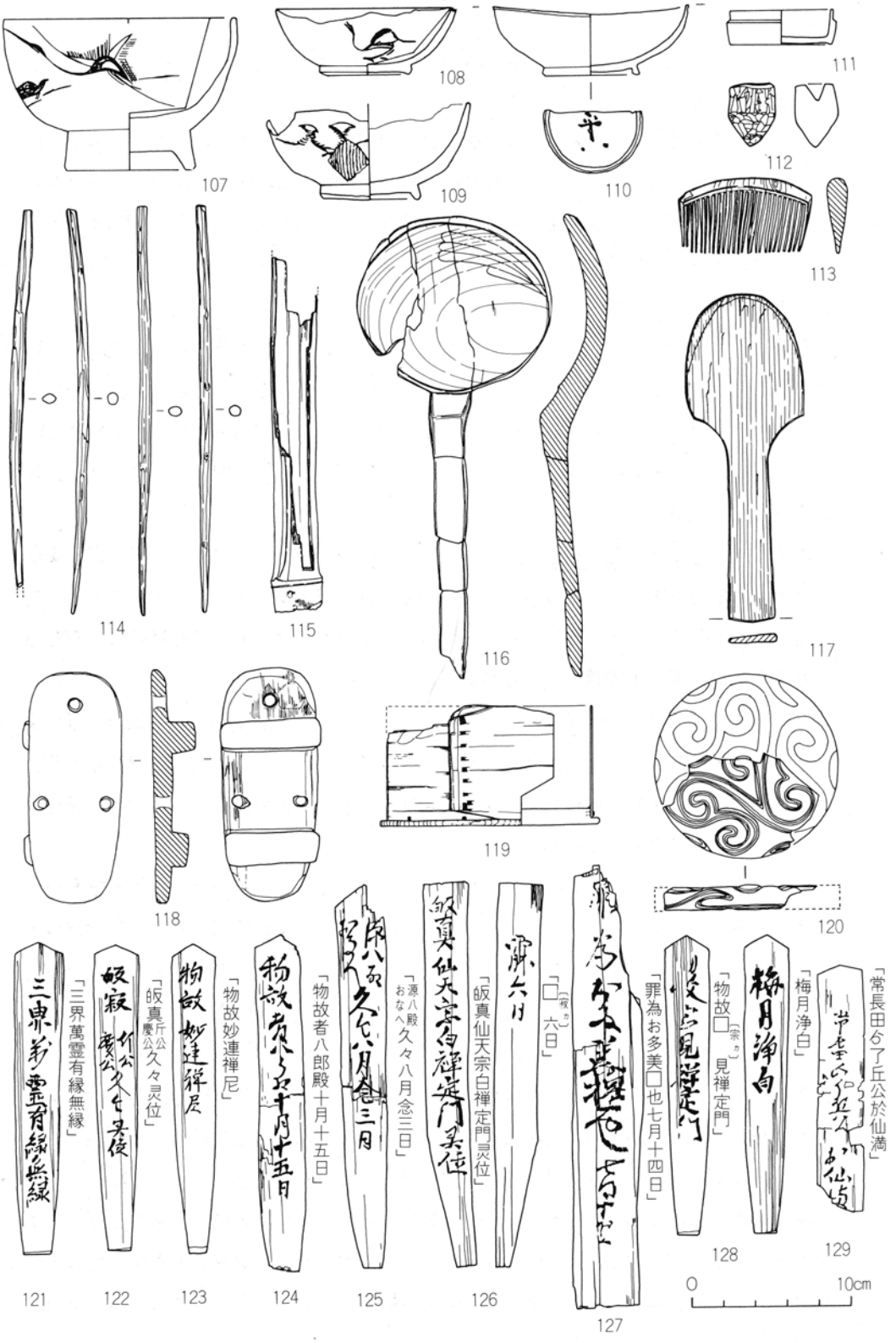
第5図　遺物実測図



第6図　遺物実測図



第7図　遺物実測図(102～106は1/2)



第8図　遺物実測図(120は1/2)

Ⅱ　出土した人骨および犬骨

1．人骨について

以下に述べる人骨の通し番号は、この報告書の記載の便宜上つけられたものであり、採取された順に付されたオリジナル番号は括弧内に記しておいた。後日、採取リストと照合する必要を生じた際に、混乱を招かないようにとの配慮からである（但し、採取リストについては、スペースの関係上、割愛した）。

第１号人骨（No.17、No.22）

熟年女性。出土時には解剖学的配列のあとを留めておらず、東西３ｍ、南北６ｍの範囲内で散乱状態で出土したため、同一個体のものかどうか同定できなかった。しかしクリーニングした結果、これらはすべて同一個体であることが判明し、No.22の下顎骨もNo.17の頭骨の１部であることがわかった。その結果ほぼ全身骨格が揃ったことになり、骨質の保存状態も良好である。

歯式は右 $\frac{M_3\ M_2\ M_1\ P_2\ \times\ \times\ \times}{M_3\ M_2\ M_1\ \times\ \times\ \times\ \times}$ | $\frac{\times\ I_2\ P_1\ \times\ M_1\ M_2\ M_3}{\times\ \times\ \times\ \times\ M_1\ M_2\ M_3}$ 左で、×印は死後脱落し消失した歯を意味する。脱落したあとの歯槽には、泥土がぎっしり詰まっており、投棄時にすでに脱落していた可能性がある。残存している歯は、すべて軽度の磨耗が認められるが、象牙質にまで達していない。

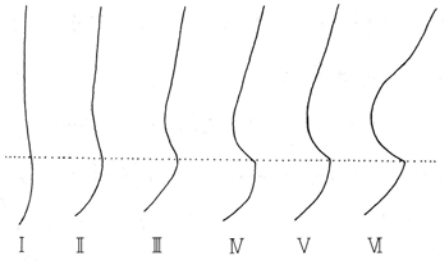
頭骨上面観はSergiの分類によると「菱形」に属し、頭示数は76.57で、長頭に近い中頭。Pterionの部分には、左右ともにかなりよく発達したOs epiptericumが存在する。

前頭部は丸味があり、前頭結節の発達が強度ではないが認められる。眉上弓の発達は弱く、Broca　Ⅱ型（第９図a）。

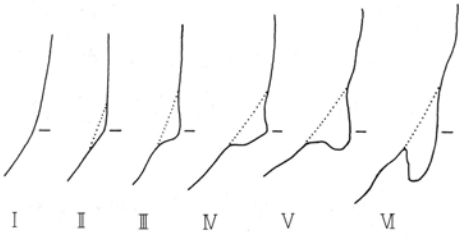
顔面部全体は頬骨弓の側方への張り出しもつよくはなく、きゃ奢で小柄な印象を受けるが、眼窩下部のくぼみ（Fossa suborbitalis）はめだち、鼻背部はかなり隆起がつよく、全体として彫りの深い顔貌の持主だったらしい。古墳時代や中世に多く見られる扁平な顔つきのなかでは、かなりめだったものと思われる（図版Ⅱ、１a）。

Kollmann の顔示数81.22、上顔示数49.27にもみられるように、低顔である。しかし低顔ではあるが顔幅が小さいために、眼窩高が大きい印象を受け、それは眼窩示数90.37にも反映しており、高眼窩 hypsikonch に属する。眼窩軸は外側に向かって中程度に下がっているが、これも顔幅の発達がよわいことと関係があると思われる（図版Ⅱ、１b）。

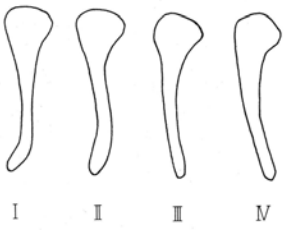
鼻部は鼻示数49.19で中鼻 mesorrhin に属する。鼻背部は側面観では凹から凸へとS状カーブを示し、Rhinion はNasospinale よりもかなりつよく前突しており、この時代の女性では稀有なほど、鼻すじが通っていて、隆起もつよかったと考えられる（図版Ⅱ、１a）。



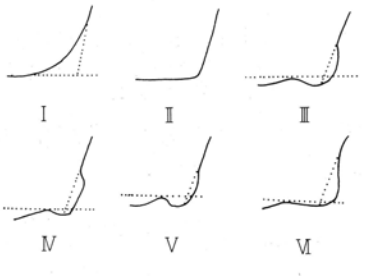
a．眉上弓の発達度 (Broca)



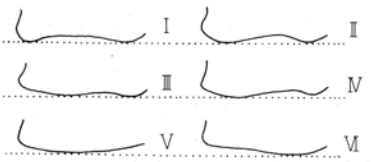
b．外後頭結節の発達度 (Broca)



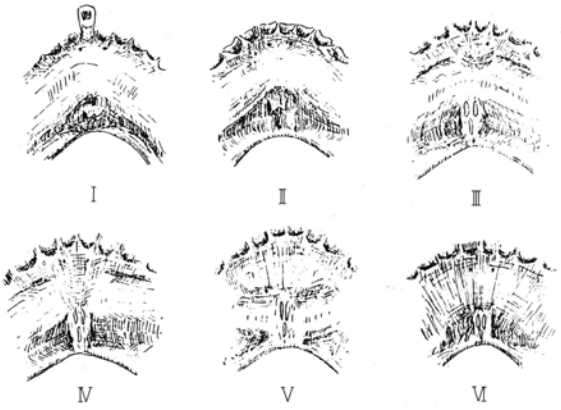
c　下顎枝後縁部の形態 (H. E. Schultz)



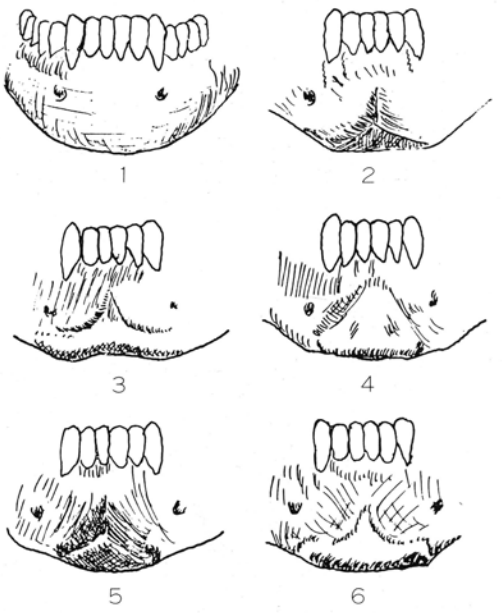
d．下顎角部の形態 (H. E. Schultz)



e　下顎下縁部の形態 (Keiter)



f．下顎前内側面の形態 (Ehara)



g．オトガイ三角の形態 (H. E. Schultz)

第9図　頭骨各形質の分類規準

乳様突起は中程度の発達で、外耳孔は卵円形である。

後頭部では、とくに後頭平面 Planum occipitale の膨隆がめだつが、外後頭結節そのものは、さほどつよくはなく、Broca Ⅱ型を示す（第９図b)。

下顎骨は全体として小さい印象を受け、とくにThomsonの下顎示数は64.92でdolicho-stenomandibular。下顎枝後縁部はＳ状カーブを示し、H. E. Schultz Ⅱ型（第９図c)。下顎角部では下顎前切痕および下顎上切痕がよく発達し、Schultz Ⅲ型（第９図d)。下顎骨下縁部では Torus marginalis がよく発達しており、Keiter Ⅲ型（第９図e)。E-minentia Lateralis の発達もいちじるしい。下顎前部の側面観では切歯歯槽部の前突がつよい。オトガイ三角Mentum trigonumはSchultz３型（第９図g)。下顎前内側面では、切歯歯槽部が前上方に向くため、Torus transversus superiorが存在するかのようにみえる。切歯が脱落しているため、わかりにくいが歯槽突顎性がある程度発達していたと思われる、Ehara Ⅰ型（第９図f)。

大腿骨最大長（374㎜）に基き、Pearson 推定式で身長を計算すると145.59㎝で、現代近畿人女性の平均約 146㎝と比較して、あまり違いが認められない。

第３表　第１号人骨（頭骨）計測値

1	g-op	175.0	40	ba-pr	96.5	61	上顎歯槽幅	60.9
2	n-ba	95.5	43	fmt-fmt	101.8	62	ol-sta	40.5
8	eu-eu	134.0	45	zy-zy	130.5	63	上口蓋幅	27.1
	頭示数	76.57	46	zm-zm	98.1	65	kdl-kdl	110.9
9	ft-ft	86.9	47	n-gn	106.0	66	go-go	89.7
11	au-au	120.6		顔示数47／45	81.22	68	下顎長	72.0
12	ast-ast	106.4	48	n-pr	64.3		下顎示数68／65	59.96
17	ba-b	128.0		上顎示数48／45	49.27	69	id-gn	26.4
23	頭周囲	495.0	50	mf-mf	23.9	70	go-kond	59.3
25	n-o 弧	352.0	51	mf-ek	37.4	71	下顎枝幅	35.8
26	n-b 弧	125.0	52	眼窩高	33.8	72	下顎枝角	115.0°
27	b-l 弧	125.0		眼窩示数52／51	90.37			
28	l-b 弧	102.0	54	鼻　幅	24.4			
29	n-b 弦	109.0	55	n-ns	49.6			
30	b-l 弦	110.9	60	pr-alv	52.0			
31	l-o 弦	86.3						

第２号人骨（No.１）

熟年女性。顔面頭蓋部は破損消失し、頭蓋底部をともなう脳頭蓋部(Calvaria)のみ残存。

骨質保存度はふつう。矢状縫合の閉鎖はかなり進行しており、熟年と推定。

上面観では頭蓋の輪郭はかなり歪んでいるが、これは生前からのものと思われる。(図版Ⅱ、２c)。頭示数74.58で長頭である。

前頭部は丸味を帯びて膨隆しており(図版Ⅱ、２a)、前頭結節がある程度認められる。頭頂結節はきわめて顕著である。眉上弓の発達はよわく、Broca Ⅱ型（第９図a)。

乳様突起は小さく、外耳孔は卵円形である。

後頭部とくに後頭平面の膨隆がつよく、丸味があり、外後頭結節はBroca Ⅲ型(第９図、b）に属する。

第4表 第2号人骨(頭骨)計測値

1 g - op	177.0	11 au - au	110.0	26 n - b 弧	121.0
2 n - ba	94.4	12 ast - ast	109.1	27 b - l 弧	133.5
8 eu - eu	132.0	17 ba - b	125.5	28 l - o 弧	105.5
頭示数	74.58	23 頭周囲	491.0	29 n - b 弧	105.1
9 ft - ft	94.9	25 n - o 弧	360.0	30 b - l 弦	120.5
				31 l - o 弦	89.2

第3号人骨 (No.9)

脳頭蓋部(頭蓋底は欠如)と左顔面の1部からなるが、破損と変形がいちじるしく、骨質も脆くなっている(図版Ⅱ、3)。縫合閉鎖はかなり進行しており、熟年もしくは老年女性と推定される。すぐ傍から下顎骨(第4号人骨、後述)が出土しているが別個体。両者とも骨化したものが投棄されたものと考えると辻褄が合う。

前頭部は膨隆し、丸味がつよく、前頭結節が認められる。眉上部の発達はほとんどみられない。頭頂結節の発達はあまりつよくない。乳様突起は小さく、外耳孔は卵円形を呈する。

顔面部では左眼窩の部分が残存しており、それによると眼窩軸は外側に下がっていることがわかる。左鼻部の1部が残っており、第1号人骨と同じように、鼻根部の切れ込みはつよくなく扁平に近いが、鼻背部はかなり隆起していたと思われる。

第4号人骨 (No.2)

下顎骨。第3号人骨(頭骨)のすぐ傍から出土したが、いちじるしく推定年令を異にしており、別個体と見做すべきであろう。

この下顎骨では、左右の下顎枝は欠如している。下顎体の形状から、多分成人女性のものと思われる(図版Ⅱ、4a、b)。

左第3大臼歯部が残存しているが、第3大臼歯は歯槽内に埋没しており、第2大臼歯にさえぎられて萌出できなかった可能性がある(図版Ⅱ、4c)。附近から上顎左右中切歯および右上顎犬歯が遊離して出土しているが、磨耗があまりなく、第2号人骨と同一個体のものの可能性もある。

下顎下縁部ではTorus marginalis がよく発達しており、側面観ではKeiter Ⅲ型に属する(第9図、e)。オトガイ三角Mentum trigonum の形態はSchultz 6型(第9図g)。下顎体前内面部ではPars incisiva がよく発達しており、Ehara Ⅵ型(第9図f)。

第5号人骨 (No.10)

頭蓋底部の大後頭孔の左側が破損欠如しているが、顔面部はすべて残っている。乳歯列は完成しているが、永久歯は未萌出で、5～6才の幼児。性不明(図版Ⅱ、5a、b、c)。

いちじるしく長頭で、頭示数は約72.6。頭頂結節はよく発達しており、後頭部は紡錘

状に後方に突出。俗にいう、いちじるしい「才槌頭」である。

第６号人骨（No.100）

ＳＤ11の西側境界附近で、他の人骨や犬骨とはかなり離れて、寛骨の１部と関節した状態で、左大腿骨１本だけが出土した（図版Ⅱ、６）。

その骨体部後面には、きわめて鋭利な刃物で、近位部から遠位部にかけて外側上方から内側下方へと、斜めに約５cmの等間隔で、しかも平行に深い切り込みがつけられており、最遠位部の４ケ所目の位置で大腿骨は完全に、しかも鋭利に切断されている。

この部分は人体中でも筋肉の被覆のもっとも肥厚した部分であり、また切り込み個所がはつり取られていることから、死体もしくは死後骨化したものを損傷したと考えられる。その意味するところは不明である。

2．犬骨について

犬骨は人骨と重複するかたちで、粒土の細かいシルト状土壌中から出土。

頭骨・寛骨のほかに、多数の肋骨や椎骨が群塊状態で発見されたが、四肢の長管骨で見るかぎり、若令個体はきわめて少い。肩甲骨は皆無である。しかも解剖学的配列を示さないので、人骨の場合と同じように、すでに骨化したものがまとめて投棄されたらしい。

クリーニング後、確認したところでは、頭骨と下顎骨は15体分あるが、そのうち12対を対応させることができた。寛骨は13個体分が認められている。綜合して少なくとも18個体分と考えられるが、頭骨と寛骨の対応は不可能で、それら以外の個体が含まれている可能性も排除できない。

性別はオス３個体、メス６個体、オスらしきもの２個体、不明２個体。

今回出土した犬骨には、かなり大きな個体変異が認められたことは、特筆に値しよう。

なおこれらの個々の計測データは、「朝日西遺跡出土の犬骨について」の題名のもとに、人類学雑誌94巻３号に掲載されることになっているので、詳細はそれにゆずることにしたい。

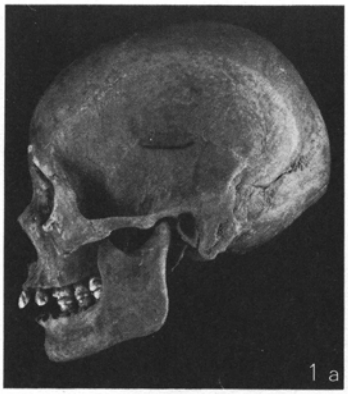
3．結　語

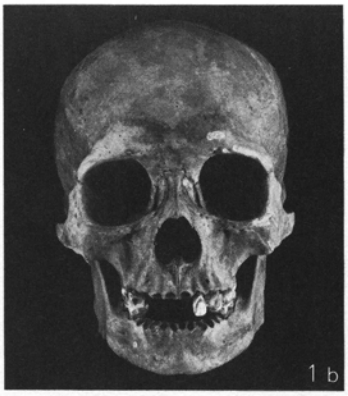
すでに述べてきた人骨や犬骨が、「清須越」に際して、まとめて投棄されたものらしいことは明らかである。

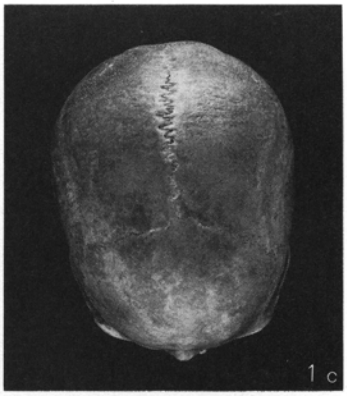
多数まとまって出土した犬骨にかなり大きな個体的変異が認められるのは、すでにこの時期に、在来犬に混って外来犬が持ち込まれた記録もあるので、興味がある。

しかし、これらの犬骨が大量にまとめて投棄された理由は何か、人骨と混在している理由や、損傷された大腿骨が何を意味するかなど、今後多方面からのアプローチが必要になることだろう。



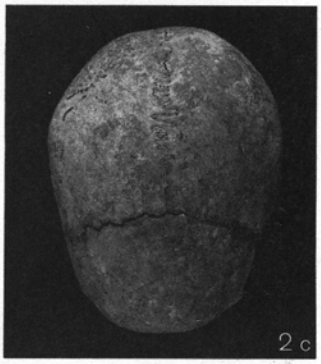

1a


1b

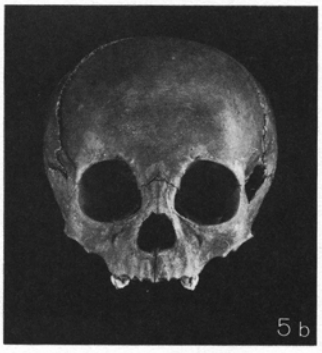

1c

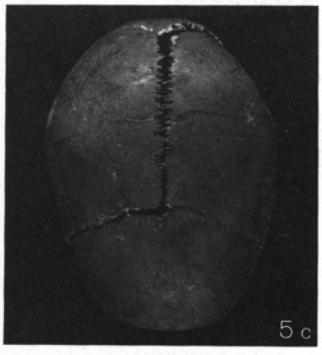

2a

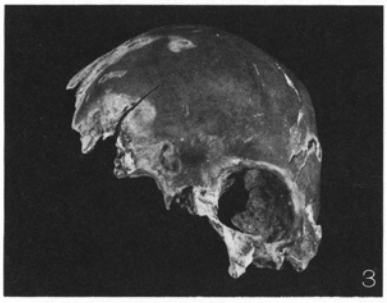

2b

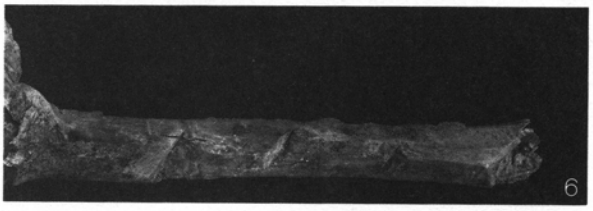

2c


5a

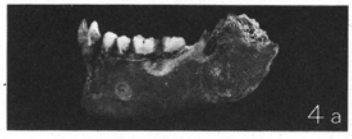

5b

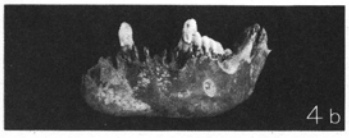

5c

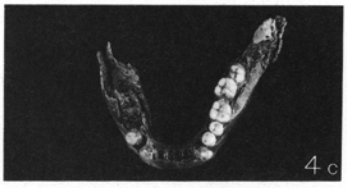

3


6

S=1：4


4a


4b


4c

朝日西遺跡の井戸について

長島　広

1

水は生物の生活の上で最も基本的な物質である。水は人々の生に直結しており、水そのものやそれに付随する施設も人々の日常の信仰の対象となってきた。人々にとって最も水の得やすい川岸は洪水・氾濫などあまり居住に適した場所ではなかったようである。特にここ尾張平野はその背後に3つの主要河川が控え、名古屋台地との境にも2つの1級河川が流れている非常に水源には恵まれ、地下の水脈も豊富な地域である。標高5m以下の微高地上に展開した遺跡群には（特に中・近世を中心として）安定して安全な水源を確保するために数多くの井戸が作られてきた。

今回この小稿で取り上げるのは朝日西遺跡で調査されたものである。全国的にも屈指の規模を誇る弥生期の一大拠点集落遺跡である朝日遺跡を東方に望む朝日西遺跡は木曽川水系の三角洲平野上にのる後背湿地から古墳時代以降に堆積した五条川の自然堤防帯の間に位置する中世から近世にかけてを中心とする時期に盛行した遺跡である。一般国道302号線建設に伴う発掘調査が昭和56年から昭和60年まで約20,000㎡ほど行なわれたこの遺跡は標高4.0m前後にのり11世紀から15世紀にかけてのⅠ期、16世紀から17世紀初頭の大窯期および登窯Ⅰ期までのⅡ期、江戸から幕末にかけてのⅢ期まで綿々と続く(1)。検出された井戸の総数は87基で現代井戸が6基、時期不明のものが4基である。

井戸の研究は古くは鳥居龍蔵(2)に始まり、近年では宇野隆夫(3)によって全国に渡った井戸の集成および形式分類がなされている。その中で宇野氏は井戸の内部構造物に着目して、内部構造物のみの形式分類をすることによって井戸全体の分類の基準としている。また井戸の部分名称(4)を三つに区分し、上から井桁、井戸側、水溜という呼称を用いている。朝日西遺跡およびその周辺の遺跡群での調査例では地上施設である井桁が残存していた事例はない。井壁保護の施設である井戸側と底の施設である水溜との相違が不明瞭であるため、地下に埋設されている構造物は全て内部構造物という呼称を用いるが、内部構造物が2種類ある場合、例えば木枠と曲物のセットなど上部を木枠井戸側、下部を曲物といった呼称を用いる場合もある。この小稿では内部構造物の細かな分類は行わず、遺構として現われた井戸の平面形態と内部構造物をセットとして朝日西遺跡の井戸の様相を検討してみたい。

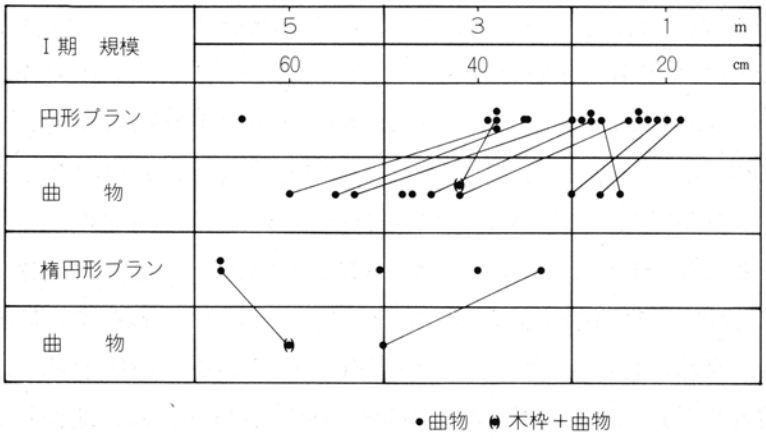
2

ここでは、朝日西遺跡における I 期とされている時期すなわち瀬戸・美濃の施釉陶器でいう大窯期以前で、灰釉陶器の末期からいわゆる山茶椀を主体とする時期を取扱う。

さて朝日西遺跡の I期の井戸は総計28基で、時期不明及び現代井戸を除いた総数の約36.4％を占める。その内訳は、内部構造物を有するものが19基（約67.9％）、内部構造物がないものが９基（約32.4％）を占める。内部構造物を有するものの中では円形曲物のみが16基（57.1％）と最も多く、方形木組の井戸側と曲物が一対となったものが１基（3.6％）、半裁した竹を縦に並べて方形に組んだ井戸側と曲物が一対になったものが１基（3.6％）検出されている。

また内部構造物のうち曲物を有していた19基のなかで曲物の直径が計測可能なもの14基についてその規模を比較してみると11基が径42cm～60cmの間にあり、47cm～50cmを中心に分布している。残る３基は径25cm～30cmの小型曲物をもつもので平面プランは円形で0.85m～1.68mの掘り肩をもち、深さは検出面から0.40m ～0.46ｍを測り、曲物ばかりでなく井戸そのものも小型で浅い。これらの小型井戸は59Ｂ区に集中してみられ、他にも同じ59Ｂ区で内部構造物が検出されなかったり、曲物の規模が不明であるものの中で円形の平面プランで径が1.0m ～1.3m の小型の掘り肩をもつものが４基存在するのは強ち偶然ではなかろう。

次にⅠ期の井戸の平面プランについてみると、円形のプランを有するものが22基(78.6％)楕円形[5]のプランを持つものが５基（17.9％）、 不明１基（3.6％）で円形プランのものについては60Ｂ区の１基を除いた他のものは径が0.85m ～2.9m 以内に収まり、更に単に規

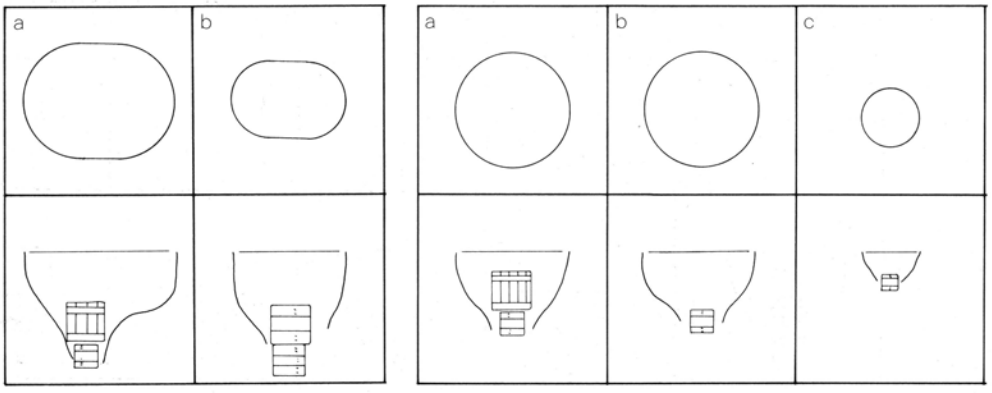


Ⅰ期　井戸規模分布図

模だけでみると0.85m～2.0mまでのもの12基（42.9%）と2.45m～2.9mのもの6基(21.4%）とに区分できる。楕円形のプランを有するⅠ期の井戸は朝日西遺跡の中では最大規模の長軸で5.75mを測る2基（7.1%）と長軸4.05mを測る1基（3.56%）があり、楕円形プランのⅠ期の井戸は概して大型であるといえる。

以上に基づいてⅠ期の井戸の平面形態と内部構造物とを組み合わせたモデルを想定すると次のようになる。Ⅰ類：楕円形の平面プランを有するもの、a．長軸4m以上の大型で木枠井戸側と曲物のセットを持ったもの、b．長軸3m以下の平面プランで曲物積み上げのもの、Ⅱ類：円形の平面プランを有するもの、a．3m径以下の中型平面プランで木枠井戸側と曲物のセットを持つもの、b．3m径以下の中型平面プランで曲物積み上げのもの、c 2m径以下で1m径前後を中心とした小型平面プランを持ち、30cm径以下の小型曲物積み上げのものに分類できる。

Ⅰ期Ⅰ類　　Ⅰ期Ⅱ類

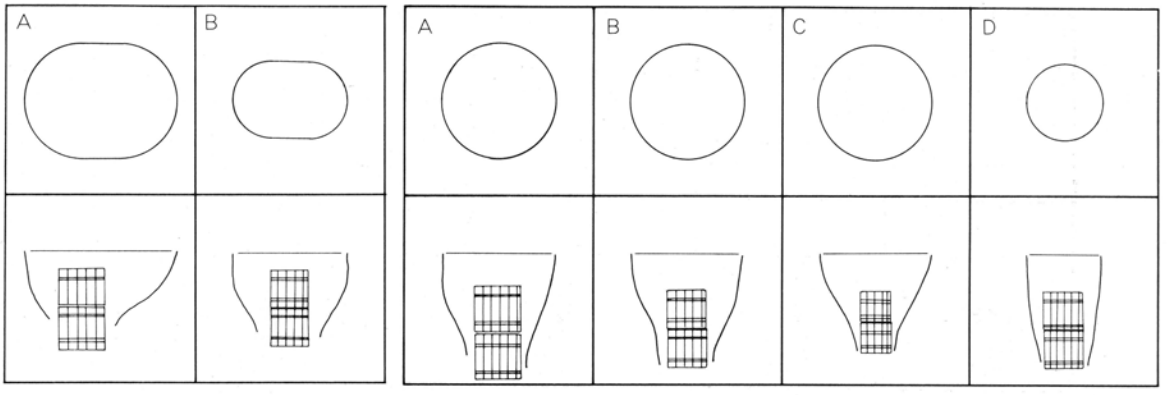


Ⅰ期　井戸モデル分類

Ⅰ期

58				
	05	円	1.9×1.7	
59A				
	14 曲物(38・47)	円	2.5×0.82	
	15 曲物60	円	1.80×1.80	竹の井側(65×67)
	16 曲物45	円	--×0.7	
	17 曲物48	円	--×0.38	
	18	円	2.15×1.98	
	19	円	2.8×1.3	
59B				
	SE01 曲物(小)	円	--×----	
	02	楕円	3.0(2.1)×1.35	
	03 曲物25	円	1.68×0.46	
	05 曲物27	円	0.85×0.45	
	09	円	1.0×0.84	
	10 曲物42	円	2.82×0.51	木組井側(90×95)
	11 曲物42	円	1.4×0.57	
	12 曲物	円	1.1×0.33	
58SK02	曲物45	円	1.8×1.19	
	03 曲物50	楕円	2.35(1.9)×0.75	
	05 曲物	円	1.3×？	
	09 曲物30	円	1.31×0.4	
59C				
	07	円	2.80×1.34	
59D				
	11 曲物	円	1.80×0.37	
59E				
	SE01 曲物55	円	2.45×1.5	
	SK03			
$59E_2$				
	03 (165) pit	楕円	5.75(4.28)×1.59	
	06 53pit	楕円	4.05(2.90)×0.86	
60A				
	04 曲物53	円	2.08×0.66	
60B				
	SE01 曲物60	楕円	5.75(4.00)×2.18	木組井側(1.0×1.0)
	曲物	円	5.55×0.94	

ここでは朝日西遺跡のⅡ期とⅢ期すなわち清洲城下町の時代と朝日の宿場町の時代とを取り上げる。Ⅱ期及びⅢ期として確認された井戸の総数は49基で、全体の56.3%現代及び時期不明のものを除いたうちの63.6%を占める。その中でⅡ期に属するものが44基（現代及び時期不明のものを除いた数＝以下総数の57.1%）Ⅲ期に属するものが５基(総数の5.7%）である。Ⅱ期のもので内部構造物を有するものの内訳は、桶を検出したものが10基（22.7%)、桶を締めるための竹のタガのみを検出したものが７基（15.9%)、下部が桶でその上に桶よりやや小さい方形に組んだ木枠をのせたものが１基（2.3%)、縦に半裁した竹を方形に組んで井戸側にしたものが１基（2.3%)方形に組んだ薄板のみ確認したものが１基(2.3%)である。このうちの桶の規模が確認できた９基の桶を比較してみると、直径が80cm以上のものが３基、60～73cm径のものが４基50～53cm径のものが２基数えられる。またタガのみ検出したものの中でタガの直径が確認できたものが３基あるが、それら



Ⅱ期　井戸モデル分類

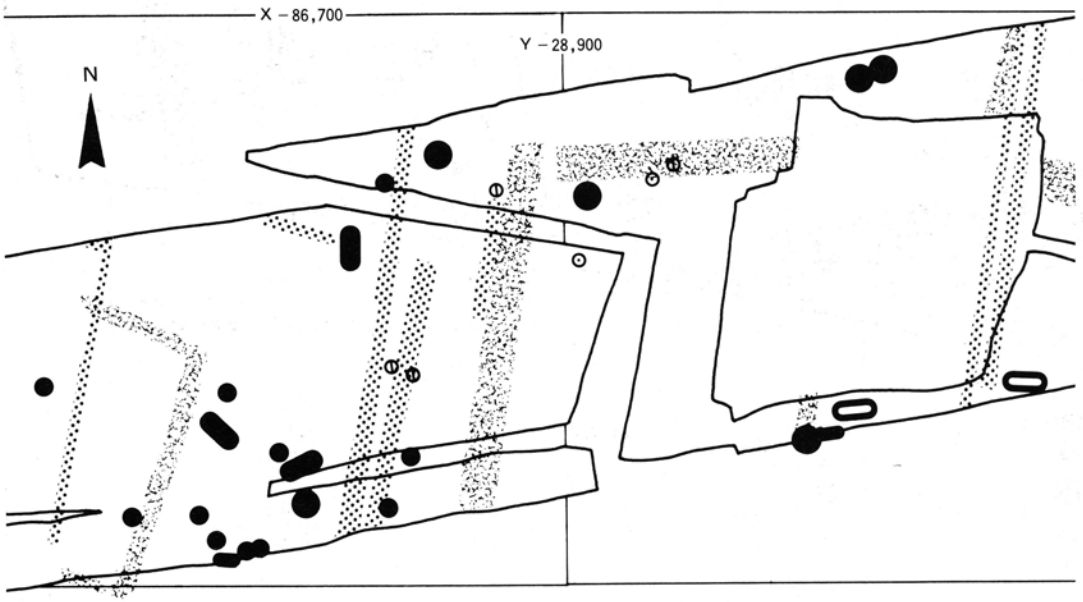
Ⅱ期

57					
	002		円	1.0×1.7	
	004	桶(80)5段	楕円	4.6×3.9	
	005	桶(80)	円	2.6×2.4	
58					
	02	桶(69)(73)	楕円	5.0(3.3)×2.7	
	03		楕円	5.0(3.3)×1.1	
	04		円	3.2×2.2	
	06		円	3.0×0.7	
59A					
	SE13	タガ	円	2.45×0.73	ザル
59B					
	04	桶(50)	円	2.85×2.9	
	06		楕円	1.9(1.6)×0.84	
07	07		円	4.02×0.94	方形半裁竹井側(90×90)
	08		円	1.2×0.72	
59C					
	SK04		円	1.65×0.55	
	05		円	2.90×1.37	
	09		円	2.70×1.20	
	15	タガ	円	1.80×1.19	
	37		楕円	1.30×0.6	ザル
59D					
	SE02		円	--×1.36	
	SK04	タガ(65)	円	3.87×1.08	
59E					
	41	タガ	円	3.40×1.06	
	79	桶	円	2.20×1.04	
	80	桶	円		
	57	桶(60)	円	1.65×0.67	木組井側(50×50)
	98	タガ(60)	楕円	2.60(2.20)×1.18	
	100		円	1.30×1.19	
	101		楕円	2.50(1.75)×1.19	
	105		円	2.90×1.52	薄板(1.1×0.85)
	106	タガ	楕円		
$59E_2$					
	SE02	桶(53)	円	3.50×2.38	
	08	(80)pit	円	3.05×1.54	
	09	桶(81)	円	3.65×1.21	
	SK216		楕円	2.70(?)×0.87	
59F					
	SK11		楕円	2.60(2.30)×1.41	
	39	タガ(63)	円	4.20×0.91	
	49	桶(60)	円	3.50×0.87	
59G					
	SE01		円	2.75×0.60	
	03		楕円	4.14×0.44	
	04		円	2.30×1.00	
	06		楕円	2.65×0.85	
	07		楕円	1.96(1.75)×1.05	
	08		円	2.40×1.12	
	09		円	1.85×1.16	
	SK34	桶	円	2.20×1.08	
60A					
	11	桶(60)	円	2.65×0.72	

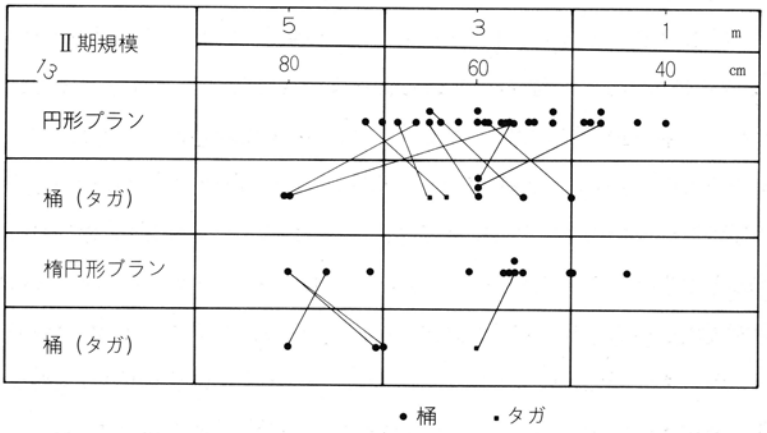
は何れも60～65cmの間にある。Ⅲ期のものについては、タガを検出したものが３基あるのみで、そのうち１基が40cm径であった。また現代井戸として確認された59Ｅ、SK108は上部が土管で下部が桶という内部構造物を持ち、桶が井戸の内部構造として近年まで使用されていたことを想定させる。

次にⅠ期の場合と同様に平面プランについてみると、円形プランを有するものが 30 基（68.2%）楕円形プランを有するものが13基（29.5%）である。円形プランのものは 1.0～4.2m まで直径はまちまちであるが、おおよそ次の３つに分けられる。すなわち 1.0 ～1.85m 径のもの６基（20.0%）、2.2～3.0m 径で2.7m 径を中心としたもの12基（40.0%）3.2～4.2m 径のもの７基（23.3%）である。楕円形プランのものについても以下の３つのグループに分類が可能である。すなわち長軸で1.3～2.0m のもの３基（23.1%）、 2.5 ～3.1m で2.6m を中心としたものが６基（46.2%）、4.15～5.0m のもの４基（30.8%）である。更に桶の規模と平面プランの規模とを総合して類型化すると、Ⅰ類：楕円形の平面プランを持つもの、Ａ．長軸4.0m 以上の大型平面プランで70cm径以上の大型桶を積み上げたもの、Ｂ．長軸３m 以下の平面プランで60cm径前後の中型桶を積み上げたもの、Ⅱ類：

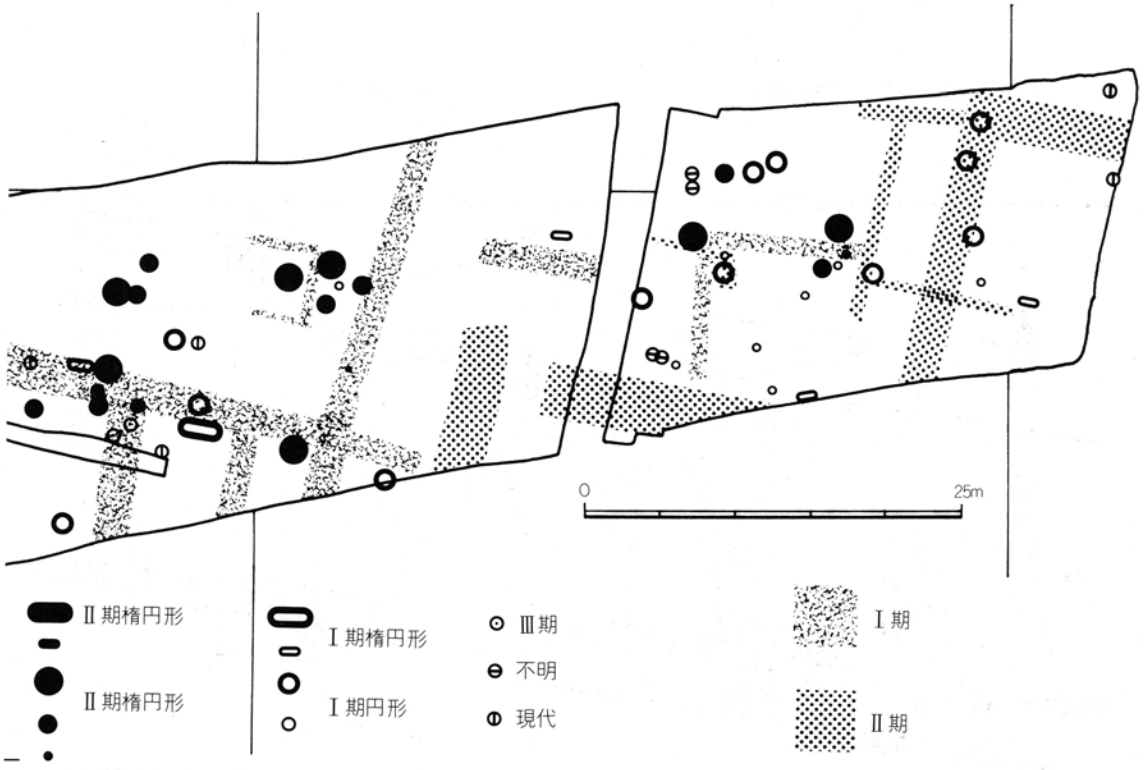
朝日西遺跡の井戸と溝



円形の平面プランを持つもの、A　2.6m 径以上の中型平面プランで80cm径以上の大型桶を持つもの、B　2.6m 径以上の中型平面プランで60cm径～70cm径の中型桶を持つもの、C　2.8m 以上の中型平面プランで50cm径～60cm径の小型桶を持つもの、D　2.0m 以下の小型平面プランで60cm径前後の中型桶を持つもの、に分類できる。



Ⅱ期　井戸規模分布図



4

本稿では井戸の類型を行なったわけであるが、その具体的な時期についての言及は行わず、大まかにⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期という朝日西遺跡の時期区分を適用した。Ⅰ期・Ⅱ期という区分はもちろん出土遺物等によって分けたものであるが、今回の類型から除外した特殊な内部構造物を有するものについて少し触れる必要がある。すなわちⅠ期として取り上げた竹の井戸側と曲物を持つものであり、その出土遺物は山茶椀を主体とするが若干ながら窯窯製品を含み、15世紀代のものと思われる。Ⅱ期として取り上げた半裁竹を方形に組んだものは、窖窯製品が主体であり、上部が木枠で下部が桶のものも15世紀末の遺物が主体となっている。また薄板のみ残存していたⅡ期の井戸も15世紀代のものと考えられ、奇しくも15世紀代、すなわち社会的に中世から近世への転換期に特殊な内部構造物を持ったものが表われる。

内部構造物そのものに関する問題は今回は取り上げなかったが、今後の検討課題となってくるであろう。例えば木枠の組み方による時期差・地域差の問題や曲物が転用されたものか井戸専用に制作されたものか等細かな問題が残っている。さらに井戸と溝との関係も中・近世の屋敷地の様相を知る上で重要な検討課題である。

朝日西遺跡を含めて、尾張低湿地上にある遺跡群は井戸を築造する際に非常に似通った条件下にある。すなわち海抜0m付近に存在する上部砂層(6)にまで掘り下げれば、水質の善し悪しは別として容易に地下水を得ることができることや、近くに石材がなく礫層のように地盤がしっかりせず、非常に軟弱な砂層と泥層の上に立地しているため石材を用いた内部構造物は不向きで、内部構造物はほとんど木材(7)が使用されている等、尾張低湿地という一つの特殊な地理的環境が井戸の様相を規定する大きな要素となっているといえる。また内部構造物が検出されなかったものがかなりの数量を占めるが、これについては尾張低湿地の湧水量を考えると素掘りで放置したものなどは1～2日で崩壊してしまってとても井戸として機能しない。すなわち全ての井戸には何等かの内部構造物があったと考えられる。さらに内部構造物を有するものでも、最下部のみ残存していた例が多いのは、井戸を廃絶する際に何等かの形で廃絶儀礼が行なわれ、その内部構造物を抜き取り、湧水等によって最後まで抜ききれなかったものが残存していたと思われる。換言すれば尾張低湿地で検出される井戸は使用時の破壊と廃絶時の儀礼を経てきたものであると言える。朝日西遺跡では廃絶儀礼の際に投棄されたと思われる墨書土器類の出土はみられなかったが五条川をはさんだ対岸の清洲城下町遺跡や土田遺跡、甚目寺町の阿弥陀寺遺跡等にはかなりみられる。これらのことは、井戸と水に対して人々が畏敬と霊的存在の認識を強く抱いていたことを伺わせ、当地の民間信仰の在り方を考察する上での一つの資料となり得るもので

ある。

ここまで述べてきたように、まだまだ課題は山積みであるが、この小稿が今後尾張低湿地で井戸を発掘調査する場合の一つのマニュアルとなれば幸いである。

Ⅲ期

58				
	SE01			5.3×1.4
59E				
	SK36	カメ	円	3.36×0.96
	36B	タガ	円	1.80×0.93
	36C	タガ(40)	円	2.33×0.67
59F				
	40	タガ	楕円	3.70(3.35)×1.19

現代

57		
	SE001	
	003	
59E		
	108	ドカン＋桶
$59E_2$		
	07	ドカン
59F		
	16	ドカン
	35	ドカン

不明

60A				
	SK02	タガ	円	2.65×0.67
	03	タガ	楕円	2.00(1.70)×0.60
	05		円	2.20×0.64
	06		円	1.80×0.60

〔注〕

(1) 財団法人愛知県教育サービスセンター『環状２号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』 1984。

(2) 鳥居龍蔵「遺跡と清水湧出地との関係」(『先史及原史時代の上伊那』 1926)

(3) 宇野隆夫「井戸考」(『史林』65－No５ 1982・９)

(4) 山本博は『井戸の研究』1970の中で井戸の部分名称に関して、地上構造を「井桁」、地下構造を「井筒」と呼び、「井桁」を四種類、「井筒」を大きく２型式に分類している。

(5) 長軸から短軸を引いてその値を長軸で割ったものに100をかけたものが10以上であるものを楕円形とした。$\frac{\text{長軸}-\text{短軸}}{\text{長軸}} \times 100 < 10$

(6) 縄文時代前期から中期のころにかけて形成された。井関弘太郎「一宮の地形と地質」(『一宮市史』本文編1977)

(7) 阿弥陀寺遺跡で上部を常滑の大甕の上胴部を使用した例があった。

〔参考文献〕

井関弘太郎「弥生時代以降の環境」(『岩波講座　日本考古学２』 1985)
財団法人愛知県教育サービスセンター『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』 1985
朝日遺跡群調査団『廻間遺跡』 1983
朝日遺跡群調査団『土田遺跡』 1982
朝日遺跡群調査団『土田遺跡Ⅱ』 1983
四柳嘉章「能登の中世荘園村落における信仰―穴水町西川島遺跡の調査から―」(『石川考古学研究会々誌』27 1985)
山本博 (『神秘の水と井戸』 1978)

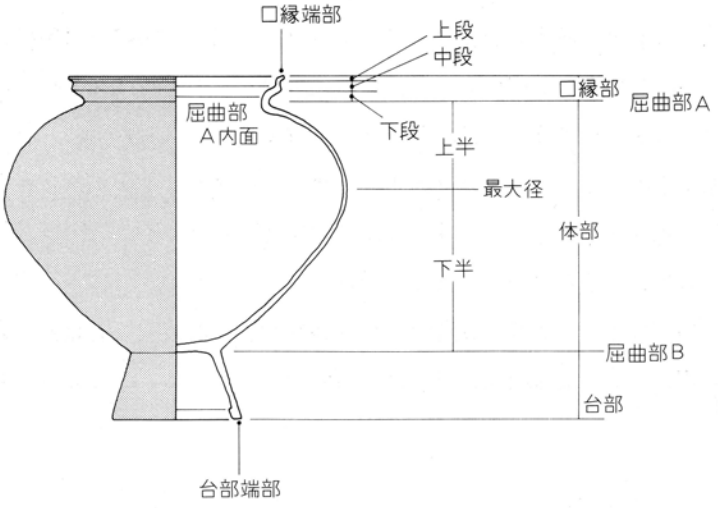
「S字甕」覚書'85

赤 塚 次 郎

1

東海地方を中心に、古墳時代初頭、普遍的に存在する特徴的な一群の煮沸器がある。S字状口縁台付甕形土器（以下「S字甕」とする）と称される土器であり、その形態・技法から他の土器類に比べ、際立つ存在といえる。S字甕については大参義一[1]あるいは安達厚三・木下正史[2]の著名な論考があり、したがってここでの目的はこれら先学の研究を受けて、今少し限られた時間的・地域内でのS字甕の様相を概観して見ることにある。

対象とするのは愛知県清洲町廻間（はさま）遺跡出土遺物（本文15頁参照）を中心とし、濃尾平野低湿地帯の遺跡出土遺物を補完的に使用した。ここで改めてS字甕を取り扱う論拠は、一つには弥生時代末～古墳時代初頭という大きな時代の変換期において、普遍性をもつ土器であるとともに、加えて前方後円墳造営時代を通じて存続する点にある。次にその際立つ特色ゆえに（後述）小破片においてもS字甕との認定が容易であるとともに、編年的位置づけをも比較的容易に判定できるのである。したがって遺跡におけるS字甕の存非、分布、時間幅等々と大局的な古墳時代集落の動向を把握する手段を我々に提供している。



第1図 各部名称

2

S字甕の特色を大参論文からまとめてみると（一部変更）１．口縁部を「S」字状に屈曲、２．台付、３．器壁は非常に薄く、胎土に砂粒を多く含む、４．器壁には単方向かまたは羽状に、深く鋭い櫛状具によるかき目痕がみられる、５．肩部または胴部に平行線文が施される、以上となる。ところで我々が通常、土器を観察しS字甕と認定する場合、それが小破片、特に体部である場合、窮極的にどのような特色をもって判定するのであろうか。その答えは以下にある。異様な外面調整と器壁の圧倒的薄さ。前者はS字ハケとでもいうような（器壁に鋭く刻み込む密度の粗なるハケメ）調整である。このハケ行為の鋭利さは乾燥の進んだ状態における２次的な外面調整と考える(3)。後者は粘土紐積み上げ技法の伝統が生み出した技術の一つの到達点といえよう。「薄さ」においてケズリを想定する場合もあるようだが、事実は数回の内外面調整に基づく。特に内面はハケ・板・指ナデにより器壁の凹凸がほとんど認められないまでに調整される。これはS字甕の機能との関係で生じる現象であろうが、外面の鋭い調整と内面の極めて平滑な調整との背反性に、独特な器壁の状態が生まれている。

刻み込むような外面調整と「薄さ」を保有する器壁、形状では口縁の独特な屈曲と台付という４要素をもってS字甕を規定する。

次にS字甕の大分類を行なうのであるが、その前に成形技法を確認しておこう。

第２図(6)を中心に成形技法を復原してみると、まず第１段階として台部の成形がある。粘土円板の上に粘土紐を２回積み上げ台部を成形し、端部は折り返して整える。第２段階は台部を転倒させ体部下半下位の成形に移る。凡そ２～３回積み上げた所で、時間をかけて乾燥を行なう。この乾燥において台部と体部下半下位の状況を補強させ、続く上位への成形に備える。これは一つの大きな成形上のブレスである。内面はハケメで丁寧に整え、外面はナデる。乾燥後その上部に粘土紐を積み上げてゆき（その間に数回の小乾燥）全体の素形が出来上がる。（第３段階）次に口縁部の整形と内外面の一次的な調整に移るが、内面は指ナデ（あるいはハケメ）外面もほぼ同じような状況で整形するものと考える。外面はこの段階で、台部に表面化している器壁面の平滑なナデ状態と同じ状態が出来上がる。（第４段階）その後最終的な仕上げとして２次的な調整が実施される。（第５段階）外面には密度の粗なるハケメによる鋭い刻み込みと、口縁部ヨコナデが施され、その後の乾燥工程に移行する。まとめてみると、第１・２段階の台付甕形土器の基礎作り工程と、第３・４段階の素形作り工程、そして第5段階の仕上げ工程と大きく３つの工程に分けて考えることができる。

3

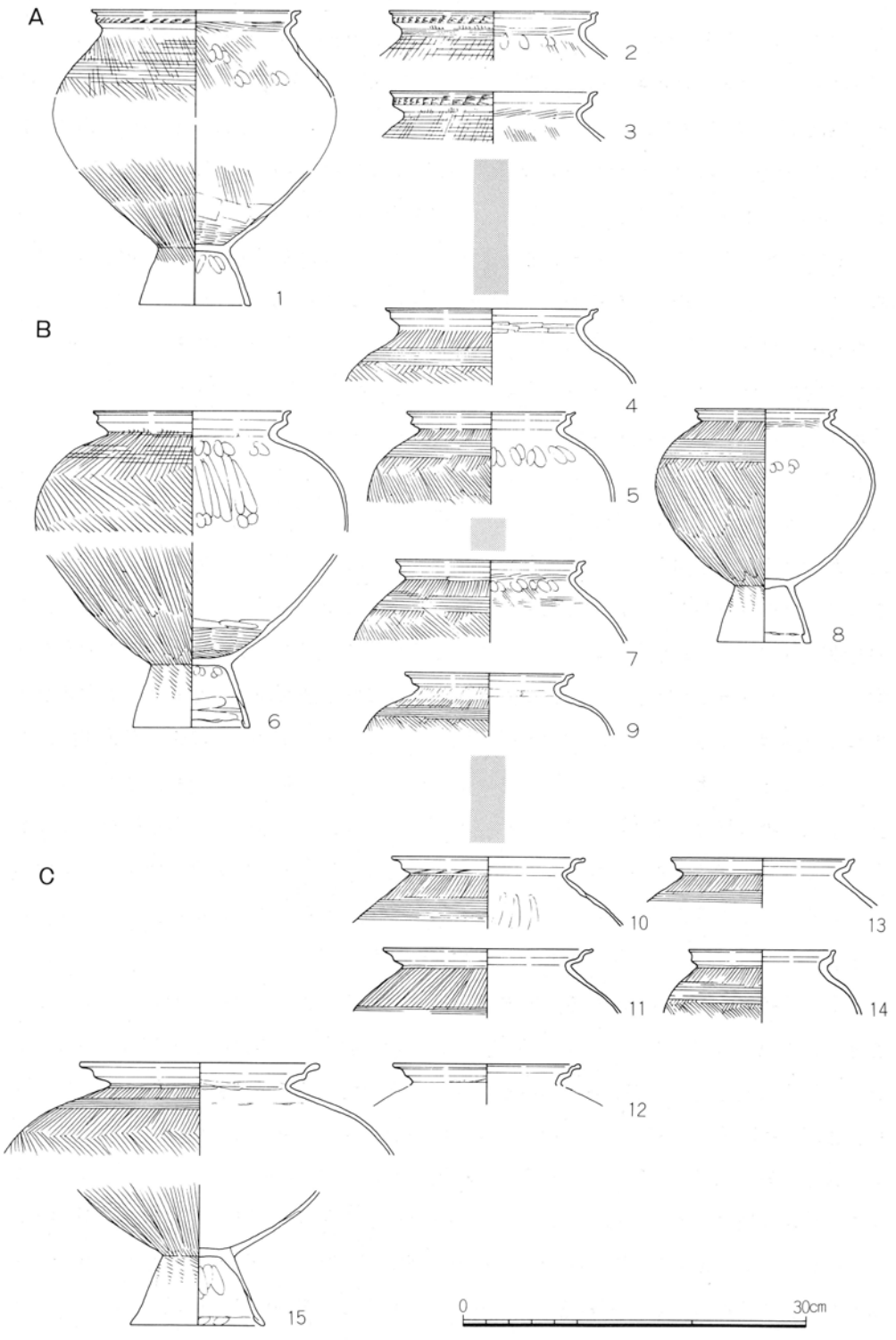
S字甕をA～C類に大別し、その特色を口縁部の変化を中心にまとめて概説する。

A類――口縁部上段が未発達、突出が少ない。その内、端部が明瞭な平坦面を持つもの(2)と、内面が弯曲し鋭利な端部を構成するもの(3)とが見られる。口縁部外面は中・下段に工具による調整(4)が著しく鋭利な稜を持って各段を構成する。中段外面に刺突文を施すが、オシビキ状に流れる場合が多い。（施文具は2次調整用ハケ）体部上半外面はナナメハケ後ヨコハケ（平行線文）が施される。ナナメハケは単斜から羽状への移行傾向が窺えるのであるが、まだ明確にハケ行為の手順が確立していない(5)。内面調整は、屈曲部Aに2次調整用ハケを使用し、時に体部内面にまで及んで用いられる。体部内面は主としてハケメ（密度細）後ナデという手順が成形第4段階に施され、それが残存する。台部端は明瞭な折り返しが認められず、外面のハケメは上部に幅狭く施される。

B類――口縁部上段・下段の発達。上・中段と下段のヨコ方向への突出度を比較すると、A類が前者を1にすると後者が3・4という比になる。B類は1：2と明らかに上段の突出度が大きくなる傾向が窺える。下段・中段外面の工具による調整はしだいに見られなくなり（消略）、 かわって上段内面に強い工具による斜方向の押圧面が表面化してくる。この行為がB類の一つの特色を表わしている。体部外面は一つの「定型化」する手順が確立する。すなわち体部下半を下から上へのハケメ、その後屈曲部Aから上から下へナナメハケを施し（羽状になる）、最後に体部上半にヨコハケを施す。ヨコハケはA類が屈曲部Aから行なわれたのに比べ、B類では屈曲部Aから行なうことを意図しつつも、結果的に体部上半下位に漸次移行する。内面調整はハケメが消略され、ナデ・指ナデが主体を占めるようになる。また屈曲部A内面は2次調整用ハケの他にヘラ・板・ナデ等多様な手法を使用しているが、その行為時期が仕上げ工程から成形第4段階の手順に移る。台部は端部に折り返しを有し、外面にはハケメが長く規則的に施される。

口縁部の特色を手掛りにその変化をまとめて記述すると、1．下段が大きく突出、厚く安定し、中段が垂直に立ち上がるもの(4)。2．上段が強く工具の押圧により斜方向に突出し、鋭利な斜面を有する(5)。3．口縁部の厚さが均一化してくる。各段の鋭利さがなくなり、端部の押圧面が目立たなくなる。 また屈曲部Aから体部外面にかけて工具によるナデが改めて施される。（7・9）2段階と3段階の間に技法上の一つの「変化」が認められる。

その他廻間遺跡においての特色として、法量と胎土の多様化がある。A類は口径18cm、胎土に大粒子雲母が多量に含まれているものに限定できた。しかしB類になると雲母の使用が減少、あるいは見られず赤色チャートを含むものまで存在する。口径は18cm～14cmと各種見られる。



第2図　S字甕の分類　　1：6

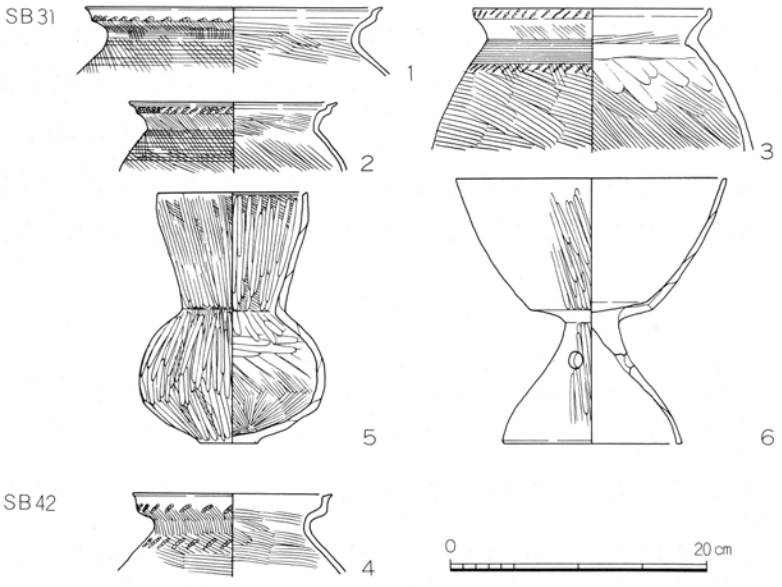
C類――口縁部中段の変化、口縁部から体部への鋭利な屈曲。形状は上段と中段が大きく外傾し突出するもの（Ca）と中段が上方へ大きく拡大するもの（Cb）と2タイプがある。後者は総じて口縁部の厚さを増す。端部での工具の使用は、内方向からの工具の押しあてが僅に見られるのみとなる。体部外面のヨコハケは、その位置が屈曲部Aから完全に離脱する。それにかわって屈曲部A外面には一条の明瞭な凹線が認められ、鋭く屈曲する口縁部に対応する調整技法としての「屈曲部調整」が確立する。

口縁部の変化をまとめて記述すると、1．厚さが均一化し端部に工具の使用が認められるが凹線状となる(10)。2．端部内側への肥厚が目立ち、工具調整により稜が認められる(12)。3．端部が相対的に厚さを増すもの(15)に変化する。そしてその後の変化としては、口縁端部外面への肥厚化と端部外面の面取りが生じてくる（D類）。また胎土の砂粒減少もC類の一つの大きな特色と考えてもよい。

まとめてみるとA類においてS字甕の原形ができ、B類において製作技法が確立し、C類において改めて技法の消略化と形状の変化が生まれてくる。

4

各類型の問題点を明記し、まとめにかえる。S字甕の起源問題であるが、廻間遺跡60B・SB31では「受口状口縁」を有する甕が出土している（第3図）。(3)（仮にa類）は口縁の形状・技法においてA類とは明らかに異なる。またSB42の(4)（b類）は総体的に類似するが、口縁部各段が不明瞭と形態上の相違に加えて、a類と同様に外面調整と施文に



第3図　廻間遺跡出土遺物　　1：6

違いが見られる。（１・２）（ｃ類）は器壁・技法とＳ字甕Ａ類に共通する。唯一の相違は下段の状況とその調整にある。外面調整は体部から口縁にかけて下から上へハケメを施し、ヨコナデを施すという技法が見られる。これは通常の甕口縁の製作技法であり、それが口縁の形態にかかわりなく表面化している。「受口状口縁」と「Ｓ字状口縁」の中間的な過渡的な状況をｃ類において見てとることができよう。ａ・ｂ類は前後にそれぞれ独自の発展形態が存在するとすれば(6)、Ｓ字甕Ａ類とは、「受口状口縁」の土器変遷体系の中で独特の変化をした甕（ｃ類）を基礎として発展したものと考えられよう。「受口状口縁」を客体として台付甕を主体とし誕生した。「大きく開く深い杯部と、内弯する円錐形の脚台を特徴とする高杯」が欠山期を象徴する器形であるとすれば、ＳＫ23（本文15頁）ＳＢ31のあり方からＡ類の誕生は「欠山期」の内にあり、その終末期を飾る。なおａ・ｂ類が一律にＳ字甕に転化したのではなく、別系統として存続することはここで改めてことわるまでもない。

次にＢ類であるが、「Ｓ字甕の定型化」として重要な問題を多く含んでいる。Ｓ字甕の定型化とは、口縁形態において口縁各段の成立・明確化・刺突文が消え「受口状口縁」から完全に脱却する。体部下半では下から上へのハケ、上半では上から下へのハケ、その後ヨコハケを施すという外面調整技法の確立、加えて台部の折り返えし。Ｂ類の登場をもってＳ字甕の製作技法の到達点と考え、以下その技法の消略・能率化として、変化を捉え直すことができる。定型化がいつ生じたかを見てゆく前に、安達・木下のⅡ類との関係を考えてみる必要がある。安達・木下の意図とは別に「頸部内面の櫛目は残すものが多い。」という指摘が半ば独走し、「本類に属するものは量的に少ない」が加わって次のⅢ類との関係とともに、各地の編年観に大きな混乱を来しているように思われる。「頸部内面の櫛目はなくなり」の指摘は積極的指標とはなりえない。大参も安達・木下両論者も、それぞれ（ｂ）類・Ⅲ類に「定型化」「典型的」という表現を用いている。しかし前述したようにＢ類にＳ字甕の本来的成立を見るのであり、その意見でＳ字甕Ｂ類に改めて再評価を下す必要がある。

〔注〕

(1) 大参義一「弥生式土器から土師器へ」(『名古屋大学文学部研究論集(史学)』第47輯1968)

(2) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』第60巻第２号1974)

(3) ハケメの動作に伴う粘土溜が明瞭に認められない点と、台部外面に見られるナデを手掛りに類推できる。

(4) 板状・ヘラ状工具による調整。乾燥が進んだ上での水を利用した調整のため、時にケズリ状に砂粒の動きが認められる。

(5) この段階は、体部上半のハケは屈曲部Ａから上から下へ施す動作に限定できない。しだいに羽状に、上から下への動作（体部上半）に統一されてゆく。

(6) 中西常雄「近江における甕形土器の動向」(『考古学研究』第32巻第１号1985)

弥生時代尾張地方の〈囲郭集落〉について

石　黒　立　人

はじめに

弥生時代の集落は、低地性・高地性を問わず周囲に溝をめぐらす例が多い。溝のなかには「濠」と呼称するのが相応しいような大規模な例もあり、そのような「濠」をめぐらす集落は一般に「環濠集落」と呼ばれている。

尾張地方においては朝日遺跡や阿弥陀寺遺跡が「環濠集落」の代表例である。しかし、なかには「濠」が完全にめぐらず「環濠集落」とは呼べない形態を有するものもあり、本稿ではそのような集落をも包括して〈囲郭集落〉と呼ぶ。

以下、当センターの調査した朝日遺跡、阿弥陀寺遺跡の最新成果を踏まえ、尾張地方を中心に〈囲郭集落〉の様相と変遷を概観し、若干の考察を加え今後に備えたい。

〈囲郭集落〉と分類

〈囲郭集落〉とは、溝・土塁・柵等の視覚的・物理的な結界施設を有する集落を意味する。結界の対象は集落の中核をなす居住域であり、生産領域・墓域を含まないのが通例である。居住域内を走る溝は、結界内の分割を意味するものであり、〈囲郭集落〉の結界施設とは性格を異にするので除外する。しかし、結界施設を有する居住域が独立的・完結的に単位をなし複数存在する場合、それぞれの単位を〈囲郭単位〉と呼称する。つまり、〈囲郭集落〉は、単一の〈囲郭単位〉から成る場合と、複数の〈囲郭単位〉から成る場合があるということになる。

さて、〈囲郭集落〉は以下のように分類する。

A型　結界施設が完全にめぐるあるいは完全にめぐると思われるもの。〈囲郭単位〉が複数、例えばn個からなる場合A^nと記述する。

B型　結界施設が完全にめぐらないもの。例えば結界施設の一部を自然的障壁に代替させるようなもの。〈囲郭単位〉が複数の場合はB^nと記述する。

なお、ここでの分類はそれぞれの〈囲郭単位〉の性格、集団としての位相を問題にしていない。また、結界施設の構造・平面形態についても同様である。あくまで大枠としての〈囲郭集落〉の基本構造に基ずく分類である。細密・精緻な分類は、現状における資料的不備からみて時期尚早であり、今後の課題とする。

〈囲郭集落〉の事例

〈囲郭集落〉の変遷を概観する上での時期区分は次のようにする。

Ⅰ期　遠賀川式段階。有段・削り出し突帯十沈線少条等の古相をⅠａ期、削り出し突帯十沈線多条・貼り付け突帯・多条沈線などの新相をⅠｂ期とする(1)。

Ⅱ期　朝日式期

Ⅲ期　貝田町古期(2)（阿弥陀寺Ⅰ期(3)）をⅢａ期、阿弥陀寺Ⅱ期(4)をⅢｂ期とする。

Ⅳ期　阿弥陀寺Ⅲ期１段階(5)（大渕遺跡ＳＥ02下層(6)）をⅣａ期、従来呼称しているところの高蔵式期（阿弥陀寺Ⅲ期２段階(7)）をⅣｂ期とする。

Ⅴ期　山中式期

Ⅵ期　欠山式期(8)

なお、Ⅳｂ期とⅤ期の間、Ⅴ期とⅥ期の間には未知の型式・様式の存在する可能性があり、Ⅱ期も細別可能性は留保している。

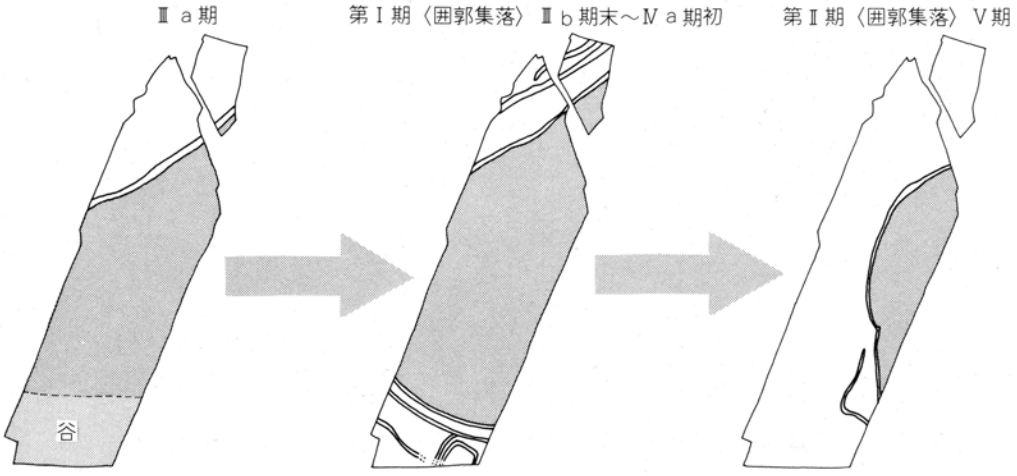
1　阿弥陀寺遺跡

尾張平野最南の標高１ｍ内外の低湿地帯に位置する遺跡である。昭和56年から環状２号線建設に伴う事前調査が実施され、本年度でほぼ完了した。

Ⅲａ期　Ｂ型？

Ⅲａ期の大溝が集落の北を、自然の谷が南を画している。形態的にはＢ型の範疇に含まれるが〈囲郭集落〉である可能性は低い。

大溝は幅約４ｍ、深さ約1.5ｍを測る。埋土は砂層の堆積が著しく常時水流があったものと思われる。Ⅲａ期の洪水性堆積により埋没する。



阿弥陀寺遺跡〈囲郭集落〉変遷図　　１：4000

第１期　Ａ型

２条の溝を基本とし、北と南で部分的に１条付加される。それぞれの溝は若干規模の違いはあるものの、平均して幅３ｍ、深さ１ｍを測る。断面逆台形を呈する。

溝の埋没は自然埋没を基本とするが、上層は包含層の２次堆積が著しく、整地された可能性がある。しかし、全く平坦にされていたわけでもなく溝上面の凹地部分には黒色有機土の堆積がみられた。土器廃棄は居住域に内接する部分に集中した以外多くはない。

溝それぞれの開削期は、Ⅳａ期に埋没が始まり一部はかなり進行しているところをみると、Ⅳａ期の初めかⅢｂ期の末ということになる。

「土塁」の存在は、溝上層埋土の整地的様相から推測できる以外積極的に裏付ける資料はない。基本２条間に排土を盛り上げれば高まりとなるが、排土を処理した土の高まりと「土塁」とは意味が異なる。不明としか言う他はない。

出入口は、北端の溝が南へ弓なりに屈曲している部分や南部の溝配置の不規則な部分に存在していた可能性が高い。部分的多条化、不規則化が〈囲郭集落〉の弱点を補うものであるなら、そこに弱点となり得る出入口の存在を想定しても良かろう。防御集落であればなおさらのこと安全性の保障が必要である。

第２期　Ａ型

現状では不連続の２条の溝からなる。幅約２ｍ、深さ最大で１ｍとたいした規模をもたないが、該期の包含層が中世以降の削平によって全く残存していなかった事実を考慮すれば、本来の溝の規模はさらにプラスアルファされる。この点は第２期も同様である。溝断面は一部Ｖ字形をなすが、だいたいはＵ字形を呈する。

溝の埋没は基本的に自然埋没のようであり、人為性は部分的にしか認められない。土器廃棄はＶ期の土器が若干ある程度で、第２期に比べれば著しく少量である。Ｖ期中頃の土器は溝底から30cmほど浮いており溝底からの出土はなかった。溝の開削期はＶ期中頃あるいはＶ期の古い段階であり、Ⅳｂ期には遡らないと思われる。

溝の配置は、２条の溝の対面部分が特異な状況を呈している。北から続く溝は、ゆるい円弧を描いてきたのが南溝の延長線部で東へ突出するかたちで小さな鍵手状をなし、南溝は継手のようにＬ字をなして東へ屈曲する。調査区外において両溝がどういう配置を取るか知ることはできないが、両溝が接続するしないにかかわらずその変則性は第１期以上に出入口の存在を窺しめる。単純な切れ目とは異なるこうした複雑さは、城郭の出入口に通じるものがある。

2　朝日遺跡[10]

標高約２ｍの微高地上に立地する。推定面積約70万㎡という東海地方随一の規模を誇る大遺跡である。遺跡はⅠ期に始まり、いわゆる遠賀川式土器を主体的に出土する遺跡の東限に位置する。

Ⅰａ期は「旧河道Ｃ」（以下谷Ｃと呼称する）南の微高地上に位置する貝殻山貝塚・二反地貝塚を中心とする地域に居住域を設定し、Ⅰｂ期になると一部が谷Ｃ以北の微高地上に分岐して以後の北居住域の核を形成する。この時期から朝日遺跡における２居住域併存が始まるが、〈囲郭集落〉の形成はみないようである。

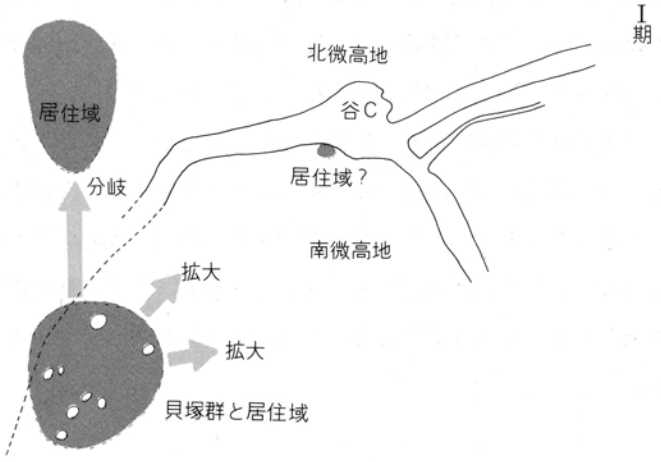
第１期　Ａ型

北微高地では、居住域北縁の第86区、南縁の第77区で、幅約５ｍ、深さ約 1.6ｍ の大溝（ＳＤ364）が検出されており、径は300m 以上あるようである。Ⅱ期のうちに埋没を始め、貝・破損木製品を含む生活残滓投棄場と化す。

南微高地においては報告書刊行時に未検出であったが、本年度調査（60Ａ区～60Ｅ区）において大溝を検出した。

60Ａ区ＳＤ06、60Ｂ・Ｃ・Ｄ区ＳＤ02が結界施設と推定されるものであり、両者は同一と考えられる。

ＳＤ06は60Ａ区西半においてⅤ期の（ＳＤ177）と重複し、東端で北へ強く屈曲する。先端は明らかにできなかったが、恐らく谷Ｃを横断して北上するものと思われる。ＳＤ06が微高地から谷Ｃへ移行する部分には、幅0.3m、高さ0.6m 程の陸橋部が存在し、先の北上して谷Ｃを横断する溝と、谷Ｃに平行して東進する溝とに分岐する。後者は下層のＳＤ10の再利用、あるいは掘り直したもののようである。溝幅約５ｍ、深さ約1.8ｍと規模は大き



朝日遺跡集落変遷図－１　　１：9000

い。

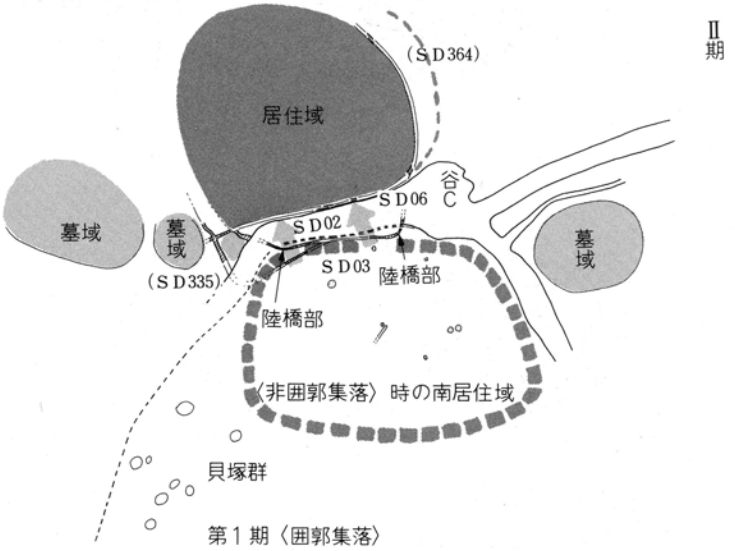
ＳＤ02は60Ｄ区で幅1.5m、高さ0.6m程の陸橋部によってａ（東側）とｂ（西側）に分かれる。陸橋部は微高地から谷Ｃへの移行部にあり60Ａ区と同じ様相をみせる。陸橋部の東際及びＳＤ02ｂ内には南向き斜に、後述する第２期〈囲郭集落〉（ＳＤ160）と同様の枝を張った杭が60Ｅ区にかけて、ほぼ１m間隔で10本ほど遺存していた。ＳＤ02ｂの先端は恐らく谷Ｃを横断して対岸北微高地に存在する同時期の溝に接続する可能性がある。対岸の溝底がかなり高いことをみると、ＳＤ02ｂ溝底も北へ上昇していたが故に検出できなかったのであろう。ちなみに対岸の溝底には杭痕がいくつか認められＳＤ02ｂに類似している。

ＳＤ02南肩には、現状で厚さ約80cmの盛土が存在し、土塁の可能性が考えられる。ＳＤ02南壁よりに地山土の再堆積がかなり多量にみられることは、ＳＤ02南壁にそって地山土による盛土がなされていたことを示すと思われる。したがって盛土も本来はかなり高いものであった可能性がある。

ＳＤ06・ＳＤ02の開削期は、Ⅱ期での谷Ｃ内におけるSD10・ＳＤ01の開削→貝の大量廃棄による埋積→ＳＤ06・ＳＤ02の開削という順番からみてⅡ期でも終末に近いようである。ＳＤ06・ＳＤ02がⅢａ期になっても深さ１m程の窪地状をなしていたことも、Ⅱ期終末近くに開削されたことを示していよう。

ところで、第１期〈囲郭集落〉を考える場合に大きな問題がある。

ＳＤ06・ＳＤ02が〈囲郭集落〉の結界施設とした場合、その対象は南ではなく北のようだからである。それに加え、北肩にピット列のあるＳＤ03もほぼ同時期と考えられ、配置からみてＳＤ02・（ＳＤ335）に接続し〈囲郭集落〉の結界施設となる可能性がある。ＳＤ03



朝日遺跡集落変遷図－２　　１：9000（　）は報告書遺構番号。
以下同じ。

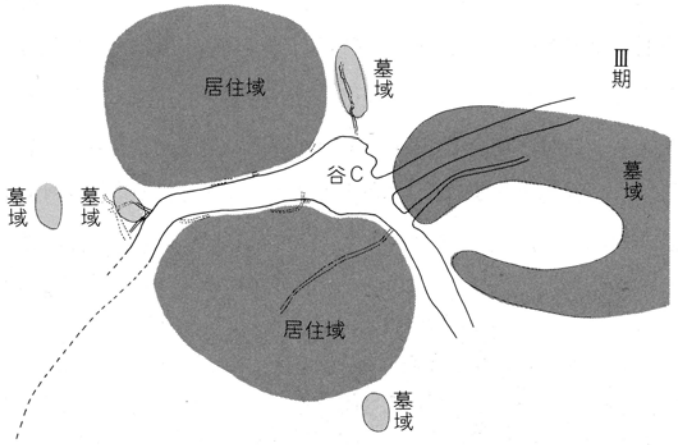
北肩にはピット列だけでなく土盛りも認められ、北側が集落内であることを示している。このように第1期〈囲郭集落〉南部の重装化は著しく、複郭式とでも呼称すべき特徴を有しており注目される。

未だ調査継続中であり、性急な判断は避けねばならないが、これまでの調査成果を踏まえ見通しを述べるなら、第1期には南微高地に〈囲郭単位〉は存在しなかったと言わざるを得ない。つまり、その時点では囲むべき居住域が不在であったということである。もちろん、土器編年上では南・北住居群併存となるが、遺構変遷を整合的に理解しようとすれば〈囲郭単位〉すなわち囲むべき居住域は北のみということになる。(11)

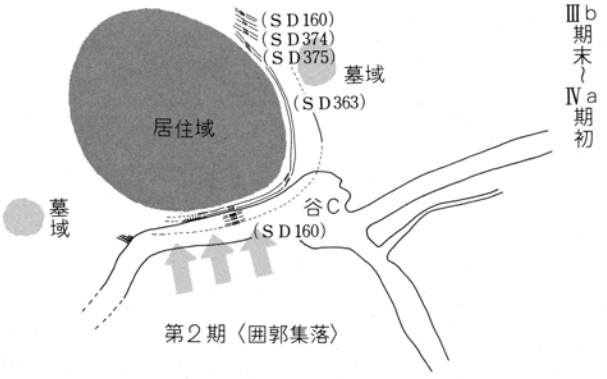
以上から、朝日遺跡Ⅱ期は〈非囲郭集落〉→〈囲郭集落〉→〈非囲郭集落〉という変遷をみせるとともに、〈囲郭集落〉時には居住域が北に統合されていたと考える。

第2期　A型

北微高地は、居住域北縁第86区・87区で北から(SD160・375・374・363)の4条、居住域南縁第77区の北微高地南端から谷Cにかけて北から(SD363・374・375・160)の4条によっ



朝日遺跡集落変遷図－3　　1：9000



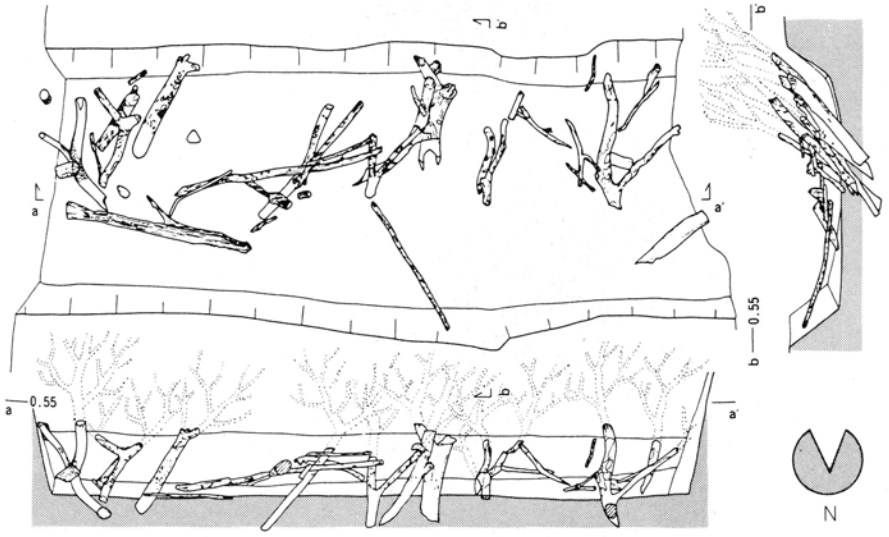
朝日遺跡集落変遷図－4　　1：9000

て居住域が画される。南北両端のうち、南の(ＳＤ374・375)は切り合い関係にあるから、同時存在は最大３条ということになる。

溝の開削期はⅢｂ期末かⅣａ期初めと考える。南縁の(ＳＤ374・375)はⅣａ期にはすでに埋没を開始しており、また谷ＣもⅣａ期段階で湿地化及び埋積がかなり進行しているからである。

４条の溝は規模的にさほどでもないが、南縁の(ＳＤ160)のみは特殊な構造をもっており注目される。すなわち、枝を張ったカシの木（検出時に上部はすでに欠損していた）が溝の南寄りに斜めに立てならべられていたのである。杭というには打ち込むことは不可能であり、事実下端は杭先のように尖っておらず斧で切り込みを入れたあと折り取られたような状態のままであった。したがって、これらの杭は溝の中に立てならべられていたという表現になるわけであるが、その特徴が第１期〈囲郭集落〉ＳＤ02ｂの杭とまったく同一である点は重要である。これらの杭列は、谷Ｃ（この時期河道の形成された痕跡はなく湿地化している）内における水流を調節するなどというものではなく、まさに〈囲郭集落〉を補強する「垣」という意味において「逆茂木」と見做しうるものであり、注目すべき資料である。さらに本年度調査では、この南側に複数の杭集中地点も検出されている。いずれも南へ傾斜して打ち込まれ、しかも密集度が著しい。同じ性格を有する可能性があり注目される。

北微高地には上記のように厳重な結界施設をもった〈囲郭単位〉が存在したらしいのに対し、南微高地には〈囲郭単位〉は存在しない。恐らく第１期と同様居住域が不在となっていたためであろう。



朝日遺跡第２期〈囲郭単位〉逆茂木状遺構（SD160）※報告書から転載一部加筆

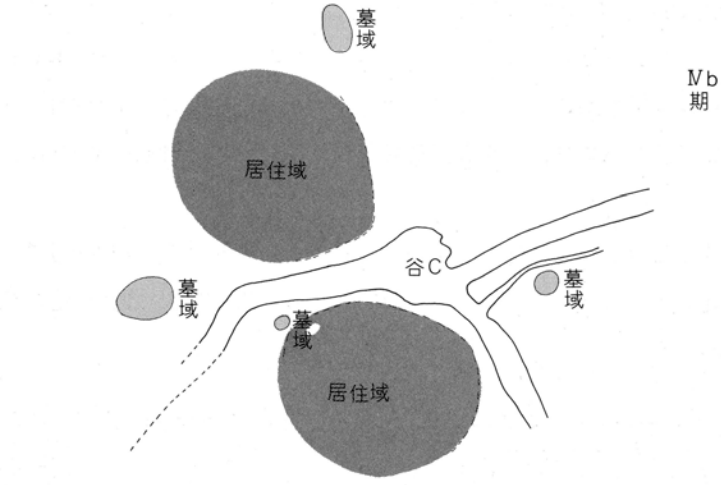
第１期・第２期とも居住域が北へ統合されるという状況は、朝日遺跡における北の優越性を示す以上に、単位というものの性格を改めて考えさせるものである。つまり、２単位から１単位、１単位から２単位へという伸縮性とそれぞれの単位における同一性はどのように整合しているのか、我々の抽出する単位は過程における一断面にすぎないのである。

第３期　A²型

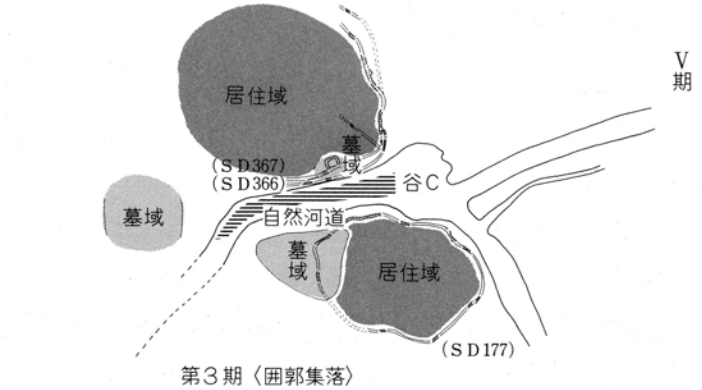
北微高地は（ＳＤ366・367）、南微高地は（ＳＤ177）が結界施設をなしている。

溝の規模は、幅４～５ｍ、深さ1.6～２ｍ強を測り、〈囲郭単位〉の径は凡そ200ｍ×130mと、以前が300m前後であったのと比較して大幅な縮小をみせる。もっとも、以前は２つの居住域が１つに統合されていたせいもあり、実質はあまり変わらないのかもしれない。

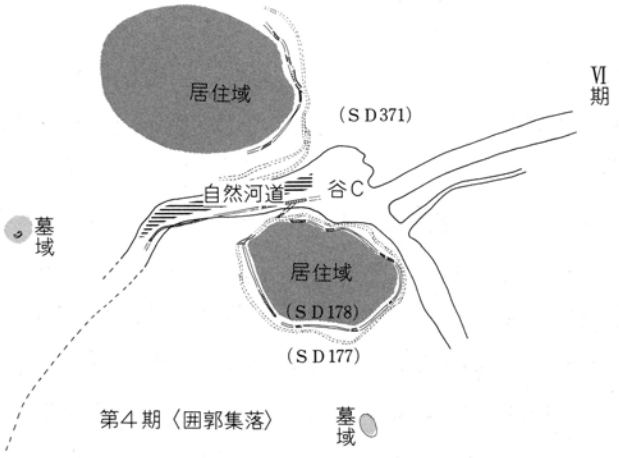
溝の開削期は北・南ともⅤ期であるが、北の状況をみるとⅤ期中頃に開削されたようであり、古い段階にまで遡る可能性は低い。



朝日遺跡集落変遷－５　　１：9000



朝日遺跡集落変遷図－６　　１：9000



朝日遺跡集落変遷図－7　　1：9000

第4期　A²型

北〈囲郭単位〉は第3期を踏襲しつつさらに内側に1条(SD371)付設され、南〈囲郭単位〉は谷C側を除いて内側に1条(SD178)付設され2条となる。

溝の規模は第3期に比べ縮小し、幅はそれほど変わらないが深さはかなり浅くなっており、ところによっては1mほどしかない部分もある。

溝のうちメインはⅤ期以来のものであり、そのまま利用するか改修して使用しているにしても特に時期を決めることはできないが、新しく付設された溝はいずれもⅥ期に開削されているようである。恐らくⅥ期でも早いうちかと思われる。埋没はⅥ期後半にはかなり進行しており、一部に元屋敷段階の土器も混入する。

第3期・第4期の〈囲郭集落〉がそれまでとうって変わって2つの〈囲郭単位〉からなるという変化は、ひとつには集団関係の変化に起因するとしても、この時期の谷Cの本格的な河川化にも原因があったと思われる。以前まで谷Cは交通の障害となることはなく、そのために結界施設によって取り込まれたりもしていた。しかし、このⅤ期以降の本格的な河川化によって自然的障壁としての有効性が増したのであろう。恐らく墓域の飽和化も相俟って、2つの〈囲郭単位〉に分離したと考えられる(12)。

3　大廻間遺跡(13) B型

知多半島の基部近く、伊勢湾側へ向かって複雑に張り出す標高30mほどの丘陵支丘のつけ根を横断して、長さ約20m、幅最大3m最小2.2m、深さ最大2.7m最小0.8mの溝が直線的に掘られている。居住域は支丘先端側に存在したらしいが確認されていない。時期は埋没はⅥ期であるが、Ⅴ期の土器も出土しているからⅥ期以前の開削と推定できる。

以上の他、A型は見晴台遺跡(14)（Ⅴ？～Ⅵ期）B型は高蔵遺跡(15)（Ⅰb期）がある。三河地方では、本神遺跡(16)（Ⅵ期)・東郷遺跡(17)（Ⅵ期）がA型、欠山遺跡(18)（Ⅵ期）もA型

のようである。

伊勢湾周辺を見渡しても決して事例に恵まれているとはいえない状況にある。今後の資料集積が望まれる。

〈囲郭集落〉の出現とその背景

〈囲郭集落〉出現の契機は何か。「濠」と呼ばれるほどの長大な溝をもって自らの生活の場を囲繞したのは何の為か。

かって石野博信氏は「高地性集落が長大な濠をめぐらしていることによって軍事性を考慮されているのに対し、低地の巨大な濠をもつ遺跡を軍事的性格をもった集落の範疇から除外[19]」するのは片手落ちであるとして、低地の環濠集落を「水城」と呼称し、高地性集落—「高城」と対比するなかでその防御的・軍事的側面をクローズアップした。

都出比呂志氏も、環濠集落を石野氏と同様防御的機能をもった集落として捉えたが、石野氏が高地性集落として区別した台地・丘陵上の環濠集落を包括的に捉えた結果、高地性集落に与えられていた性格を環濠集落も共有することになった[20]。

石野・都出両氏の言に代表されるように、弥生時代の環濠集落を防御集落と捉える立場が現在大勢を占めている。

環濠集落に代表される〈囲郭集落〉に防御機能があったかどうかは、長大な濠を見れば肯定せざるを得ないが、防御性については中世の環濠集落や堺の環濠都市からの類推であり、石野氏が「軍事性を実証することはむずかしい[21]」と述べられていることもまた事実である。

〈囲郭集落〉の防御的性格を実証するというよりは、〈囲郭集落〉の主たる機能として防御機能を前提に措き、そこから社会的緊張（その極相が争乱）を導き出し、それを裏返すことによって〈囲郭集落〉の消長を説明づけてきたという従来の傾向は、「軍事性を実証することがむずかしい」故に循環論理に陥ってしまったかの感がある。このままでは社会的緊張の具体相が不明であるし[22]、実体としての〈囲郭集落〉を正当に評価することもむずかしい。また、前提を替えれば結論も変わるというように、論理自体も真に不安定である。

そもそも〈囲郭集落〉は、集落変遷の一断面を示しているのであり、仮に基本設計に組み込まれていたとしても、あくまで潜在的要素として組み込まれているにすぎない。顕在化するのは特定の条件下においてであり、その条件が明らかにされないことには〈囲郭集落〉の性格を決定することはできない。

先に概観したように、尾張地方に限っても〈囲郭集落〉の出現には波があり、また形態・構造にも個性がある。それぞれ、その時々の条件に制約された感がある。そうした制約

を生み出した条件は、〈囲郭集落〉の防御性を強調するのみで導き出せるものではない。〈囲郭集落〉出現時の社会・文化を詳細に検討し、関連事項を抽出する必要がある。一概に断定を下すのは避けるべきであろう。

〈囲郭集落〉出現の契機において、それが外在するか内在するかという点では外在するといえる。〈囲郭集落〉には、いわゆる「拠点的集落」に含められるべきものも存在するが、〈囲郭集落〉としての恒常性を有しないことは先述したとうりであり、両者に基本的な相関はない。〈囲郭集落〉化に際し、拠点性は何ら必要条件を充たすものとはならないのである。集落成員の心理的安定を促す必要から〈囲郭集落〉を形成するとした場合でも、その安定性がしかも間欠的に何故求められなければならないかという点では、当然集落外の不安定性が対置されることになるから、すでに契機は外在することになる。恐らくすべての契機は外在するのであり、そこにおいて外的契機の緊急度・重要度が問題となる。

自然的要因において緊急度・重要度が高いのは、例えば低湿地における非常時の出水などのような災害である。しかし、そうした災害の多くは突発的であり、〈囲郭集落〉として予め準備するなどということはできないし、またそうした災害の起こり易い地域に集落を形成するなら、当初から〈囲郭集落〉として成立していたはずである。

ところが、〈囲郭集落〉は地形に左右されることなく、低湿地であろうが台地であろうが丘陵上であろうが成立するというように、場面は変わっても同じである。集落が成立すれば、それはいつでも〈囲郭集落〉になりうるのである。

以上からみて、〈囲郭集落〉の成立に関して自然的要因がベースになることはまずないと考える。仮にあったとしても、ほとんど特殊と言って良いケースであろう。とすれば、当然社会的要因が大きく関与しているということになる。

1　A型の出現と背景

定形的な〈囲郭集落〉であるA型は、現状ではⅰ）Ⅱ期末、ⅱ）Ⅲb期末からⅣa期初め、ⅲ）Ⅴ・Ⅵ期に存在したことを確認している。

ⅰ）は朝日遺跡以外類例に乏しいため、それがどういった状況において出現したのかという点についてにわかに答え難い。

尾張地方のⅡ期は、集落として確認されている遺跡でさえ僅かしかなく、構造まで判明しているとなると朝日遺跡のみという状況であり極めて心もとないのである。したがって、遺跡としてではなく、遺物のうえからⅡ期における何らかの変化を抽出するとすれば、とりあえず土器を指標として把握する以外にない。

Ⅱ期の土器は、尾張平野部の低湿地帯を主体的分布域とする朝日式と、犬山から名古屋台地、さらに知多半島にかけての台地部を主体分布域とする条痕文系土器に大別できる。

両系の分布域は尾張平野低湿地帯において交錯しており、朝日遺跡はちょうどその交錯地帯に位置している。その点では、両系の交渉が全く平穏であるならば無関係であるが、仮に緊張状態を生じていたなら朝日遺跡の〈囲郭集落〉成立との関係を想定することができる。とはいえ、Ⅱ期後半に朝日式が三河地方への波及を開始するらしい点、また条痕文系土器が朝日式の影響を受けるあるいはその逆という点、さらにこの時期の西部東海系条痕文系土器が遠賀川系土器波及期以来2度目の東方波及を見せる点など、決してゆったりしているとはいえない動きがあることも事実である。

Ⅱ期後半の土器様相に表われた一連の動きが、地域社会の枠組みの再編成を意味するならば、そこにおける社会的動向の一端が〈囲郭集落〉として表面化した可能性を考えることも決して的はずれではない。伊勢湾東岸における安定した農耕集落の広範な成立の端緒がⅡ期後半に辿れるという点も、そこに何らかの画期が存在したことを示しているのであり、〈囲郭集落〉の成立もそうした歴史的な結節点に深く関与したものかもしれない。

ⅱ)は、筆者が度々問題にしてきた、源流が山陽・近畿の境界付近に辿ることのできる〈畿内凹線文系土器群〉の波及期に相当しており、因果関係を想定することは比較的容易である。

〈畿内凹線文系土器群〉の波及に対応する事態のうち、とりあえず確実な点を整理すると以下のようになる。

a　在来の土器様式が根本的に変化する。Ⅳb期にはほとんど外来系で占められてしまうようになる。この変化は単に在来系器種と外来系器種の入れ替えというものではなく、土器製作体制そのものの転換をも意味する[23]。

b　畿内凹線文系土器群の波及だけでなく、在地の土器も本来の分布圏を超えて広範に移動・拡散する。技法的な伝播も顕著に認められる[24]。

c　三重県北部[25]、尾張地方平野部・名古屋台地においてⅣ期単純あるいはⅣ期以降継続する遺跡が急増する。

a～cによって示されるのは、尾張地方（伊勢湾周辺）への外来集団の進出と、それに対応する在来集団の動向であり、その最たるものが〈囲郭集落〉の形成なのである。

〈囲郭集落〉はⅣa期の段階で〈非囲郭集落〉化し、畿内凹線文系土器群波及後には〈囲郭集落〉が存在意義を喪失したことを示している。つまり、外来集団の進出を契機として〈囲郭集落〉の整備が行なわれるが、廃棄後には〈囲郭集落〉の結界施設の廃絶が進行し〈非囲郭集落〉化するのである。この〈非囲郭集落〉化段階には、土器様式の急激な斉一化[26]が進行し、周辺・遠隔地への波及も顕著になる。先にあげたa～cもほぼ〈非囲郭集落〉化段階に相当する事態であり、〈囲郭集落〉前後における隔差は極めて大きいと言わざ

るを得ない。

こうした外来集団の進出は当然在来集団との間に摩擦を引き起こし、その先々で軋轢を生んだであろうことは想像に難くない。〈囲郭集落〉の極だった複雑化・重装化という方向での整備や複数居住域の単一の〈囲郭単位〉への統合・集住は、そうした事態に実質的に対処する必要性が生じたことを示している。端的には集落の防御力を高めることが要求され企図されたことであろう。これらのことからいえば、この時期の〈囲郭集落〉は防塞的性格を前面に出したものといえるし、その〈非囲郭集落〉化はそうした努力が無に帰したことを示すのかもしれない。

ⅲ)はⅱ)と異なり、外来集団の進出を顕著に示す事実はなく、ⅰ)と同様在地における動向に関係したものと考えられる。ただし、Ⅴ期には畿内地方において大規模な争乱の発生したことが想定されているから[27]、そうした争乱に関する情報伝播によって〈囲郭集落〉を整備し争乱の波及に備えた可能性もある。仮にⅤ・Ⅵ期が古墳時代への移行期に相当することから、尾張平野部における集落相互の系列化による地域社会の再編に伴い争乱が発生した、という想定によって〈囲郭集落〉の形成を説明するにしても、現状において具体的事実としての状況復原は困難である。今後の課題である。

2　B型の出現と背景

高蔵遺跡については特に代表事例としての説明を加えなかっが極めて重要な位置を占めているのでここで触れておく。というのもちょうど遺跡が遠賀川系土器主体分布圏と条痕文系土器主体分布圏の接点に位置するという点で、〈囲郭集落〉としての理解はダイナミックな背景をも考慮する必要があるからである。つまり、外来集団（遠賀川系）と在来集団（条痕文系）の対峙に起因するものと見做すならば、平穏ではない社会情勢を想定しなければならなくなるからである。しかし、低地の遺跡として同様な位置にある朝日遺跡がⅠb期はどうも〈非囲郭集落〉である点を考えると、統一的理解はむつかしくなる。

高蔵遺跡の〈囲郭集落〉としてのタイプは、現状の確実視できるほどの資料集積がない状況で憶測するなら、台地縁（東）側を内部として複数の溝が弧状に配置されるものと考えられる。この形態は、Ⅰa期末～Ⅰb期の三重県大谷遺跡[28]、永井遺跡[29]と類似するもので、憶測が正しければ三者の関係が注目されるところである[30]。ほぼ同時期の遺跡における構造上の類似性は、遺跡形成集団の系譜を探る上で重要である。社会的要因をひとまずおけば、高蔵遺跡の〈囲郭集落〉は集落形態としてトータルに移入された可能性もある。大谷・永井両遺跡の類似性は、その位置的な近接性からいって同一系統あるいは同一集団の営為になるものとして捉え得る余地があることからいえば[31]、高蔵遺跡もその延長として理解することもできる。もちろん、〈非囲郭集落〉に比較しての重装化は無視できないから、いずれもほぼ

似通った条件下において成立したという意味においてまた外来集団・在来集団の軋轢を否定することもできない。今後の課題である。

大廻間遺跡は、同時期尾張平野部周辺においてA型が優勢であるのとは著しい対照をなすものであり、自然地形を最大限利用する故に〈囲郭集落〉としては簡略この上ない。恐らく、周辺地域も含めてⅤ・Ⅵ期の社会的動向と直接的関係を有していた可能性は薄い。仮にそれらを「高地性集落」の範疇に含めようとも、あくまで平野部を主体とする動向から切り離された周辺における局部的動向であるから過大視することはできない。名古屋台地における遺跡増加による過密化を解消するという一面も含んだ展開と見做しうるものである。特に伊勢湾臨海地帯という特殊性をこそ評価すべきであり、ことさら「高地性集落」の軍事面をのみ強調することは首肯できない(32) Ⅴ・Ⅵ期における伊勢湾周辺の土器様式斉一化の要因としての海上交通盛行に対応したものと考えることもできる。

A型に比べ不完全であると言わざるを得ないB型も、〈非囲郭集落〉に比べれば質的な差を考慮せざるを得ない。集落の基本としての集団自体が、人間の個としての弱さをアプリオリに補完するものであれば、不完全なりにも〈囲郭集落〉へ移行するに際しては、その原因となるべき社会情勢の変化は生じていたはずである。その社会情勢に直接関与していたのか間接関与していたのかはともかくとして、社会情勢の具体的復原をまず果たす必要がある。

おわりに

尾張地方における弥生時代の〈囲郭集落〉は、現状においてそのすべてを直接争乱に対応したものとすることはできないし、弥生集落の基本形態であるとも言えない。

一応、Ⅲb期末からⅣa期初めにかけての〈囲郭集落〉は、まさに社会的変動期にあたるため防塞的性格の強いものであると思われるが、それ以外をも含めて論ずるには十分ではない。

〈囲郭集落〉の全体的・細部的構造はもちろん、〈囲郭集落〉のそれぞれの地域における分布及び通時的変動など、広範なデータの集積を果たすにはなおまだ多大な時間を要すると思われる。その意味では、ある程度予察を先行させた研究を進めることもやむおえないが、これまでのように防御的集落という前提のみから一元的理解に向かうというのでは、それぞれの地域ごとの特性を等閑視することになりはしないかという危惧をもっている。防御的集落が成立したから何らかの緊張があった。争乱が生じたという結論先取りの論法ではなく、地域的にどういった変動が生じたのかということをこそ〈囲郭集落〉以外の事実関係から明らかにすべきであろう。〈囲郭集落〉については遺物的把握ではなく、文化・社会的にトータルな問題として整合的に位置づけていくべきであろう。

〔注〕

(1) ここでいうⅠa期・Ⅰb期の2小期区分は、従来の「貝殻山式」、「西志賀式」には対応しない。朝日遺跡等の遺構変遷・遺跡展開から導かれる区分であり、極めて大雑把なものである。

(2) 大参義一「弥生式土器」(『環状2号線関係、朝日遺跡群第一次調査報告』愛知県教育委員会 1975)「貝田町古期」は一般性をもつが、「貝田町新期」は区分があいまいであり、適用するには問題が多い。

(3) 石黒立人「阿弥陀寺遺跡出土の中期弥生土器について — 2」(『埋蔵文化財調査年報Ⅲ』愛知県教育サービスセンター 1985)「大渕遺跡」(同)。

(4) 注(3)に同じ。

(5) 注(3)に同じ。

(6) 注(3)に同じ。

(7) 注(3)に同じ。

(8) 「欠山式」を弥生土器とするか古墳時代土器とするかは意見の分かれるところであるが、ここでは〈囲郭集落〉の変遷を追跡する必要上からⅥ期とした。

(9) 阿弥陀寺遺跡の調査概要は、愛知県教育サービスセンター年報Ⅰ～Ⅲで報告済である。昭和59年度分を含めた全体像は本年報に収録している。

(10) 愛知県教育委員会(『朝日遺跡』1982)で県文化財課担当分は報告済である。文中の「報告書」はこれを指す。

(11) 結界外の住居は〈非囲部集落〉時のものであって、内外すべてが同時併存ではなかろう。

(12) 石黒立人「愛知県朝日遺跡における墓域形成の一様相」(『考古学の広場』1 1983)

(13) 知多市教育委員会(『大廻間遺跡』1975)

(14) 三渡俊一郎「名古屋市見晴台遺跡と附近の弥生時代濠状遺構」(『古代人』40 1982)

(15) 名古屋市教育委員会(『高蔵遺跡発掘調査概要報告書』1982)

(16) 天野暢保・畔柳典造「古井町本神遺跡について」(『安城市史研究』3 1967)

(17) 岡崎市教育委員会(『東郷遺跡』1985)

(18) 豊橋市瓜郷遺跡調委会「附載第二 欠山遺跡」(『瓜郷』1964)

(19) 石野博信「3世紀の高城と水域」(『古代学研究』68 1973) 2頁

(20) 都出比呂志「環濠集落の成立と解体」(『考古学研究』29－4 1983)

(21) 注(19)に同じ。

(22) 都築暢也「遺構」(『環状2号線関係 朝日遺跡群発掘調査中間概報8』愛知県教育委員会 1981)
都築氏は環濠の消長を社会的緊張の緩急に対応させているが、社会的緊張の具体的事実についての指摘はない。

(23) 注(3)に同じ。

(24) Ⅳ期における、関東地方への台付甕の先駆的波及など。

(25) 伊藤 洋「三重県北勢部の弥生時代遺跡について」(『三重考古』2 1978)

(26) 高蔵式はこの斉一性を重視した様式名である。長床式は在来系(獅子懸式・古井式・下長山式)を含むものとして設定されているようであり両者は理念的に異なる。
これらの点については、注3文献に述べてある。斉一性はあくまで外面的。一面的な特徴にすぎない部分もあり、内容を吟味する必要がある。

(27) 豊岡卓之「「畿内」第Ⅴ様式暦年代の試み(上)(下)」(『古代学研究』109 1985)

(28) 四日市市教育委員会(『大谷遺跡発掘調査報告』1966)

(29) 四日市市教育委員会(『永井遺跡発掘調査報告書』1973)

(30) 筆者は、大谷・永井両遺跡との立地、形態の類似性、時期的な近接性から相関関係を認めようとしたのであるが、今後の調査次第ではどうなるかわからないという部分もある。たとえば、1985年度高蔵遺跡調査会による調査成果をみると、2条の環濠がめぐる可能性もあるのであり、もしそうなれば本論に述べたことは正に憶測と化すことになる。詳細は今後に期待したい。

(31) 永井・大谷類型として設定できるかもしれない。伊藤久嗣氏の指摘による。

(32) 伊藤禎樹「伊勢湾と「海つ道」」(『古代の地方史』4 朝倉書店 1978)

(33) 成稿にあたって下記の方々に御指導御教示戴いた。記して感謝します。(順不同敬称略)原口正三、重松和男、伊藤久嗣、高橋信明、山田鉱一、加納俊介

大渕遺跡に見る中世集落の一形態

池　本　正　明

1

大渕遺跡は、海部郡甚目寺町に所在する、弥生時代～室町時代にかけての複合遺跡で、現在、大きく4期に区分（大渕Ⅰ～Ⅳ期）して考えている。その概要は、前掲の「大渕遺跡」に譲ることとして、ここでは今年度検出された中世建物群（大渕Ⅵ－1期）を問題とする。

今回検出された建物群は12棟で、二群に分かれて分布しており、愛知県下における中世建物を理解する上での好例の一つとなった。本項目のテーマは、これら建物群の考察である。

2

大渕Ⅳ－1期は、前掲「大渕遺跡」に記されているように、13世紀を中心として考えている。前述のように、検出された建物群は総数12棟で、6棟ずつのまとまりを持ち、一定の距離を保ち分布している。一群中の形態は、中央に狭い空間を有しながら、その外縁をとり囲むような配置で、かなり強い有機的な関連が想定できる。従って、これらの建物群を「屋敷(1)」として認定する。

それぞれの屋敷は、主屋・倉・井戸の組み合わせを基本形態とし、それに数棟の納屋的建物を加えて構成される。個々の建物は、方位に規制を受けてはいるものの、長短不揃いである場合や、柱通りが悪い場合もあり、厳密な規格性は持たない。なお、建て替えは北側の屋敷について、主屋と倉について各1回認められるのみである。

次に、屋敷に関連すると思われる出土遺物を、供膳具・煮沸具・貯蔵具と区分し、概観してみたい。まず、供膳具は、いわゆる山茶椀・小皿を基本的な組み合わせとし、若干の土師器皿がこれに加わる。煮沸具は全て、土師器鍋・釜で占められており、貯蔵具は、いわゆる無釉焼き締め陶にほぼ限定される状況である。これを全体的に見れば、供膳具が最も多く、煮沸具・貯蔵具は、わずかに含まれるにすぎない。

これらの遺物と、建物の建て替え状況から判断すると、この屋敷の年代を13世紀中頃に考えることができようか。

3

以上が、大渕遺跡における屋敷の概要である。これらは、それぞれが東西36m、南北60mの溝による方格地割り中に占地している。地割り溝は、縦方向がほぼ南北を向き、しかもB溝については条里の境界上に所在する[2]のに対し、横方向は縦方向に直角で交差することはなく、全体的にはひしゃげた長方形を呈している。

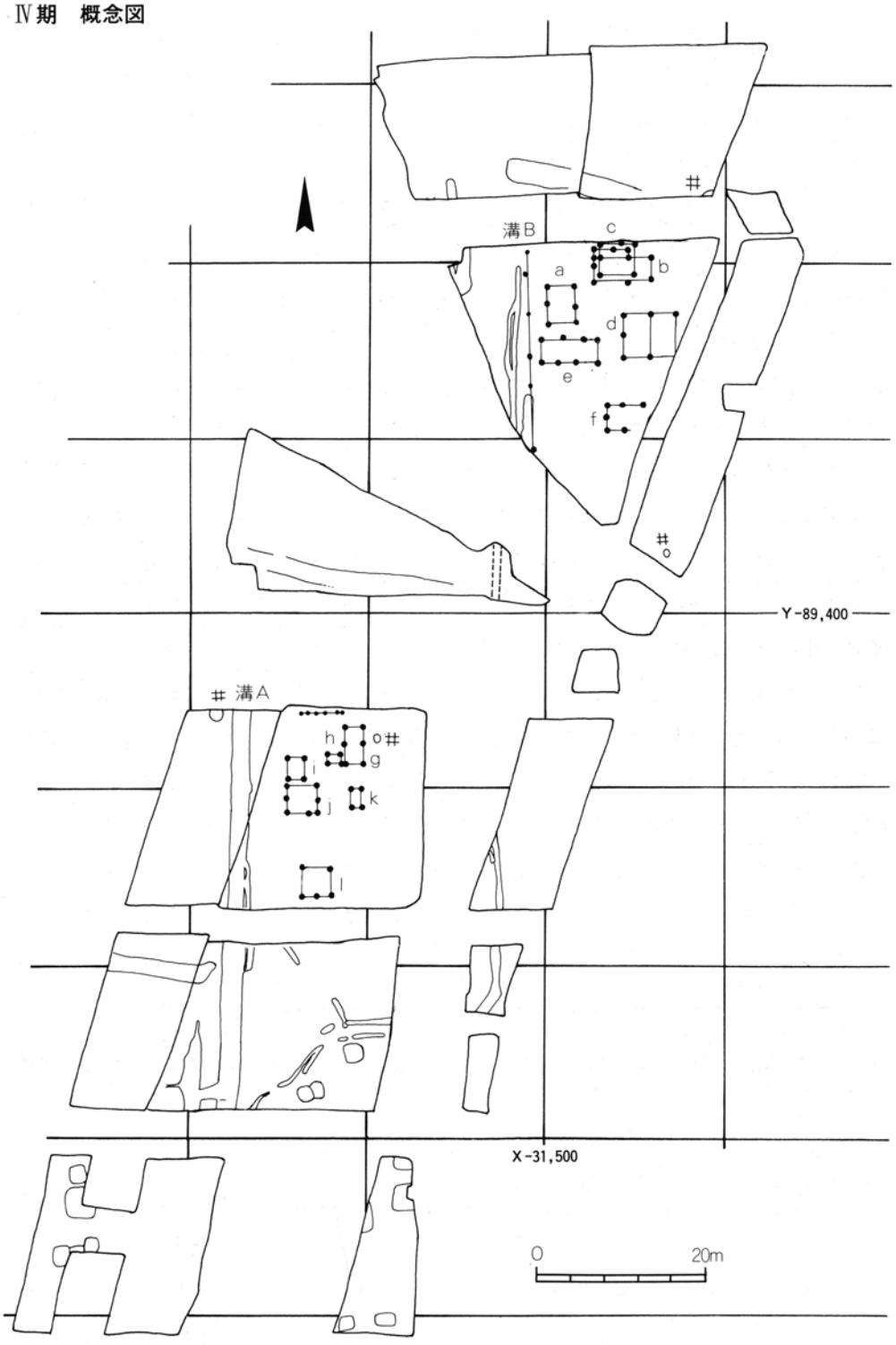
この状況は、土田遺跡・朝日西遺跡・阿弥陀寺遺跡[3]・森南遺跡[4]などで検出されている状況と若干の違いは認められるものの、方格を成すという点では一致する。従って、この様相を、当地域における中世集落の一般的な形態として理解しても良いだろう。次に、こうした方格地割りの掘削時期の上限を、大渕遺跡内で推定してみたい。

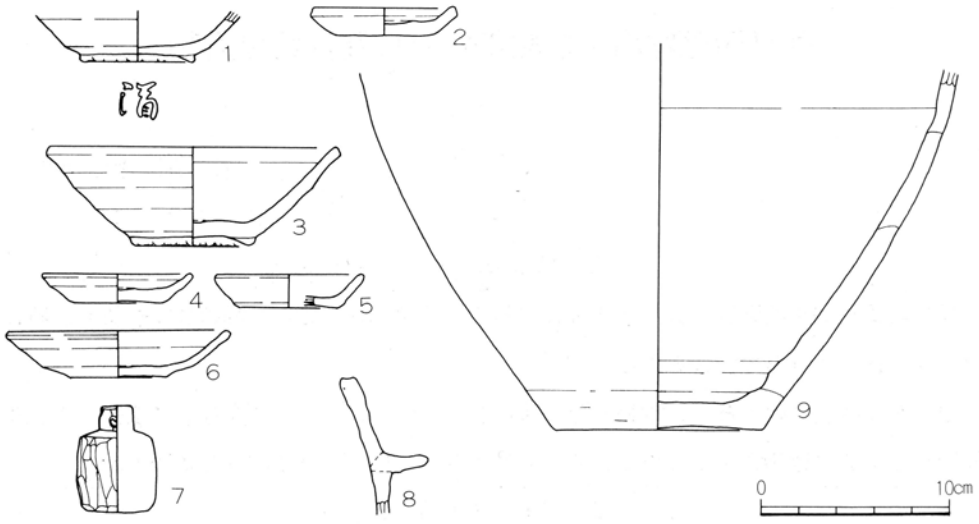
大渕Ⅲ期は、前掲「大渕遺跡」に述べられているように、平安時代を中心とする時期であり、現段階で26棟の建物が検出されている。これらは、前述したⅣ－1期の状況と同様に、ある程度のまとまりを持った展開を示してはいるが、相互に厳密な境界を有さず、ごく簡単な柵が数列認められるのみである。また、60E区では、溝AとⅢ－3期に属する井戸とが切り合い関係を持ち、現在検出している方格地割りの上限を規定することができる。

以上の事実関係から、方格地割りは、Ⅲ期に属する建物群とは同時存在は考えられず、その掘削時期はⅣ－1期で、屋敷とはあまり前後しない段階が考えられるものである。従って、大渕遺跡における方格地割り施行の上限を13世紀代に考えることができる。なお、この動きは、前述の土田遺跡・朝日西遺跡・阿弥陀寺遺跡・森南遺跡などの中世集落遺跡と、真宮遺跡・生平遺跡[5]などの平安時代の集落遺跡でも確認することができるため、大渕遺跡のみに見られる特殊性ではない。また、通常、平安時代に求められる集落の画期[6]（消滅と発生）も、大渕遺跡のこうした動きと密接な関係を持っていると思われる。従って、以上の点から、当地域における方格地割りの施行を13世紀に求めることができ、それは、中世における集落再編成の結果として出現したと理解できるのではないかと思われる。

名　称	規　格	面　積	備　考	名　称	規　格	面　積	備　考
a	1×2	19.1㎡	主屋①	g	1×2	12.5㎡	主　屋？
b	1×2	28.1㎡	主屋②	h	1×1	2.5㎡	
c	2×2	19.2㎡	倉　①	i	1×1	7.2㎡	
d	2×2	41.0㎡	倉　②	j	2×2	15.5㎡	倉
e	1×3	25.5㎡		k	1×1	3.9㎡	
f	2×2カ	17.0㎡		l	2×1	16.8㎡	倉

Ⅳ期　概念図





No	名　称	出土地点	備　考	No	名　称	出土地点	備　考
1	北部系山茶碗	60B$_1$区・SE02	墨書	6	土師器皿	60F区・SE01	ロクロ使用
2	南部系小皿	60B$_1$区・SE02		7	陶　錘	60F区・SK19	
3	南部系山茶碗	60F区・SE01		8	羽　釜	60F区・P．56	
4	南部系小皿	60F区・SE01		9	壺	60F区・SK24	
5	土師器皿	60F区・SE01	ロクロ使用				

〔注〕

(1) 石野博信「日本古代の住居と屋敷」『日本のすまいの原流』文化出版局1984) 133頁

(2) 浅井和宏氏の推定データによる。

(3) 「土田遺跡Ⅱ」・「朝日西遺跡Ⅱ」・「阿弥陀寺遺跡Ⅲ」（『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』愛知県教育サービスセンター1985)

(4) 安藤義弘氏御教示による。

(5) 荒井信貴氏御教示による。

(6) 鬼頭清明『古代の村』（岩波書店1985) 88頁

(7) 金田章裕「中世の村落」（『考古地理学４村落と開発』学生社1985)

朝日西遺跡出土の紀年銘資料及び共伴遺物

服　部　哲　也*

1　はじめに

朝日西遺跡59年度調査のA・B区は、清洲城下町のうち外堀と中堀の間に位置し、特に寺社地が推定される地区にあたる。

遺跡及び調査区の子細は、本報告等に譲るとして、ここでは、「文禄」「慶長」の紀年銘資料と多数の遺物が出土したことで注目されるSD13について紹介しておく。

2　SD13の概要(第1図)

南→北方向（N－15°－E）から西→東方向（E－6°－S）へほぼ直角に折れ曲がる素掘りの溝であり、寺院を画する堀と推定される。

調査区全体を、近現代の耕作土と攪乱によってかなり削平されており、現状での規模は幅4.5m～5.5m、深さ0.3m～0.5mである。しかし、僅かに遺存状態の良かった調査区東端で、幅、深さとも増すことを確認しており、想定復原幅6m～7m、深さ1m～1.2m（北へ向かって徐々に深くなる。南、北での溝底の標高差は約0.3mを測る。）の規模を考えることができる。

遺構内の埋土は、基本的に上層の茶褐（灰）色粘質土、下層の灰褐色粘土の2層であるが、下層粘土は南へいくに従い薄くなり、やがて僅かな砂層の堆積と変化する。従って、溝北辺では水の淀んだ状態を、西辺では微量な水の流れを推定することができよう。

また、上層粘質土は、中世無釉陶器（所謂山茶椀）等、明らかに溝の年代より古い土器片を多量に包含していた。このことは、慶長15年（1610）に始まった「清洲越し」に伴い寺院が移築された後、残った堀を前代の遺物を包含する周辺の土を用いて、一気に埋め立てた結果と考えられる(1)。

3　紀年銘資料

(1)「文禄貳年」（1593）銘、施釉陶器（灰釉系椀）第2図の25

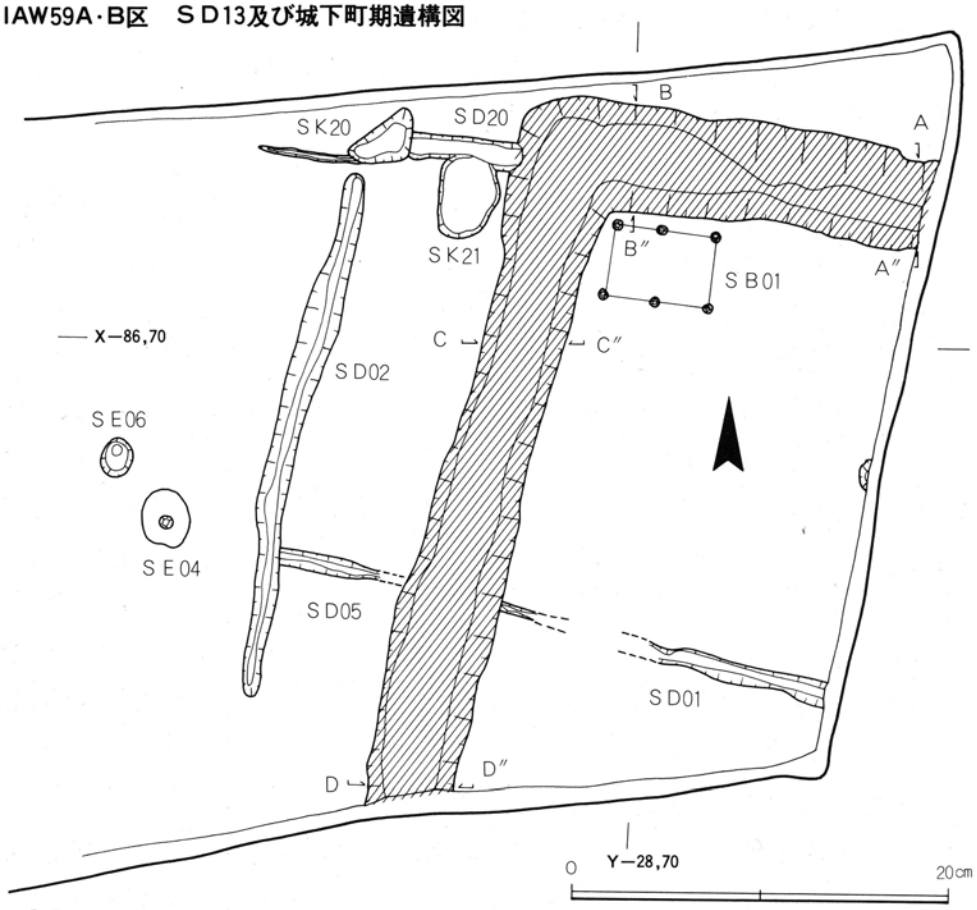
遺構の南端にて、上層粘質土と下層砂との境から出土した。

器形上半を欠損するが、現存高3.2cm、底径5.9cmを測る。高台はヘラケズリの後、丁寧にヨコナデされており、貼り付けによるか、ケズリ出しかは不明である。

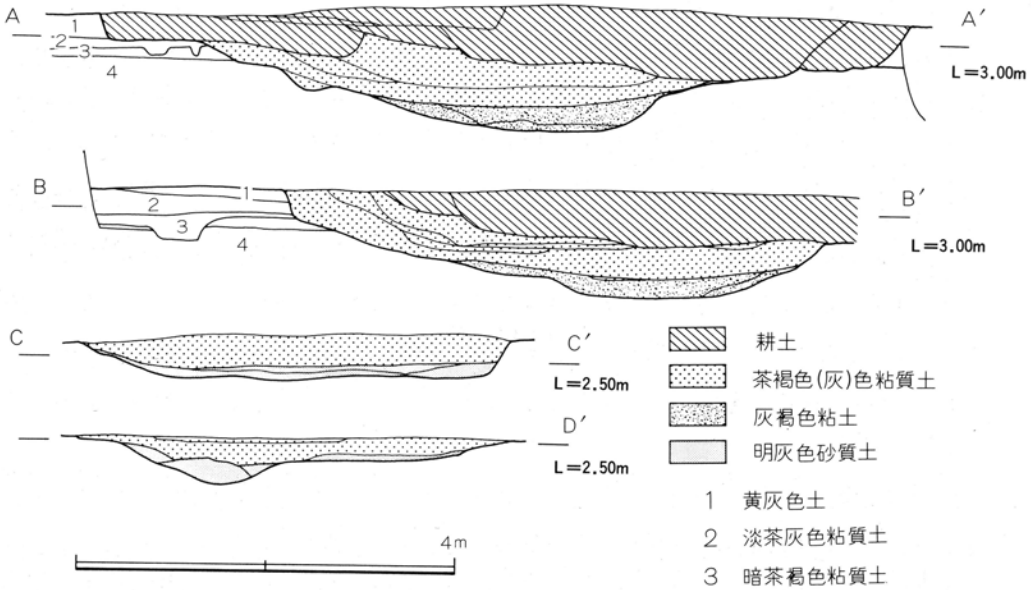
墨書は、底部中央に「楽師」高台脇の露胎部分に「文禄貳年□〔月カ〕□〔十カ〕二日　願主七七玉　敬□〔白カ〕」と鮮かな達筆で書かれている。

＊名古屋市教育委員会学芸員

IAW59A·B区　ＳＤ13及び城下町期遺構図



ＳＤ13断面図



第１図

「願主」「敬（白）」の文言から、何らかの供養に用いられたと考えられるが、同様な例が他にも出土しており(2)、「土器に供養の文言を書いて寺に奉納する」という当時の信仰形態のひとつを知ることができよう(3)。

次に、「文禄二年」の年号とその記せられた陶器との関係を考えてみたい。

器形は、腰の丸い筒形の茶椀になると思われる。その特徴として、①器形にゆがみは見られない、②高台は正円で丁寧に調整されている、③内面底には「茶だまり」と呼ばれる窪みがない。などを挙げることができ、筒形茶椀（大窯Ⅲ期より出現すると考えられている(4)。）のうちでは古いタイプに属すると考えられる(5)。

また、釉は鉄分を多く含んだ灰釉（釉際では、僅かに鉄釉の発色が認められるが、鉄釉の上に灰釉を施す二度掛けのものではない）であり、にぶい黄褐色を呈している(6)。従来から用いてきた灰釉、鉄釉に工夫をこらして、新たな釉を作りだそうとした努力は、大窯Ⅲ期以降栄んにみられるところであるが、（その結果として所謂瀬戸黒、黄瀬戸がある）今回出土の資料も、こうした試行錯誤の時期の釉として捉えることができよう。

以上のことから、施釉陶器そのものの年代を推定すれば、大窯Ⅲ～Ⅳ期に位置づけることが最も妥当と思われ、「文禄二年」の年号と記せられた陶器の焼造時期とは、若干の隔たりがあると考える。

(2)「慶長三、四年」（1598、1599）銘卒塔婆（第３図）

頭部を五輪塔状に整形した板塔婆である。溝が方向を変えるコーナー部分の、下層灰褐色粘土から19本出土した。紀年銘はNo10「慶長三年」No17、No19「慶長四年」の他、接合不明ながら「慶長」と読み取れる断簡が２片ある(7)。

溝からの出土ということで、「流し塔婆」の風習が思い起こされるが、19本は重なり合った状態であり、意図的に流されたものとは考え難い。おそらく、寺で不用になった塔婆を一括して廃棄したのであろう。

重ねられた塔婆を、上から順に見ていくと、大きさ書式がまちまちのNo１～No12（慶長三年銘卒塔婆を含む）、大きさ書式とも統一されているNo13～No19（慶長四年銘卒塔婆）の２グループに大別される。しかも、前者の12本は、墨書部分が盛り上がったものや、墨書が消えて墨痕のみを僅かに留めているものなど、後者の７本に比べ明らかに損傷が著しい。これは、塔婆が外気に触れていた期間の差と理解でき、１年の年号違いを端的に表わしている。

No13～No19の７本は、日付が７日ごとに変わっていることから、所謂「七本塔婆」と考えられる(8)。七本塔婆の供養方法は、現在各地方によって若干異なるが、一七日に７本全部に書いて仏前に供え、七七日の読経を終えてから墓前に建立するのを基本としている。

今回出土の７本も、全く同じ規格の塔婆（五輪塔状の切り込み位置すら違えない）を用いていることや、一定の書式で、しかも同一人物の筆によると考えられることなどから、７本すべて同一の日に書かれたものであり、その供養方法が現在と変わらなかったことを示唆する。

次に、塔婆に書かれる文言と書式であるが現在では宗派によって細かく規定されており塔婆から宗派を限定することは比較的容易である。しかし、今回出土の塔婆については、現在用いられているいずれの宗派の書式とも一致しない。僅かに、No10、No12の文言が「甘露門」という禅宗の経文からの一文であることや、No11の漢詩が禅書に禅語録として納められていることから、禅宗の可能性を推定するにとどまる。

こうした、現在用いられている書式に一致しない事実を、「書式が確立される以前の時期であった」と考えるか、「書式が一時曖昧になった時期[9]」と捉えるか、または「単に記した個人の問題[10]」として片付けるか、今のところは即断を避けておきたい。

いずれにしても、今回出土の卒塔婆は、紀年銘を有すということに限らず、近世直前の仏教文化を窺う上で貴重な資料といえよう。

4　出土遺物

ＳＤ13から出土した遺物は、総数3,734点[11]の多量の土器類の他、木製品では前述の卒塔婆、「南無阿弥陀仏」の名号を記した木簡、槍形の形代、漆塗りの椀等、石製品では五輪塔、宝篋印塔の各部分が出土している。寺院の堀という遺構の性格上、遺物全体にも仏教的な色彩が強く認められる。

ここでは、紀年銘資料との関係で最も注目される土器について述べておきたい。

総破片数3.734点のうち、測図が可能なものは108点であり、内訳は土師器56点、陶磁器52点であった。以下主要な器種について概略しておく。

土師器・瓦質土器（第２図1 ～12）

（皿）法量から径８cm（４）、径11cm（１～３）に分類できる。いずれもロクロ成形であり、底部には糸切痕をとどめる。また、両者とも灯明皿に使用されたものを含む。

（小皿）ＳＤ13から最も多く出土した土器がこの径５cm～６cmの扁平な小皿である[12]。日常用いる器とは考え難く、上記の皿とは区別した。すべて手づくねによるもの（５・６）手づくね成形の後、ヘラ状工具で内面を調整するもの（内面にハケメをとどめる）（７・８）ロクロ成形によるもの（底部に糸切痕を残す）（９・10）に分類できる。

その他の土師器として焼塩壺の蓋（11）がある[13]。また、通常土師器の主構成をなす鍋・釜類は細片のものに限られている。

（瓦質土器）印花文を施した香炉が一点あり、畿内からの搬入品と考えられる。

陶器（第２図13～50）

（椀）瀬戸、美濃製品（鉄釉14～23・長石釉13）の他、唐津が１点出土している。

法量から径12cm前後のものと、径８cm以下の小椀とに分けられる。

そのうち主となるのは、前者の所謂天目茶椀である。23は化粧掛けが行なわれており、16世紀前半に比定される。19は器高7.2cmを測り、他と比べ大ぶりとなる点で新しい様相を呈す。

24唐津は、灰釉系の釉（灰色に発色）を掛けた無文の椀であり、露胎部分は赤褐色を呈す。口縁は内湾ぎみに立ち上がり、高台はケズリ出しによる。岸岳系の飯洞甕窯、山瀬窯の製品に酷似し、大橋氏の編年[14]によるⅠ期（16世紀末～17世紀前）に相当する。

（皿）瀬戸、美濃製品に限られる。口径から８cm未満（灰釉26）、10cm内外（灰釉27、鉄釉28・29）、12cm内外（長石釉30～36）に分けられる。そのうち、灰釉鉄釉製品と法量を違えることに大きな特徴がある長石釉の皿は注目される。

無文31～33、鉄絵30、所謂菊皿34～36の三タイプに分類でき、更に無文の皿は、口縁が外反するもの32・33、しないもの31、（一点出土の鉄絵皿の口縁は外反しない）、菊皿は花弁状の文様を内面だけに施すもの34・35と、外面にも施すもの36（口縁はともに外反しない）に細分できよう。また各タイプの法量は、器高2.2cm～2.7cm、口径11.4cm～12.4cmの間におさまるまとまりがみられるが、外反しない無文皿のみ器高３cm、口径12.8cmと異にする[15]。

（甕）常滑の無釉陶器が出土している。（50）赤羽氏の編年試案[16]によればⅢ期のCに位置づけられ、16世紀後半の年代が考えられている。

（その他の土器）瀬戸・美濃製品に限られる。

（壺）鉄釉42～46、（鉢）鉄釉擂鉢37、長石釉38～41、（羽釜）鉄釉48、（香炉）灰釉47　16世紀前半代の製品、（蓋）鉄釉29、等がある。

尚、瀬戸・美濃製品は、そのほとんどが井上編年[17]Ⅴ期に比定されるものであり、16世紀後半～17世紀初頭の年代が与えられる。

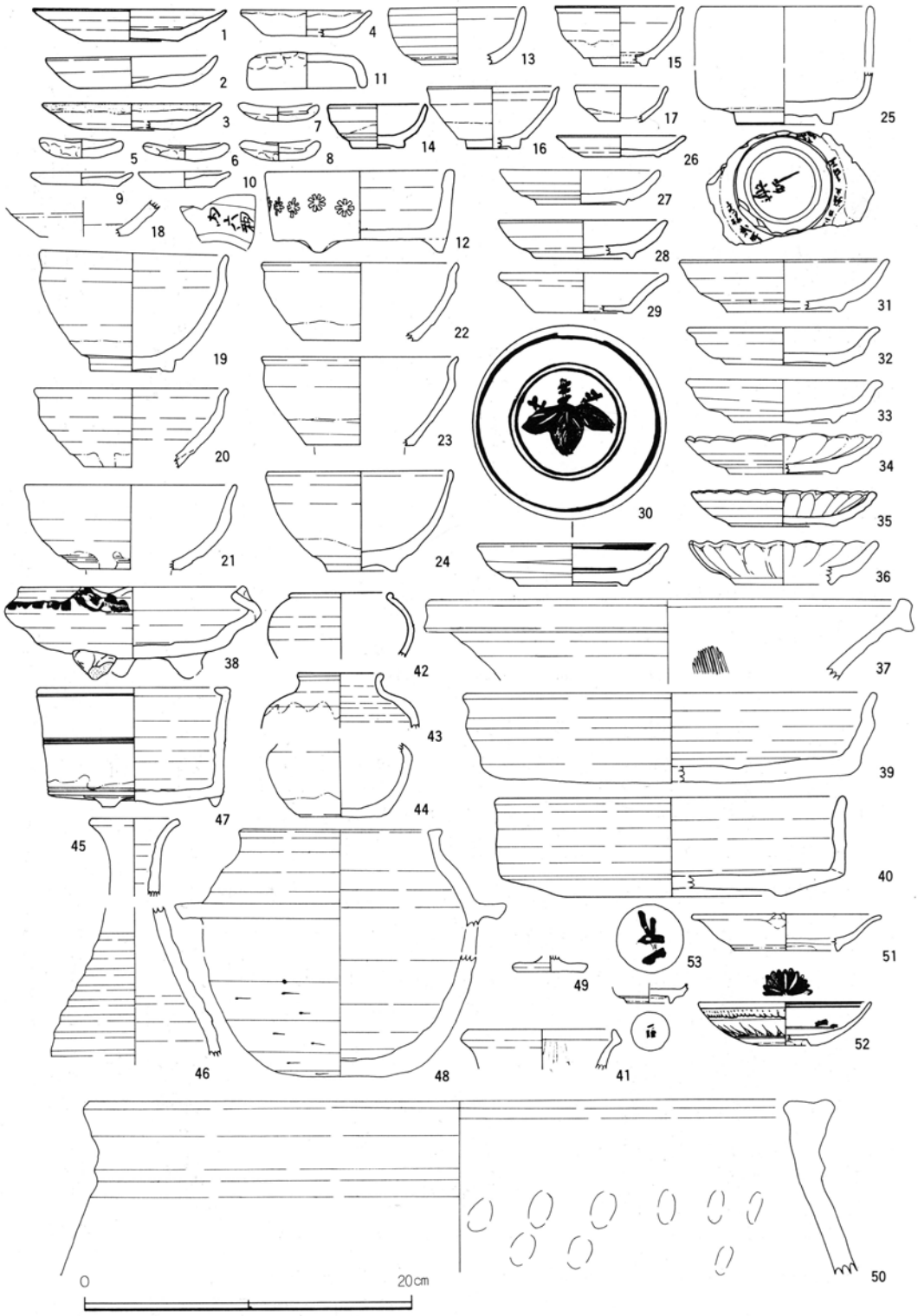
輸入磁器（第２図51～53）

白磁皿51、染付皿52、染付小椀53がある。そのうち51・52は、小野氏の編年[18]によるC群にあたり、15世紀末～16世紀中葉の年代が比定される。

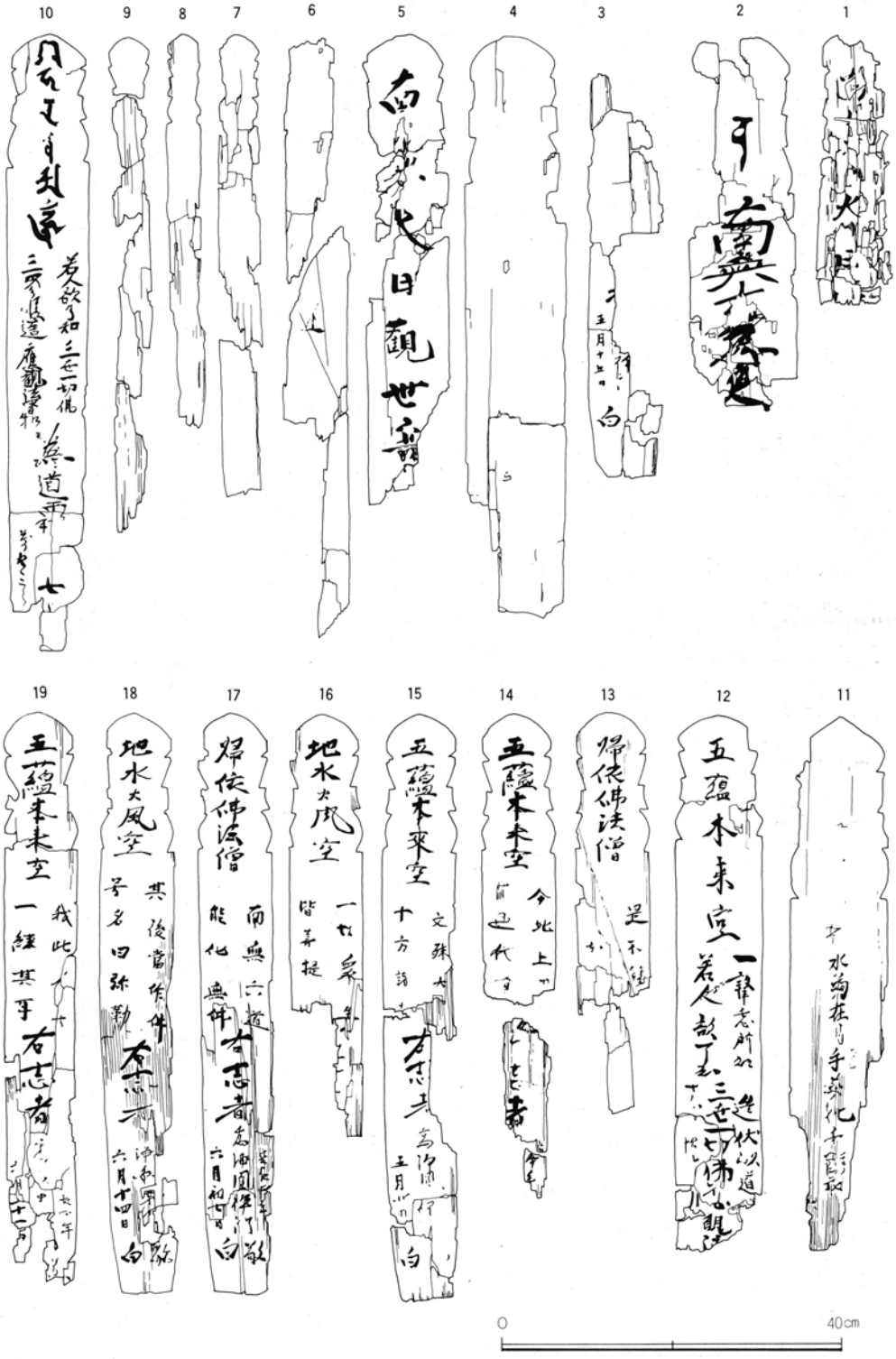
5　おわりに

土器編年における紀年銘資料の重要性は、あらためて述べるまでもないが、前項では紀年銘資料をあえて無視し、従来の年代観のみによって出土遺物の年代を考えてみた。

本稿を終えるにあたって、これら従来の編年観に、今回出土の紀年銘資料がどう関わっ



第２図　ＳＤ13出土土器



第3図　ＳＤ13出土卒塔婆

ていくのかを整理し、（特に瀬戸・美濃製品について）まとめにかえておきたい。

まず、ＳＤ13出土の瀬戸・美濃製品が大窯Ⅴ期を中心に構成されていることは前述した。そこで大窯Ⅴ期の年代観を井上編年に従い、今一度整理しまとめておく。

上限は「長石釉の出現」とし、その年代を大坂城・根来寺・堺市環濠都市等、消費地での長石釉製品のあり方から、大正十一年（1583）～天正十三年（1585）に設定されている。また下限は、「連房式登窯の出現（織部の出現）まで」とし、織部の紀年銘資料などから慶長十年（1605）以前とされている[19]。

すなわち、大窯Ⅴ期の年代は、天正十二年前後から慶長十年までの約20年間であり、文禄二年、慶長三、四の紀年銘資料は、この年代幅中にいずれも納まることとなる。以上のことから、今回出土の紀年銘資料とその共伴遺物は、全体としては従来の編年観を裏づけるものと言えよう。

さらに、今回の資料が、従来の編年に大きく関わる点は、大窯から連房式登窯への転換期についてである。

編年では、「慶長十年以前」という年代が示されているものの、消費地での良好な例が無い為、判然としない現状にある。従って、慶長四年銘資料に、連房式登窯の製品が伴なうかどうかは最も注目されよう。（遺構の廃絶時期はあくまでも「清洲越し」以降と考える。その意味において、年代枠を慶長十五年にまで下げることが可能である。）

しかし、連房式登窯製品の有無については以下の問題点により、不明と言わざるを得ない結果となった。

一番問題となったのは、大窯・連房式登窯の編年がその名の通り窯の区分であり、土器の編年でないことである。

井上編年では「登窯Ⅰ期は、大窯時代の釉ないし器形そのものを引き継いでおり、この時代に新たに登場するような釉薬、手法、技法は少ない」と述べておられ、その編年基準を、焼き締まりの違いや、所謂緋色の有無などの、焼き上がりの僅かな差に求められている[20]。同一の手法、技法、釉薬を用いた同じ器形の土器が、上・下に編年されていることは本来の「土器編年」から大きく矛盾していると言わざるをえず、今後、編年上での大区分に用いられている「大窯期」「登窯期」の名称をも含め再検討が望まれよう。

二番めの問題として、所謂「織部」が挙げられる。

前述の如く、他の器種からは大窯と登窯との判別を明瞭にしえない為、現在では大窯から出土の例がない「織部」をもって登窯Ⅰ期の基準とされている。しかし、「織部」という特殊な陶器の有無により、遺構、遺物の年代を決定することは（特に消費地遺跡においては）極めて危険と思われる。さらに、登窯Ⅰ期初頭の他器種が、大窯期と変わらぬ器形

であったことを考え合せば、登窯開始の時期と「織部」の焼造開始の時期との間に、若干の時期差を推定することができる。従って、「織部が無い」＝「登窯以前の時期」とは一概に言いきれないと考える(21)。

本稿は、ＳＤ13出土の紀年銘資料と、その共伴遺物を紹介することにあった。

合せて、若干の課題・問題点をも記したが、触れえなかった問題は多岐に渡っている。(特に遺物相互の横へのつながりに関しては全く不十分であった。)今後、考察を進めるにあたり、さらに整理検討する必要があろう。

末筆ながら、ＳＤ13の出土遺物を整理する過程においては、諸先生方より数々の御教示御協力を得た。記して謝意を表します。

赤羽一郎、伊藤嘉章、井上喜久男、江崎武、加藤優、楢崎彰一、鷲阪宗演　　(敬称略)

〔注〕

(1) 事実、当溝の掘り方を構成する黄灰色土、淡茶灰色粘質土は、13世紀～14世紀の遺物を多く包含しており、色調、質ともに溝上層の埋土と酷似する。
(2) 第２図の18施釉陶器椀（鉄釉天目茶椀）がそれである。高台脇の化粧掛け部分に「為六親□」の供養文句が書かれている。
(3) 尚「楽師」については、幸若舞等の能楽関係を推定している。金原宏「「楽師」黄瀬戸椀」（『埋蔵文化財愛知』No１、1985）
(4) 瀬戸、美濃大窯の年代観については、井上喜久男氏の編年による。井上喜久男「16世紀の瀬戸・美濃窯」（『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会1985）他
(5) 器形は、多児見市小名田町尼ヶ根１号窯出土の筒茶椀（瀬戸黒）に最もよく類似する。通常瀬戸黒の釉が掛けられるべき器形に、鉄分の多い灰釉が掛けられた感じを強く受ける。
(6) 所謂「黄瀬戸」の範疇に考えることもできよう。「文禄二年の黄瀬戸」となれば可児市大萱の窯下窯から出土した「文禄二年銘入り黄瀬戸」が思いおこされる。しかし、窯下窯出土の黄瀬戸は「油揚手」と呼ばれる最盛期の黄瀬戸であり、本資料の釉とは明らかに異なる。
(7) 紀年銘を有す卒塔婆の出土例としては、
　○福井県一乗谷遺跡　永禄元年（1558）　天文18年（1549）
　○広島県草戸千軒町遺跡　永禄４年（1561）　明応２年（1493）
　○岡山県助三畑遺跡　応永30年（1423）
　○兵庫県鵤、城山遺跡　文明６年（1474）
　があり、すべて室町時代以後であることは注目される。
(8) 注７の４遺跡から出土の卒塔婆にも、七本塔婆と考えられるものを含むが、七本とも出土した例はない。
(9) 助三畑遺跡から出土の卒塔婆は七本塔婆と考えられるが、書かれている文言、書式は現在の真言宗で用いる書式と全く一致している。
(10) 本遺跡出土の卒塔婆には、誤字、当て字、連文の入れ換え等が多く見られる。
(11) 埋土の説明で述べた如く、上層からは前時代の遺物が多量に出土している。ここでは、これらの遺物は除外した。
(12) この種の小皿は、清洲城下町遺跡や、堺市環濠都市遺跡などからも多く出土している。溝から出土する例がほとんどであり、川、堀、溝に関する信仰が推測される。
(13) 渡辺誠氏の分類によればＡ類にあたり、最も古いタイプに属す。渡辺誠「焼塩」（『日本技術の社会史』第二巻日本評論社　1985）
(14) 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」（『国内出土の肥前陶磁』丸州陶磁文化館　1984）
(15) 同時期の窯である土岐市高根山窯沢１号窯での法量結果とよく一致し、特に外反しない無文皿の法量については、他と異なることが報告されている。（『高根山古窯跡群』土岐市教育委員会　1984）
(16) 赤羽一郎「戦国期の常滑窯製品の推移（試案）」（『近世城館跡出土の陶磁をめぐって』座談会資料　愛知県陶磁資料館1984）
(17) 注４文献
(18) 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No２日本貿易陶磁研究会　1982）
(19) 大窯が17世紀前半まで存続したことは、土岐市隠居山西窯、高根山窯沢窯などの古窯址の調査からも明らかとされている。
(20) 注４文献
(21) 今回の調査を含め、清洲城下町での織部の出土は皆無に等しい。
　又、今回出土の資料の中で、連房式登窯製品の可能性をもつものとして、第２図19が挙げれよう。

尾張国の「条里制」小考

— 阿弥陀寺遺跡の調査から —

浅 井 和 宏

1　はじめに

阿弥陀寺遺跡は、尾張平野の一角、愛知県海部郡甚目寺町石作の字「阿弥陀寺」地内を中心とする一帯に所在する遺跡で(1)、昭和56年度より、環状２号線（国道302号）建設に伴う事前調査として継年で発掘調査を行なっている(2)。遺跡の所在地は、条里制遺構（地割）が展開するところであり、調査に際しては、条里制遺構の形成過程の究明を重要課題の一つとした。その結果、昭和60年度の調査を終えるにあたり、当該地における条里制遺構の形成について新たな所見を得るにいたった。そこで、個々の遺構に関してはなお検討を要す点も多く、詳細な検討を経たのち結論とすべきことが本来の姿であるとは考えるが、全国各地で次々と条里制遺構の発掘が行なわれるなかにあって、尾張平野における一例として、とりあえず今までの調査によって明らかにすることが出来た諸点について報告することも有意義なことと考え、ここにその報告と若干の派生する問題点について考察を行なうものである。

2　阿弥陀寺遺跡周辺の条里制遺構

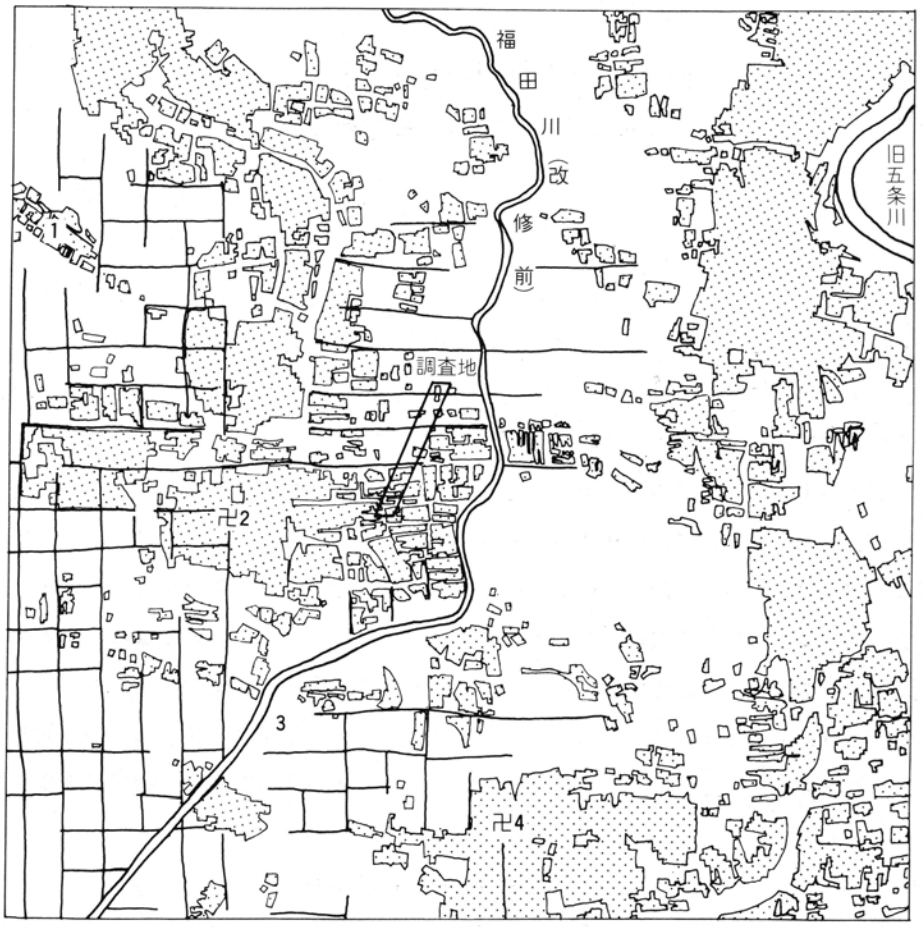
当遺跡周辺の条里制遺構の分布については、すでに水野時二、金田章裕両氏により研究がなされ、その成果は公表(3)をみているが、両者の間には見解の相違がみられるようである（第１・２図)。 両氏の研究は、尾張平野全域を視野に入れたものであり、その分布図



第１図　水野時二氏案　（●印調査地）

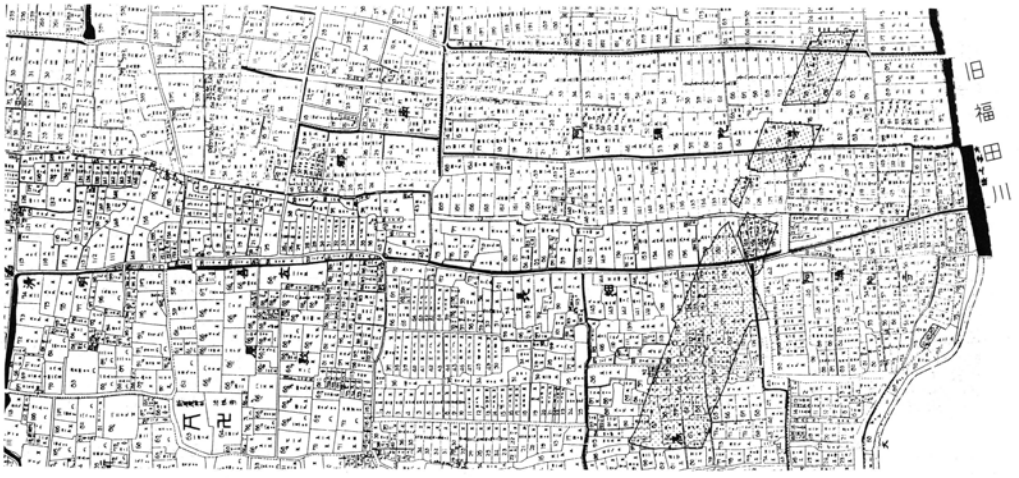


第２図　金田章裕氏案　（●印調査地）



第3図　阿弥陀寺遺跡周辺の条里制遺構　（網点は微高地）

1．森南遺跡　　2．法性寺　　3．大渕遺跡　　4．甚目寺　　＃　条里制遺構（坪界）



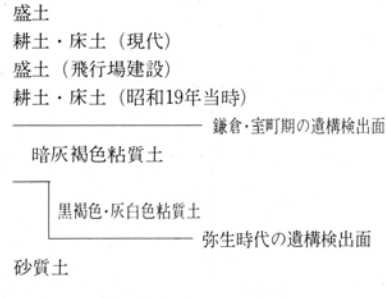
第4図　調査区（網点）と周辺の地割（「愛知県海部郡甚目寺町土地宝典」昭和13年）

も大縮尺となっている。そこで、いまここに、両氏の見解に導かれつつ遺跡周辺に限り作成したのが第３図である。作成にあたっての手順は次の通りである。資料としては、昭和13年作成の地籍図[4]をベースマップとし、これを米軍撮影の航空写真（昭和23年）及び各種地形図で補正した。条里制遺構の認定については、(1)一町（約109m）四方の方格の土地割であること。(2)一町方格内が長地型、半折型乃至その変形とみなされる土地割をしていることの二点を指標として適宜判断した。第３図の示すところによれば、阿弥陀寺遺跡周辺の条里制遺構は、遺跡の西側に展開する南北に長い大きな微高地の南西側に顕著であり、当遺跡側は、比較的希薄・不鮮明になっていることが知られる。また調査地点周辺の条里制遺構の特徴としては、東西方向の坪界線が明瞭であり、南北の坪界が不鮮明であるといった点が指摘される。

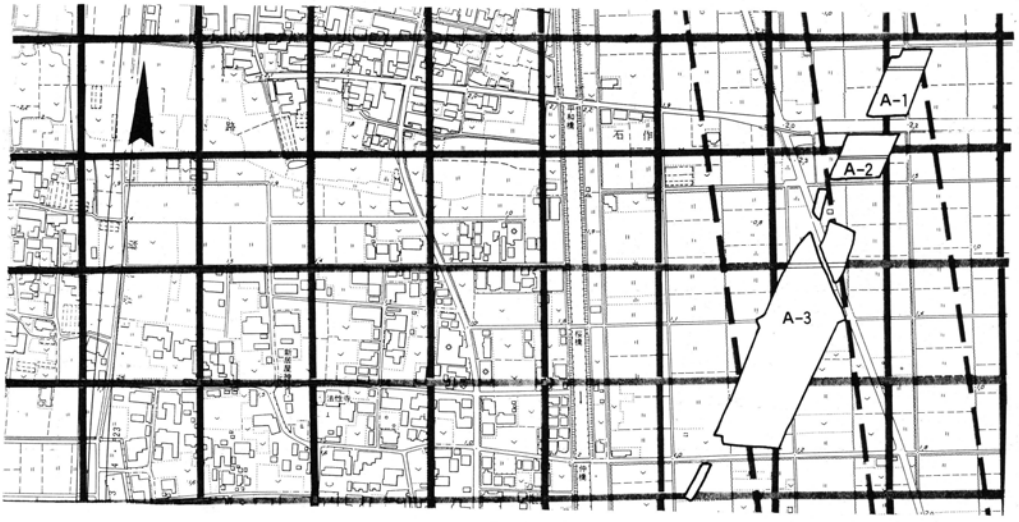
なお、調査地の南側の微高地は、東西・南北が直線的に分断されており、線引きはしなかったが条里制プラン下におかれる可能性は極めて高い。

3　検出遺構

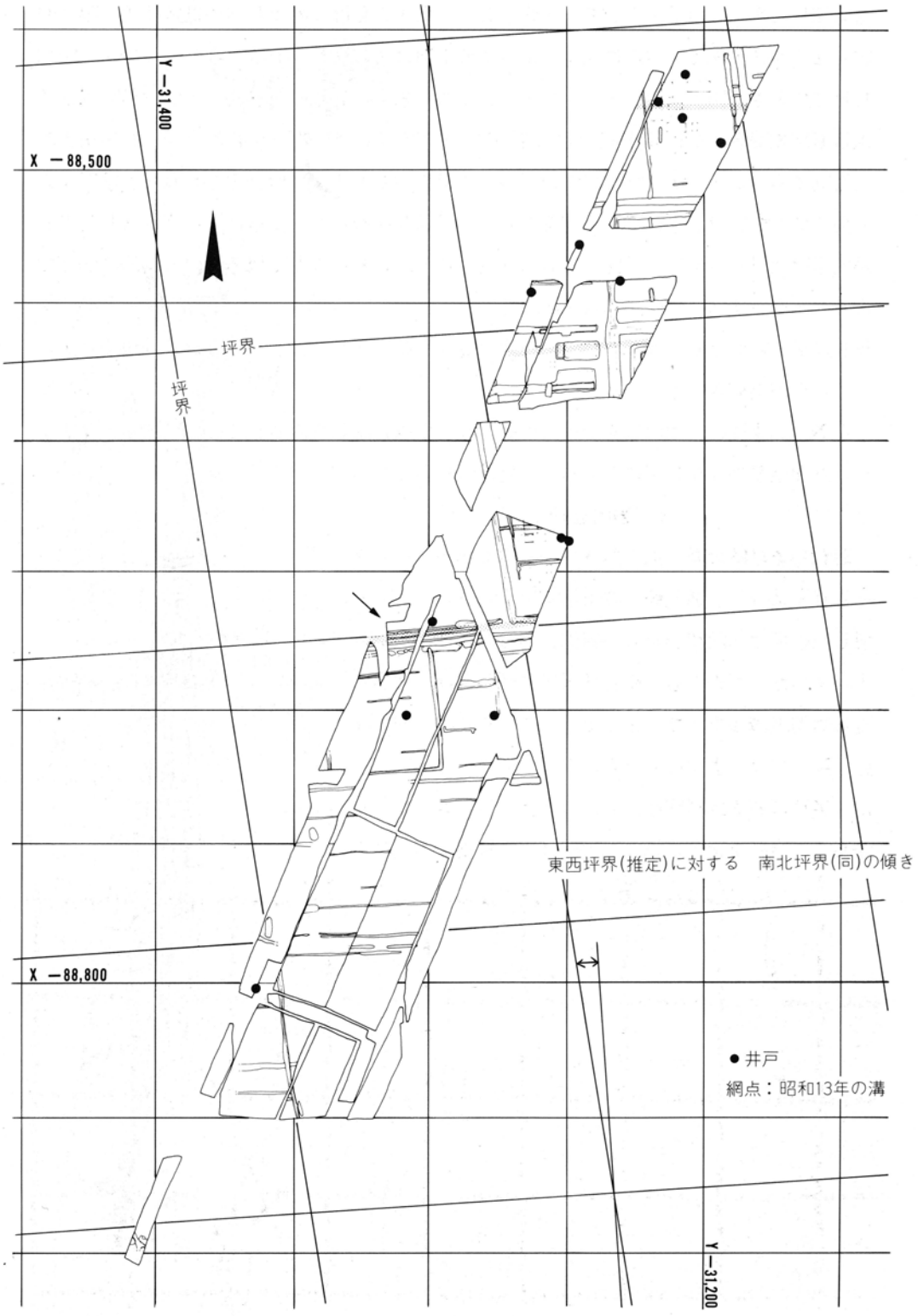
昭和13年当時の溝　条里制遺構分布図の作成過程から知られるように、調査地点に条里制遺構が存在したと判断した根拠は、昭和13年の地籍図にみられる地割のあり方であった。なかでも、調査地周辺については、坪界を走る道乃至溝は有力な手掛りであった。そこで、発掘調査に際しては、まずその径溝の確認から行なうこととした。遺跡の基本的層序は、概ね第５図に示す如くで、昭和19年の飛行場建設に伴う整地により調査地点の大半が



第５図　基本層序



第６図

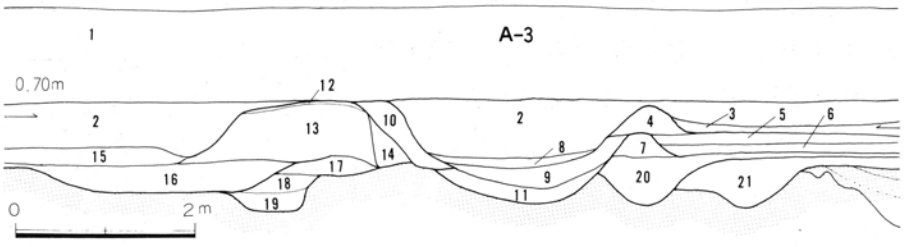

Y −31,400
X −88,500
坪界
坪界
東西坪界(推定)に対する　南北坪界(同)の傾き
X −88,800
● 井戸
網点：昭和13年の溝
Y −31,200

第7図

盛土されており、以前の耕土（以下旧耕土）が良好な状態で存し、昭和13年当時の溝等の（坪界）の確認が容易であったのは幸いであった。いまこれらを示せば第６図の如くである（A－1～3）。

鎌倉・室町時代の遺構　鎌倉・室町時代の遺構は、旧耕土・床土の直下において検出された。個々の遺構の時期区分についてはなお検討を要す面もあるが総じて14・15世紀代に比定されるものである。[5] これらの遺構群は一見して知られるように、東西・南北に対して強い方向性をもっている。溝の方位について整理してみると、(1)東西方向の溝はE－2°30′－N前後に集中するのに対し、(2)南北方向の溝の方位はバラつきをもつが、概して真北に対して5°前後西へ振れている。(3)したがって、両者の交点は直角となっていない、という特徴をもっている。（2)・(3)のあり方は、異質であるが、(1)については、周辺の条里制遺構とほぼ同一方位であり、この点を重視し、これらの遺構群は条里制下での所産と考える。

遺構の検討　次に、鎌倉・室町期の遺構と昭和13年当時の溝との関連について考えてみる。第７図は、両者及び復元されるところの坪界線（後述）を重ね合わせたものである。注目されるのは、矢印地点（A－3）の重複関係である。この部分は、地籍図より復元されるところの坪界にあたる。第８図はその断面図であるが、幾条もの溝が逐次掘られたことが伺われる。このことは、この地点（ライン）が耐えず意識されつづけてきたことの証左と考えられる。加えて、この溝は西へ延び、遺跡の西側展開する南北に長い大きな微高地を横断し、微高地の西側の条里制と連続していることも、このライン（坪界線）の重要性を裏づけている。これらのことから、少なくともこの坪界線については、14・15世紀代に遡ぼり得るものと考える。そのほか、昭和13年当時の溝の位置即ち坪界線は若干のズレをもつが、14・15世紀代の屋敷地の北端部（A－1）、幅広で堅固な溝上（A－



第８図　60D区　西壁断面図

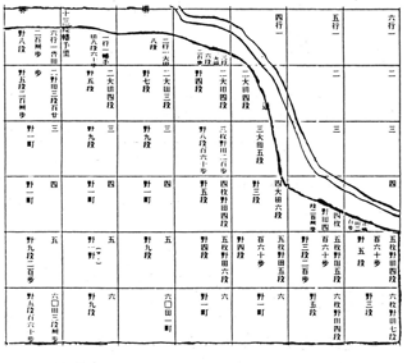
1．盛土(現道)　6．水田耕土　11．暗灰褐色粘質土　16．暗茶褐色粘質土　21．暗灰褐色粘質土
2．盛土　7．畦　12．黒茶褐色粘質土　17．明灰褐色砂質土　16－SD09
3．水田耕土　8．暗青灰褐色砂質土　13．暗茶褐色土　18．暗灰褐色土(SD10)　18.19－SD10
4．畦　9．暗青灰褐色粘質土　14．水田耕土のブロック　19．暗灰褐色粘質土　20－SD11
5．水田耕土　10．暗灰褐色土(混レキ)　15．水田耕土　20．暗(茶)灰褐色粘質土　21－SD12

2）という具合に大局的には対応をみせており、また遺構群のまとまりからみてその位置(重複)関係に格別の不自然さは認められない。また、A－3地点より南約109m地点にも、鎌倉・室町期の遺構（東西溝）の集中がみられこれも同様、坪界線に想定されよう。

以上の諸点より、当該地の条里制遺構（地割）は、14・15世紀代まで遡り得るものと考えられよう。その際、南北坪界線のあり方が問題となるが、この点については昭和13年の地籍図に明確でないこともあって判然としないが、とりあえず鎌倉・室町期の遺構より第7図の如く想定してみた。かかる想定は、西方の現存坪界線と齟齬をきたすことになり（第6図）、新たな問題が生じるが、この点は阿弥陀寺遺跡にとどまらない問題なのでここでは、これ以上の追究はさけたい[6]。なお、東西坪界線に対し南北坪界線がやや鈍角に交わり、坪が平行四辺形になってしまう点については、その理由はわからないが類例のないことではない[7]。

4　条里制の施行年次をめぐって

以上のように、阿弥陀寺遺跡における条里制遺構の形成は、遺構の示すところによれば14・15世紀代と考えられた。これは、条里制の施行を奈良時代に求める通説と大きく齟齬をきたすことになる。そこで、次にこの年代の取り扱い（解釈）について若干の私見をのべてみたい。この場合遺構の年代の解釈をめぐり二つの立場がある。1つは、遺構の年代を以ってストレートに当該地の条里制施行年次とする立場である。もう1つは、条里制を、画一的な「地割制度」を伴うところの「地番制度」と考え、「条里制の施行」即「条里制地割（遺構）の施行（存在）」とはならないとする立場である。後者について、もう少し説明すると、奈良代の田図に第9図[8]の如きものが少なからずみられる。注目したいのは、図中の「野」（未墾地）という表記の存在である。つまり、条里制施行時には、未墾地区も含めて「地番」付けがなされていたことが知られるのである。そして、もし仮りに「野」の地域の「地番」（土地区分の意識）が何らかの形で14・15世紀代までも効力をもっており、その時期に「野」が開墾され耕地化されたとするならば、条里制遺構と認定される遺構年次は、14・15世紀代を示し、必ずしも「条里制の施行」年次を示さないということになる、ということである。



第9図　越中国新川郡丈部開田図（部分）

阿弥陀寺遺跡においては、後者の考え方を支持したいと考える。その理由としては次の三点をあげたい。まず第一点は、文献史料の示すところによれば[9]、尾張国においては、遅くとも9世紀代

にはすでに条里制が施行（地番付）されていたことは確実であり、殊に中島・丹羽郡については、８世紀中葉の証左があるということである。遺跡周辺の条里制遺構は、巨視的にみて、遺跡の西側に大規模に展開する条理制遺構と連続しており、厳密には調査地点における施行の有無は確かめられないが、その可能性は高いものと考えたい。第二点としては、近隣の遺跡における土地割のあり方である。すなわち、阿弥陀寺遺跡の西北約1.2kmに位置する森南遺跡(9)（甚目寺町森13世紀）では、立地する微高地の南・北・東側が条里制遺構にもかかわらず微高地上では、地形に合わせた開発がみられる。同様のことは、土田遺跡（清洲町土田　12～13世紀）においても看取される(11)。これらは、阿弥陀寺遺跡を取り囲む環境において、当該期には、開墾に際し、「条里制」のもつ規制力が失なわれていたことを示している。この意味において、阿弥陀寺遺跡における条里制遺構の形成には前代よりの「地番」の強固な存在を予想せざるを得ないのである。第三点としては、消極的な理由ではあるが、阿弥陀寺遺跡の周辺には、法性寺、甚目寺、清林寺などの古代寺院（白鳳時代～）が存しており、所謂条里制の施行期には有力者の存在が認められるのであり、この点において、その時期に条里制が施行されたとしても不自然さはなく、加えて法性寺・甚目寺の境内（現在）は、ともに条里制遺構の南北坪界のいわばつきあたりの位置にあたることもその徴証かと思われる。

以上の三点より、調査地点における条里制遺構の形成については、「遺構の年代」即「条里制の施行年次」とは考えず、奈良時代に条里制が施行（地番付）され、それに沿った形での開墾が14・15世紀代になされ、条里制遺構（地割）が形成されたものとする方がより妥当性があるものと考える。なお、ここで注意したいのは、最近、全国各地で条里制遺構の発掘調査が進められているが、その報文のなかに条里制遺構の示す年代観より「古代条里」、「中世条里」なる言葉（概念？）が安易に用いられる傾向にあるが、その用法については、上述での意味において十分に慎重になる必要があろうと考える。

最後に、本稿をまとめるにあたり、昭和59年度調査迄の遺構の分析については梅本博志氏の成果によるところが多い。記して謝意を表したい。

〔注〕

(1) 後述するように条里制遺構（地割）を「遺構」とする立場にたつと、遺跡の範囲については、にわかにはきめ難くなる。
(2) （財）愛知県教育サービスセンター『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（昭和58～60年）及び本年報
(3) 水野時二『条里制の歴史地理学的研究』（昭和46年）、金田章裕『条里と村落の歴史地理学研究』昭和60年）
(4) 帝国市町村地図刊行会『愛知県海部郡甚目寺町 土地宝典』（昭和13年）
(5) 注２の文献参照　当該期の遺物の編年観については流動的な面がある。
(6) 注３の金田論文「第二章開発と条里プラン」参照
(7) 注３の金田論文ｐ200．図２－６参照
(8) 「越中国新川郡丈部開田地図」（天平宝字３年・正倉院蔵・『大日本古文書』編年之部家わけ18東大寺文書４）
(9) 一宮市『新編一宮市史本文編上』（昭和52年）　ｐ216～ｐ243等
(10) 昭和58年調査、長島広・安藤義弘氏の教示による。
(11) 注２の文献参照

朝日遺跡の玉作

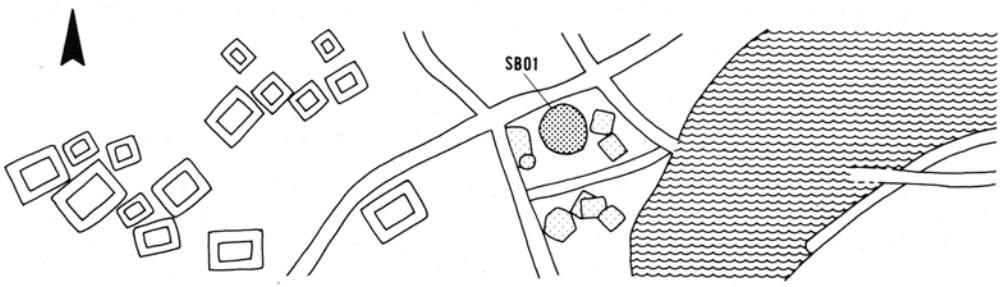
丹羽　博

1　はじめに

朝日遺跡は、周知の通り東海地方屈指の弥生時代集落跡であり、過去10数年に渡る調査によって明らかにされたその内容は、弥生時代全期に及び多岐多様にわたり、出土資料は膨大なものとなっている。従来よりその資料中に、玉作に関わる遺物の存在が指摘され、当集落においても玉作が行なわれていたことが示唆されていたが、これらの資料は所属時期・遺構等明らかなものは少なく、その製作手順を復元するには至っていない。今回当センターが調査した60G調査区において、Ⅱ期(1)の住居跡（以下ＳＢ01）より、玉作に関わる資料を検出することができ、その内容は管玉の製作手順を復元しうるものとなっている。そこでここでは調査事実を報告するとともに、従来の出土資料（以下県資料）(2)も含めて製作手順の復元を試み、若干の考察を加えることにする。

2　ＳＢ01

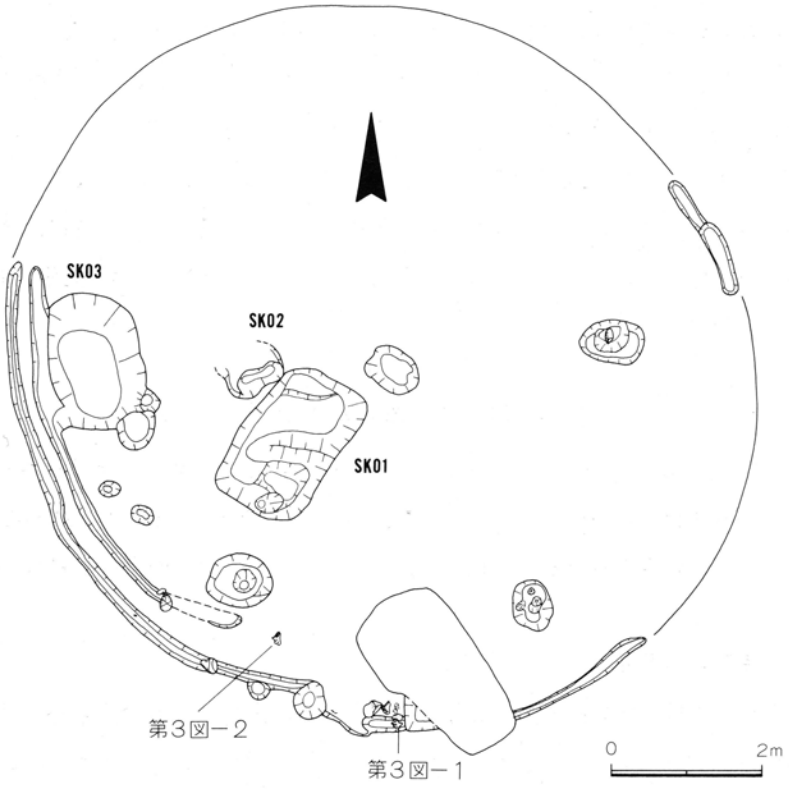
玉作に関わる資料を出土したＳＢ01は、現在までの調査により明らかにされた、谷地形の南北に展開するⅡ期の集落の内、北の集落に属するものと考えられる。ＳＢ01の占地する位置（第１図）は、集落の南西隅に当り、これに従属すると思われる方形周溝墓を中心とした墓域（西１群）と溝を介して近接する。ＳＢ01の北には東西に走る溝が存在し、東には北集落の環濠が走り、集落の中心部とは隔絶された空間を作り出している。この空間



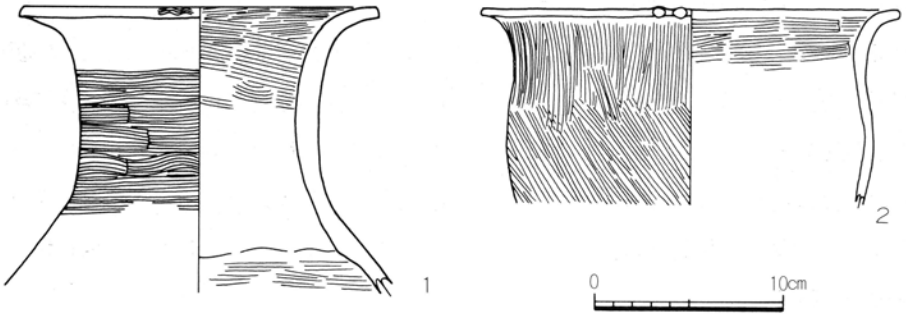
第１図　ＳＢ01位置図

には、Ⅱ期の住居跡が切り合い関係を有して10数軒存在し、Ⅱ期のある時期に東西に走る浅い溝が掘削され、この空間に新たな方形区画が意識される。ＳＢ01はこの方形区画のほぼ中央に位置している。この浅い溝とＳＢ01との間は周囲より高まり無遺構で、空間として意識され、Ⅲ期の遺構も見られない。

ＳＢ01は、直径10m ×9.5m の円形住居で、 幅20cm前後の周溝が回る。西辺の一部は二



第２図　ＳＢ01平面図　　１：100



第３図　ＳＢ01出土土器　　１：４

重になり拡張が認められる。床面には多数のPit・土壙が存在するが、平面図（第２図）にはこれに伴うと思われるものだけを取り上げた。主柱は６本と思われ、床面には大小の土壙が３基ある。ＳＫ01は２ｍ×1.2ｍの長方形を呈し、中央にはノ字状の土堤が作り出され、その南側は方形に１段低くなる。北側は平坦で、砥石（第７図）が置かれていた。この土壙内より、管玉完成品（第４図21）・同未製品(同３～20)・石錐（第６図９）・砥石（第７図）・剥片（緑色凝灰質頁岩・ガラス質石英安山岩・翡翠・黒曜石・緑色チャート・石英）等多数の玉製作関係の資料が、ＳＫ02からは管玉未製品・石錐(第６図10･11)、ＳＫ03からは板状製品（第４図２）が出土した。住居内床面には、炉跡・焼土面等は確認されていない。南辺に近い位置より２点の土器が出土している。（第３図１）は口径18.6cmの壺の肩部以上の資料で、頸部には貝殻による横線文が施され、２次焼成を受け赤変する。（同２）は口径21.8cmの甕で、外面は縦・斜位のハケで調整され、口唇には２個一対の圧痕が施され、胎土中に雲母片が目立つ。形態・調整は、いわゆる大和型甕に類似する。両資料共Ⅱ期に属する。

３　玉作手順の復元と実資料　（第４・５図）

今回製作手順を復元できたのは、ＳＢ01で行なわれていた玉作の内、緑色凝灰質頁岩を原材とする、細形管玉についてである。ＳＫ01等からは、緑色チャート・翡翠等の剥片も出土しており、これらを原材とする製品製作も行なわれていたものと推定される(3)。

手順１　　原石から石核へ

採集された原石の自然面を剥離し、実際に玉製作に使用出来うる質の部分を露呈させ、手順２における作業をスムーズに進めるため、より方体に近い形状に仕上げる。この段階での施溝の有無は不明である。今資料中にこの典形例は存在しないが、県資料中に数点ある。

手順２　　石核から板状剥片の剥離

手順１において整えられた石核から、板状剥片を剥離する段階である。(1)は、板状剥片を剥離した残欠と思われる資料で、剥離に先だち打撃面は研磨され、施溝具により施溝され、タガネ状石器を用い、間接剥離を行なう。岩質が軟質であり、より整った剥片を得るため、石核は全面研磨されている可能性がある。剥離された剥片は、全面研磨により、完成品の直径よりやや厚い板状製品に仕上げられる。(3)・(24)は、(25)に類似する小形の板状製品を作る過程の資料である。

手順３　　板状製品から角柱体へ

手順２で製作された板状製品から、角柱体を切断する段階である。板状製品に施溝し、タガネ状石器を用い、間接打撃により切断する。施溝は上下面両方からのもの（４・５・７・８）が主体を占めるが、上面からのみのもの（６）も存在する。また施溝は、切断を行なうたびに行なうものと思われるが、県資料には全面に施溝を行なっているものが見られる（25)。この資料は上面からのみ施溝され、実際に切断が行なわれており、この様な手順の介在も想定される。角柱体切断後、その切断面が研磨され、次の施溝・切断が行なわれる。この手法によって常に整った８角柱体を容易に得ることが出来る。また資料中に、８角の円盤状のものがいくつか見られ、この段階で角柱体の端を切断し、長さを整えている様である。角柱体の直径は、3.5㎜でほぼ揃っている。未製品中この段階の資料が最も多い。(９～16)

手順４　　多角柱体へ

手順３で得られた八角柱体に研磨を加え、多角柱体にする。多角といっても（18）や手順５の資料（19・20）に見られるように、２面を平坦に仕上げている。（17）は10角に研磨された資料である。

手順５　　穿孔

手順４で整えられた角柱体に、石錐によって穿孔する。穿孔は両端から行なわれるが、この面も研磨され平坦にする。（19）は上端から穿孔途中に放棄された資料で、（20）は上下からの穿孔は貫通しているものの、半截してしまった資料である。角柱体の２面を平坦にするのは、この段階で角柱体を直立させ、安定感を持って固定するのに、好都合である。

手順６　　仕上げ

穿孔された角柱体に研磨を加え、直径約３㎜の円柱体の製品に仕上げる。(21～23)

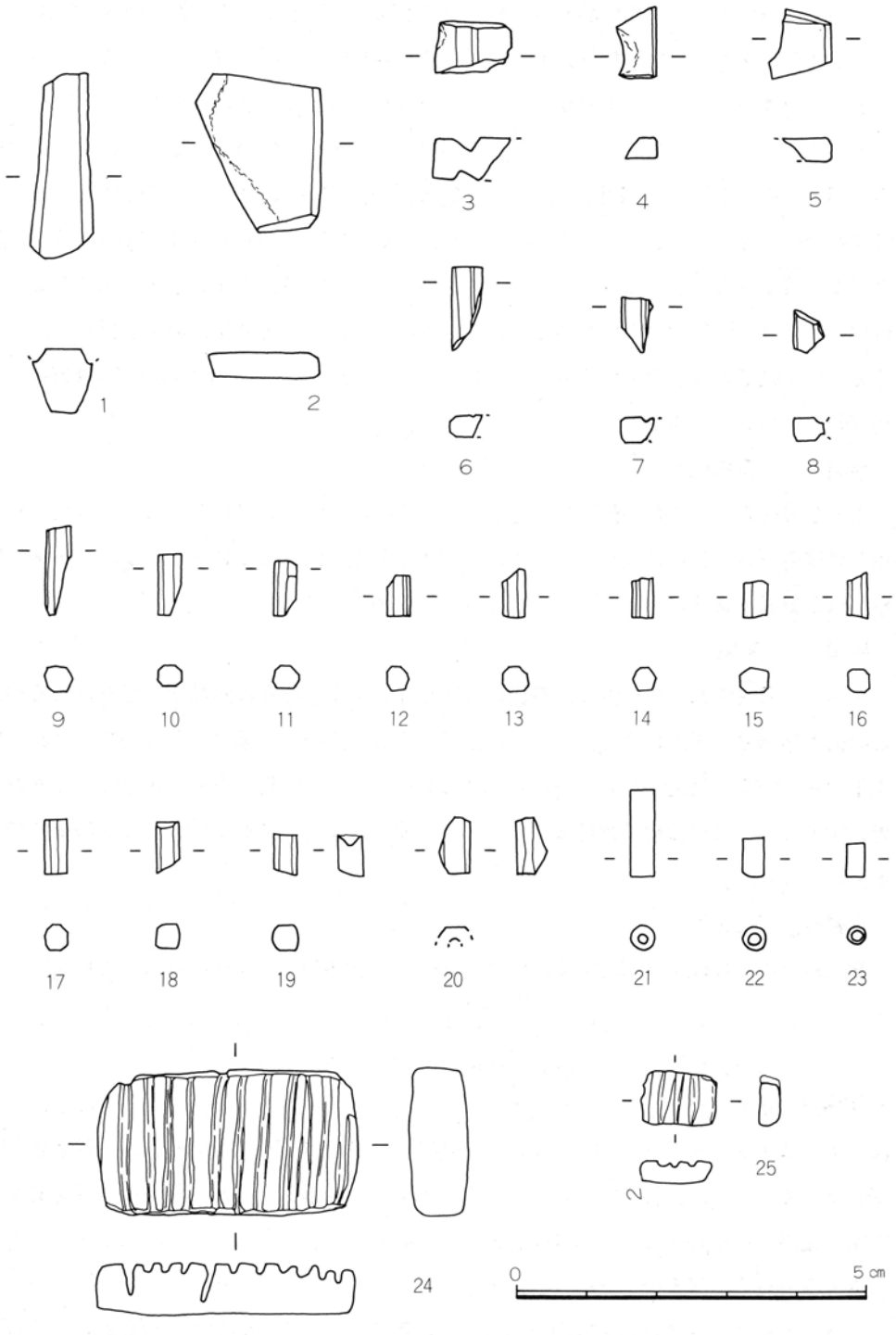
4　工具（第６・７図）

施溝具（第６図　１・２）

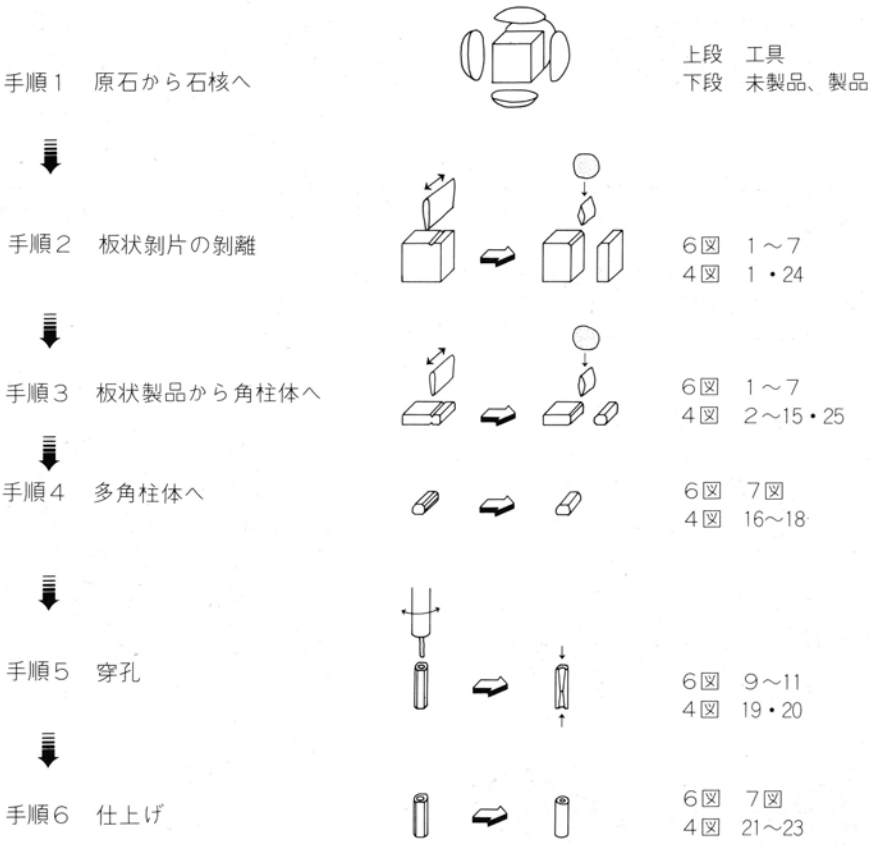
（１）は長さ6.9㎝、最大厚８㎜の珪化木製で、下端に内弯の刃部を有し、U字形に磨滅している。（２）は長さ8.2㎝、厚さ５㎜の雲母片岩製で、下端に外弯の刃部を有し、上端も使用のための磨滅が見られる。

タガネ状石器（第６図　３～７）

（３～５）はガラス質石英安山岩の剝片に剝離を加え、上下両端をクサビ状に仕上げる。（６）は磨製石斧、（７）は柱状片刃石斧の転用品で、両者共下端に使用による剝離が、



第4図　管玉未製品・製品　1：1（24・25は『朝日遺跡』1982より製図）



第５図　管玉製作手順模式図

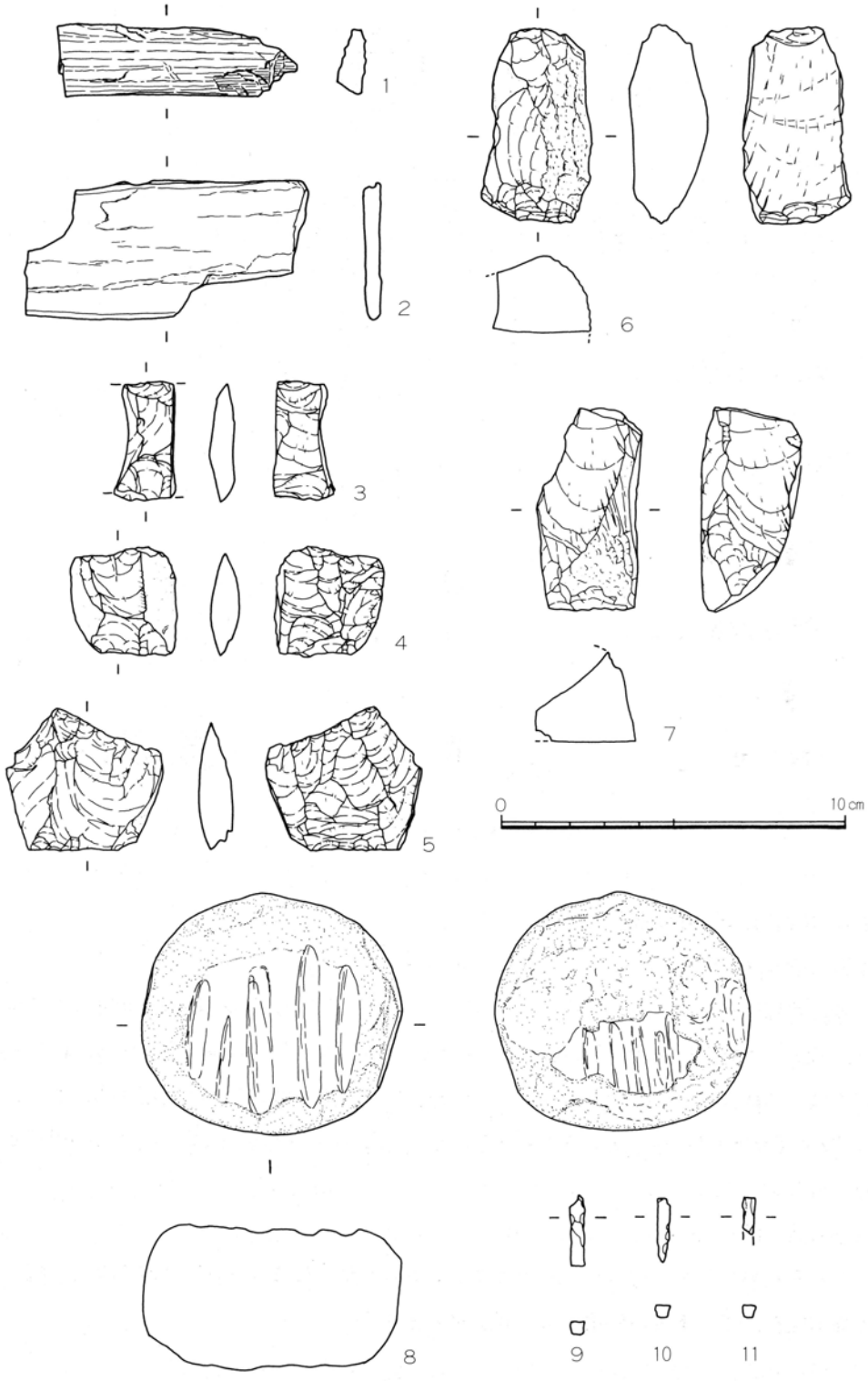
上端には敲打痕が見られる。

砥石（第６図　８、第７図）

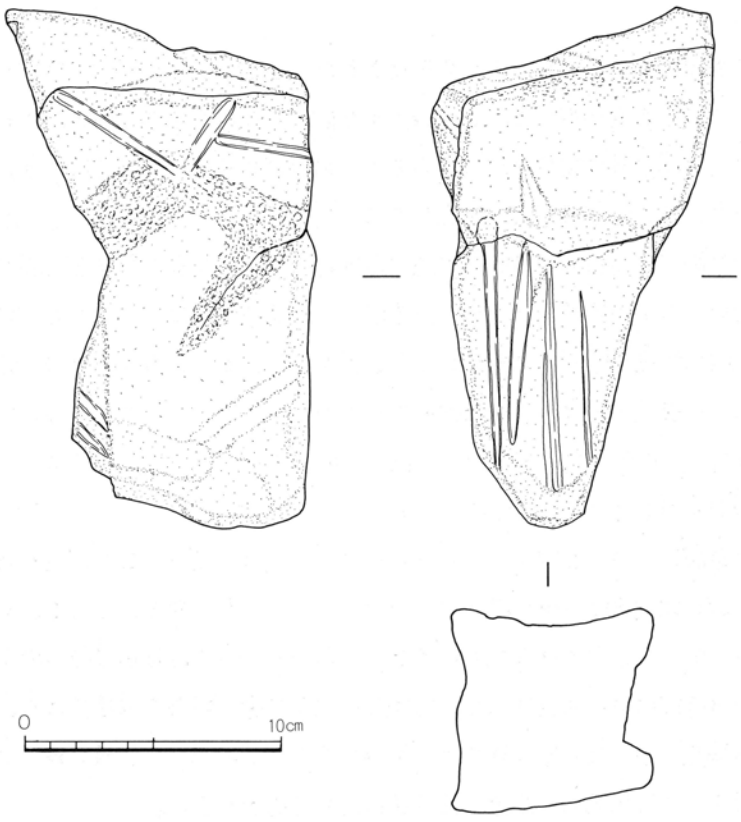
（８）は直径6.7cm×7.1cm、厚さ5.1cmの円形をなすもので、側面は敲打･研磨により整えられる。上下両面は凹状に研磨面を作り出し、それぞれ５条の砥溝が存在する。砂岩製。（第７図）は最大長21cm、最大幅11.5cmの砂岩製で、５面が砥石として使用されており、それぞれの面に浅深の砥溝が多数見られる。その他に大型・小型の砥溝を有さない砥石が数点出土している。

石錐（第６図　９～11）

３点共石英製の四角柱体で、押圧剝離による整形が見られる。（９）は長さ１cm、幅２mmのほぼ完存品で、下半に使用による磨滅が見られる。



第6図　玉製作工具　1～8(1：2)　9～11(1：1)



第7図　ＳＫ01出土砥石　　１：３

5　まとめ

以上製作手順の復元を試みたが、この技法の特徴は次の様である。

①（手順２）で板状剝片を剝離する際、石核を研磨により整える。

②板状剝片を研磨し、完成品の直径とほぼ同じ厚さの板状製品を製作する。

③施溝具による施溝が見られる。

現在まで全国で日本海沿岸を中心として、各地で弥生時代の玉作に関わる資料が報告され、いくつかの製作技法の復元が試みられている。北陸を中心として分布する新穂技法[4]には、板状剝片への研磨は見られず、剝離された角柱体を押圧剝離によって整形する。大中の湖技法[5]は、滋賀・三重[6]等で確認されており、特徴②とした板状剝片の研磨が確認されている。現在のところ弥生時代としては最も古い時期の技法とされる長瀬高浜技法[7]は、角柱体の剝離が直接石核からなされており、板状製品の介在は認められない。今回の技法をこれらと比較すると、①押圧剝離による調整が見られない、②板状製品からの角柱体の切断、③施溝の存在等から、大中の湖技法との類似が指摘できる。しかし、石核の研磨、全面研磨の板状製品の存在等、大中の湖技法に比して整った八角柱体を容易に

得るための工夫がなされており、より合理化された技法といえる。大中の湖技法は、滋賀県野洲町の市三宅東遺跡等(8)で、弥生時代中期前半に存在することが確認されており、ほぼ同時期に太平洋沿岸の朝日遺跡においても、類似の技法による管玉製作が行なわれていたことになり、その分布圏が東へ拡大したことになる。

ＳＢ01は大型の円形住居であるが、当地方は基本的に方形住居を主体とする地域であり、朝日遺跡においてもその例外ではない。当遺跡では以前の調査において、Ⅱ期の円形住居が10数軒確認されているが、いずれも大型で同心円状の拡張が認められ、その占地に対し規制が想定され、一般住居とは画された機能の存在が考えられる(9)。中期において円形住居は、西日本においてその主体を占め(10)、技法・住居構造の西日本との類似は、朝日遺跡における玉作の系譜を考える上で示唆的である。

今回、朝日遺跡においてⅡ期にすでに玉の自給が行なわれていたことが明らかになったが、玉作が行なわれた区画が集落の構造中どの様に意識された空間であったか、そして玉作工人と集落との関わり、どの様な需要に応じた玉作か、さらにはⅢ期以降への玉作技法の継承等、尾張平野部の拠点的集落として当遺跡を捉える上で新たな課題である。

最後に、本稿をなすにあたって御教示・御協力頂いた寺村光晴・伊藤久嗣・岡田登・斉藤基生・伴野幸一・石黒立人・永金千佳各氏に記して感謝します。

石材鑑定は、名古屋大学理学部諏訪兼位教授による。

〔注〕

(1) 朝日遺跡の弥生時代の時期区分は次の通りである。
Ⅰ期―前期、Ⅱ期―中期前葉（朝日式）、Ⅲ期―中期中葉（貝田町式）、Ⅳ期―中期末（高蔵式）、Ⅴ期―後期前半（山中式）、Ⅵ期―後期後半（欠山式）。

(2) 七原恵史・加藤安信他（『朝日遺跡』愛知県教育委員会　1982）

(3) すぐ東側の谷地形内より、Ⅱ期の緑色チャート・翡翠製の勾玉５点が出土している。

(4) 寺村光晴（『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館　1980）
斉藤基生「新潟県柏崎市下谷地遺跡における細型管玉の製作工程について」（『人間・遺跡・遺物』文献出版　1983）
『新穂村史』　新穂村史編さん委員会　1976

(5) 佐藤宗男「大中の湖南遺跡における玉作について」（『古代文化』第22巻第１号　1970）

(6) 岡田登「三重県鈴鹿市北部丘陵採集の玉作り遺物」（『古代文化』第32巻第７号　1980）

(7) 清水真一「鳥取県下の玉作遺跡について」（『考古学研究』第28巻４号　1982）
『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ』鳥取県教育文化財団　1982
『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ』鳥取県教育文化財団　1983

(8) 『古代と現代との同居・玉作りの村―市三宅東遺跡―』　野洲ロータリークラブ　1983

(9) 北集落で検出されたⅡ期の円形住居周辺からは、玉砥石・管玉完成品・未製品が出土している。
都出比呂志「弥生時代住居の東と西」（『大阪大学文学部日本語・日本文化研究論集』1985）

(10) 宮本長二郎「住居と倉庫」（『弥生文化の研究』７　雄山閣　1986）

中世土師器研究ノート (1)

— 朝日西遺跡の様相 —

佐 藤 公 保

1 はじめに

本稿では、朝日西遺跡出土の供膳形態の土師器に見られる様相について検討を試みたい。なお、今回は朝日西遺跡でⅠ期(1)とする12世紀から14世紀にかけての土師器を対象とする。Ⅰ期以降は次稿に譲りたい。

2 形態分類

朝日西遺跡から出土した供膳形態の土師器は、そのほとんどが器高に対して口径が大きい皿タイプである。

これらは成形法で以下の２つに分類できる。

A類　ロクロ成形のもの

B類　手捏ね、又は、型押しによる非ロクロ成形のもの。

さらに、形態、調整、法量等で以下のように分類できる。

A_1類――体部下部はやや丸味をもって外反し、口縁部は直立気味である。体部内外面ナデ調整、底部には回転糸切り痕を残す。口径13.0cmから14.0cm、器高4.0cmから4.5cmを測る。胎土は砂混じりで、クサリ礫と言われる赤色粒が見られ、明橙色を呈するものが多い。

A_2類――底部が肥厚し、突出している。体部は直線的に開き、浅い。調整は体部内外面にナデを施す。底部には回転糸切り痕を残す。口径9.3cmから7.3cm、器高2.3cmから2.0cmを測る。砂混じりの白橙色の胎土を持つ。

A_3類――A_2類と同様な底部を持つ。底部から体部にかけては、やや湾曲しながら立上がり、口縁部は直立気味に外反する。体部内外面共にナデ調整。底部に回転糸切り痕を残す。口径7.6cm、器高2.6cm。砂混じりの明橙色の胎土を有する。

A_4類――体部下部に稜を持ち、口縁部はやや外反する。体部内外面にナデ調整を施し、底部に回転糸切り痕を残す。口径7.4cm、器高1.6cm。胎土は、砂混りで赤色粒が混入し、明橙色を呈する。

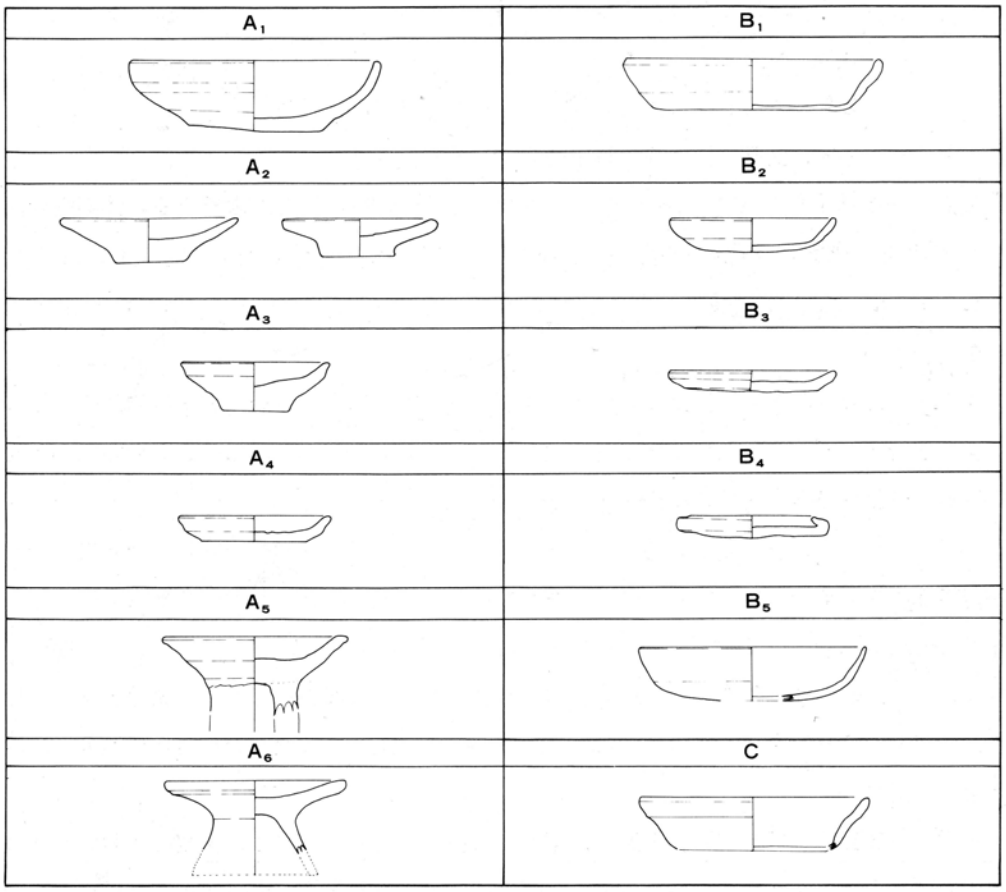
A_5類――高杯。杯部は浅く、直線的に開く。口縁部は丸く突き出て、上端面は面取りされている。脚部は棒状で、中空である。脚部下端には、杯部と同形の裾がつくと思われる(2)。

体部内外面にナデ調整を施す。杯部外底面に回転糸切り痕が残存する。脚部外面に杯部との接合痕を残す。口径9.0cm、杯部高2.5cm。明橙色の胎土を持つ。

A_6類――高杯。浅い受け皿状の杯部に「ハ」の字状の脚部がつく。内外面共にナデを施す。口径9.6cm。胎土は白橙色を呈する。

B_1類――体部中ほどに稜を持ち、口縁部は丸味を持ち、わずかに内湾する。又は、断面三角形を呈する。底部から体部外面下位までは、一定せず凸凹であり、無調整である。体部上位から口縁部にかけ、強い横ナデが施される。内面には見込みに横ナデを施した後、体部内面に外周に沿った横ナデを施す。また内面の体部と見込みの境に、体部を引きおこすための指圧痕が残るものもある。口径14.0cmから11.0cm、器高3.0cmから2.2cmを測る。砂混じりの橙色を呈する胎土を持つものが多いが、赤色粒が混入するもの、明橙色、白橙色を呈する胎土を持つものも見られる。

B_2類――形状、調整、胎土共に、B_1類と同一で、B_1類が小型化したもの。口径9.2cmから7.2cm、器高2.1cmから1.6cmを測る。



第1図　供膳形態分類　　1：4

B_3類——B_2類に比べて、口径に対し器高が著しく低くく、扁平な形を呈する。B_1類と同様な調整が施される。口径8.6cmから7.6cm、器高1.8cmから1.2cmを測り、胎土は砂混じりで褐色を呈するものが多い。

B_4類——体部は短く直線的に立上がり、口縁部が内側に折れ、断面「コ」の字状を呈する。B_1類と同様な調整が施される。口径7.0cmから6.5cm、器高1.8cmから1.5cmを測る。胎土は砂粒を含み、橙色を呈するものが多い。

B_5類—底部は丸味を帯び、口縁部は内湾する。内外面ともB_1類と同様な調整を施すが、B_1類に比べ器壁が薄い。口径12cmから14cm、器高2.7cmから3.0cmを測る。白橙色の精選された胎土を持つ。

3　時期設定

この分類をもとに、朝日西遺跡の中で比較的、まとまった数で土師器が出土しているⅠ期の遺構を抽出し、各土師器の遺構毎の出土状況を見た。その結果は第1表の通りである。この表から、A類とB類は一部混在する遺構があるが、基本的にはA類が出土した遺構とB類が出土した遺構とに分れることが伴る。これには、ロクロ成形の土師器と非ロクロ成形の土師器とでは、各々が主体を占める時期が異なることが考えられる。A・B類と他地域の土師器を比較してみると、A_2・A_3類は関東西部から中部全域に見られる、所謂「柱状高台」の皿である(3)。坂本美夫氏は、A_2類を11世紀前半から11世紀末までの時期にA_3類を12世紀中葉から12世紀末葉までの時期に比定している(4)。又、A_6類の高杯は、斎宮跡で類似しているものが認められ、時期は12世紀前半から12世紀中葉に比定している(5)。

B類については、形態、調整共に旧京都市街で出土する土師皿と類似する(6)。特に、B_1・B_2類は横田洋三氏の言う「A_2・A_3タイプ」の褐色系皿に、B_4類は「受け皿」と言われる「Dタイプ」のものに、B_5類は「B_1タイプ」の白色系皿に類似する(7)。「A_2タイプ」は12世紀から13世紀

分類＼遺構	SK238	SK13	SK65	SD25 (SD09)*	SK17	SK11	SK235	SD72	SK35	SK233	SK10	SK20
A_1		○	○	○								
A_2	○											
A_3			○									
A_4				○								
A_5		○										
A_6				○								
B_1			○		○	○	○	○	○	○	○	○
B_2				○	○	○	○	○	○	○	○	
B_3					○		○		○	○	○	○
B_4							○			○		
B_5				○	○							

第1表　遺構出土状況

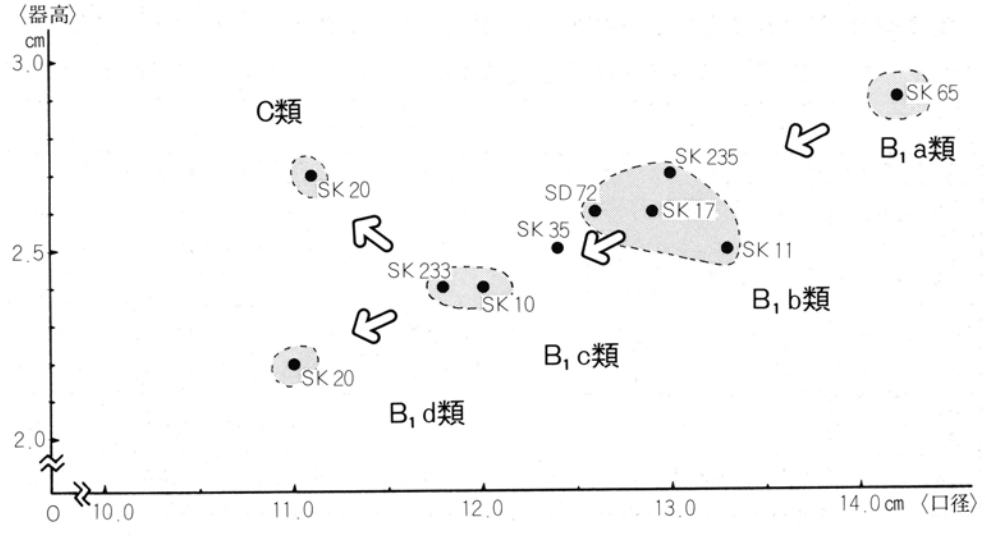
＊SD09（朝日西57・58）は、SD25（朝日西60G）と同じ溝

後半まで、「A_3タイプ」は12世紀後半から15世紀後半まで存続する。旧京都市街で見られる土師皿群と同一形態、同一調整、同一組成を取る朝日西遺跡のB類の土師器は、旧京都市街の土師皿に何らかの影響を受け成立したと思われ、旧京都市街でA_2タイプ」が出現する12世紀前半以降、それに近い時期に朝日西遺跡でB_1類が出現すると考えられる。このように、他地域との関連から、A類は11世紀から12世紀代いっぱいまでの時期に、B類は12世紀以降の時期に出現すると考えられ、前述したA類とB類の前後関係は、A類がB類に先行し、A・B類混在の時期を至て、B類が主体を占める時期に至ることになる。又、第1表を見ると、B類のみを検出した遺構数は、A類を検出した遺構数を凌いでいる。このことはB類が12世紀以降に出現することを考えると、朝日西遺跡が12世紀から13世紀にかけてピークを向えることと矛盾しない(8)。

次に、朝日西遺跡がピークを向える12世紀以降出現すると考えられるB類の検討を進める必要がある。そこで全ての抽出遺構に見られ、B類の主要構成要素であるB_1類にスポットをあてていく。

第2表は、B_1類の各遺構毎の口径、器高の平均値を求め、それを基にして作成したグラフである(9)。表から、SK65（朝日西遺跡59年G区、以下、朝日西59Gと略す。）は、口径14cm強、器高3cm前後に、SK17、SK235、SD72(以上、朝日西59E)、SK11（朝日西60B）は、口径12cm前後、器高2.6cm前後に、SK233（共に朝日西59E)、SK10（朝日西60B）は、口径12cm前後、器高2.4cm前後になり、ある一定の法量値毎に、遺構が集中する傾向がある。各法量に近似する値を持つB_1類を以下の様に細分する。

B_{1a}類——口径14cm強　器高3.0cm前後



第2図　B_1類法量

B_{1b}類――口径13cm前後、器高2.6cm前後

B_{1c}類――口径12cm前後、器高2.4cm前後

ところで、中世の雑器である土師器、瓦器、灰釉系陶器等の供膳形態は、法量が発生以降、減少していくことが知られている。B類に影響を与えたと考えられる旧京都市街出土の土師皿も同様な傾向をたどる[10]。

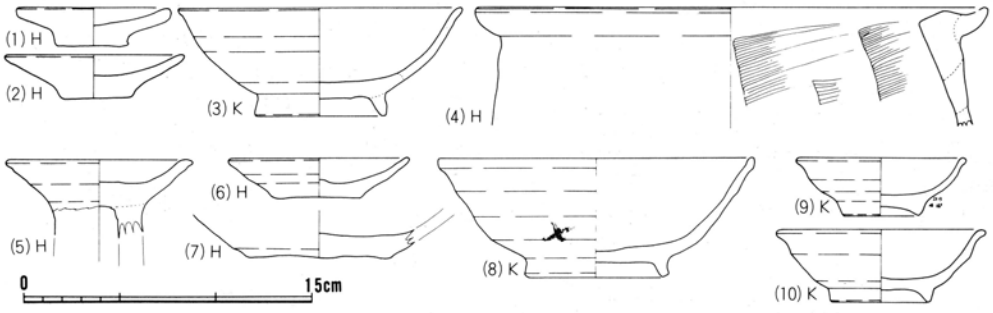
このように、中世雑器全般に通じて、法量減少化が見られること、B類に密接な関係があると思われる旧京都市街の土師器群も例外ではないことから、朝日西遺跡で12世紀以降出現すると考えられるB_1類も同様な傾向をたどると考えられる。即ち、B_{1a}類からB_{1c}類への変化は時期差として捉えられる。なお、少量ではあるがSK20（朝日西59C）出土の土師器（第4図）は、B_1類を通して見られる法量減少の傾向の中で捉えられるものと、器高が増大し椀に近い形態を取るものが見られる。前者は口径11.0cm、器高2.2cmを測り、B_1類と同一系統のものとして捉え、B_{1d}類とする。後者は平均値で口径11.1cm、器高2.7cmを測り、B_1類に比べ口縁部外面に施される横ナデの幅が短いこと。器高が増大し、B_{1a}類から見られた法量減少化に逆行していることから、B_1類と別系統のものC類とし、以降継続していくものとして捉えたい。

以上のことから、朝日西遺跡の供膳形態の土師器は下記の様に推移していくことが推測される。

A類→A・B類混在、（B_{1a}類）→（B_{1b}類）→（B_{1c}類）→B・C類混在、（B_{1d}類）

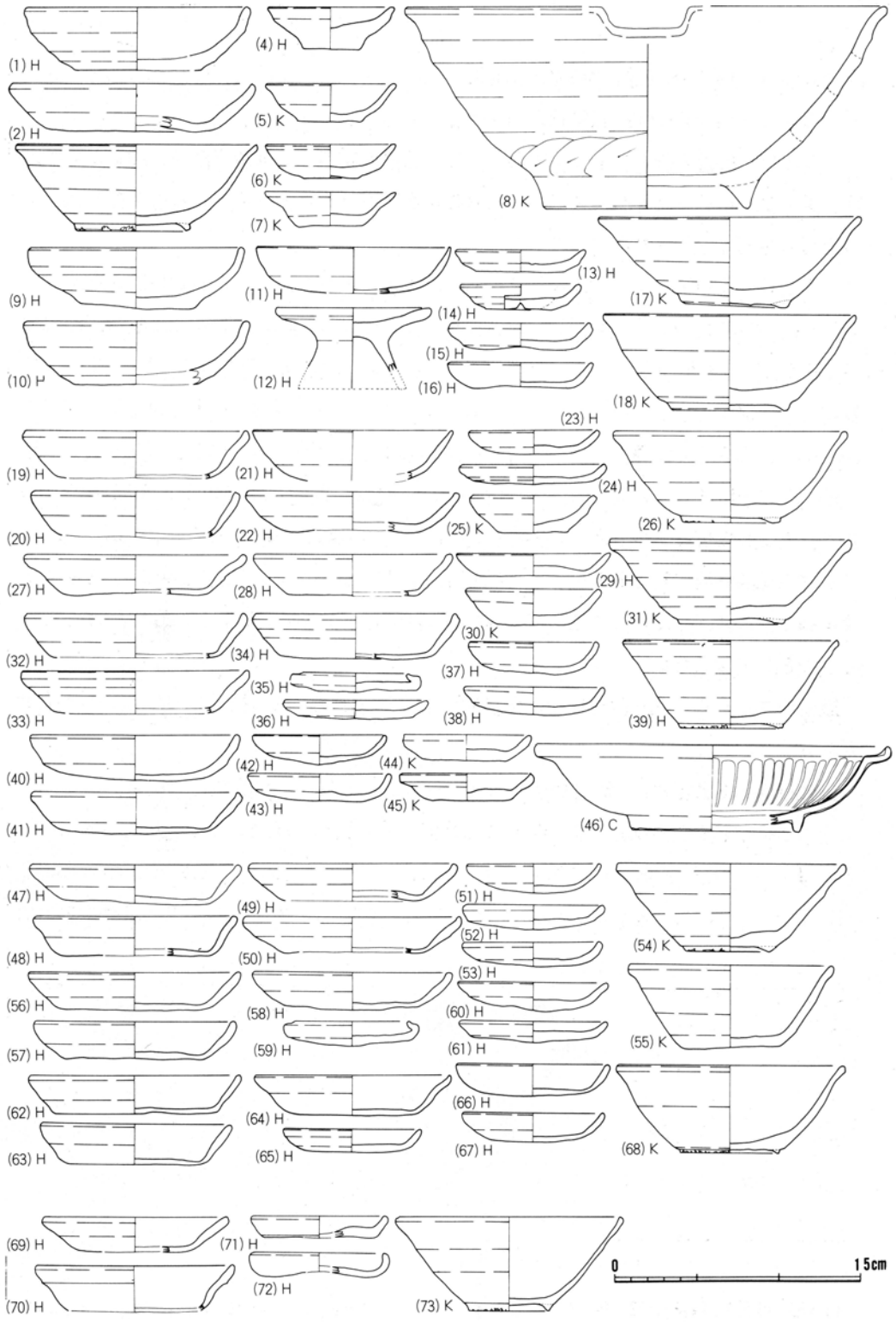
次にこのことを各遺構毎の供伴遺物から検討すると共に、組成の変化を見ていきたい。

A類のみしか見られない遺構として、SK238（朝日西59E）SK13（朝日西59D）（第3図）がある。A類は、大皿、小皿の他、高杯が認められる。出土遺物の中で土



第3図 朝日西遺跡SK238・SK13出土遺物　（H：土師器　K：灰釉陶器、灰釉系陶器　C：中国陶磁）

(1)～(4)SK238(59E)(5)～(10)SK13(59D)



第4図　朝日西遺跡SK65～SK20出土遺物

＊(14)は『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』(愛知県教育サービスセンター)では灰釉系陶器としているがここでは土師器とした。

(1)～(7) SK65 (59G)
(8)～(18) SD25 (59G) SD09 (57・58)
(19)～(26) SK17 (59E)
(27)～(31) SK11 (60B)
(32)～(39) SK235 (59E)
(40)～(46) SD72 (59E)
(47)～(55) SK35 (59E)
(56)～(61) SK233 (59E)
(62)～(68) SK10 (60B)
(69)～(73) SK20 (59C)

師器の占める割合はきわめて少ない。供伴遺物として、ＳＫ238には底部に回転糸切り痕を残す等、灰釉陶器末期の特長を示す椀、土師鍋が見られ、ＳＫ13では高台に籾殻痕が認められない灰釉系陶器椀と小椀、褐白色で軟質な胎土を持つ皿等が見られる。窯編年から、これらの陶器類は11世紀後半から12世紀前半に比定できる(11)。

Ａ・Ｂ類が混在する遺構として、ＳＫ65、ＳＤ25（第４図）（共に朝日西59Ｇ）がある。Ａ類は、大皿、小皿、高杯といった組成であり、Ｂ類は、大皿、小皿しか見られない。量的にはＡ類がＢ類を凌ぐ。供伴遺物として、灰釉系陶器椀、皿、片口鉢が見られ、灰釉系陶器の皿は、いずれも底部がやや突出しており、高台の名残りが見られる。窯編年から12世紀後半代に比定できる(12)。

B_{1b}類が見られる遺構として、ＳＫ17、ＳＫ235、ＳＤ72、（以上朝日西59Ｅ）、ＳＫ11（朝日西60Ｂ）（第４図）がある。Ａ類が消滅し、Ｂ類の組成が完成する時期と考えられる。組成はB_{1b}類を中心とする大皿２種と小皿３種からなる。Ｂ類の組成は以降根本的に変化はない。又、量的に土師器が増大する傾向が見られる。なお、B_{1a}類に見られた赤色粒を含む胎土を持つものが見られなくなる。供伴遺物は、灰釉系陶器椀、皿、青磁皿、石鍋が見られ、灰釉系陶器の編年から、13世紀前半から13世紀中葉に比定できる(13)。

B_{1c}類が見られる遺構は、ＳＫ35、ＳＫ233（共に朝日西59Ｅ）、ＳＫ10（朝日西60Ｂ）（第４図）がある。基本的には、ＳＫ17、ＳＫ235等で見られた組成と同一組成をなす。Ｂ類の中で白橙色の胎土を特つものが減少する。供伴遺物は、灰釉系陶器椀、皿が見られ、灰釉系陶器椀は無高台のものと高台を持つものが混在する。窯編年から13世紀後半から14世紀初頭に比定できる(14)。

B_{1d}・Ｃ類が見られる遺構は前述したＳＫ20（朝日西59Ｃ）（第４図）がある。供伴遺物は、美濃系の灰釉系陶器椀が見られ、その特長より14世紀中頃に比定できる(15)。

このように、供伴遺物から見てもＡ類からＢ類へ、Ｂ類の中でB_{1a}類からB_{1d}類・Ｃ類への推移は妥当であることが判明した。そこで下記の様に時期を設定する。（第５図）

Ⅰ期　Ａ類のみしか見られない時期（11世紀後半～12世紀前半）

Ⅱ期　Ｂ類が見られる時期で、さらにⅡ$_1$期からⅡ$_3$期までに細分される。

Ⅱ$_1$期　Ａ・Ｂ類が混在する時期。（B_{1a}類：12世紀後半代）

Ⅱ$_2$期　Ａ類が消滅し、Ｂ類の組成が完成する時期（B_{1b}類：13世紀前半～中葉）

Ⅱ$_3$期　B_1類の中でB_{1c}類が出現する時期（B_{1c}類：13世紀後半～14世紀初頭）

Ⅲ期　B_{1d}類とＣ類が混在する時期（B_{1d}類：14世紀中葉）

4　まとめにかえて

朝日西遺跡の供膳形態の土師器の様相について整理すると次の３点に要約される。

１．11世紀後半から12世紀後半まではロクロ成形の土師器が主体を占める。

２．非ロクロ成形の土師器は12世紀後半に出現し、12世紀代まではロクロ成形の土師器と混在するが、13世紀以降、非ロクロ成形の土師器のみで供膳形態が構成される。

３．14世紀中頃以降、Ｂ類以外にＣ類が出現するように、非ロクロ成形の土師器に変化が見られる。

以上、朝日西遺跡の供膳形態の土師器について、他地域の土師器との対比、法量変化等をもとに、Ⅰ期からⅢ期の時期区分を試みた。形態や調整等の変化に乏しいため、法量変化に頼りすぎた嫌があるが、概ねの推移は捉えていると思う。しかし、Ｂ類については、本稿で十分に触えなかったB_1類以外の土師器の分析が残されている。またＡ類にしても供伴遺物から、さらに細分ができる可能性がある。等々、課題は山積み状態である。これらの課題を一つ一つ解き明していく必要があり、他の中世遺跡の土師器の様相との検討を積み重ねることで尾張地方全体の中世土師器の様相を解明していかねばならない。

本稿は遠藤才文・赤塚次郎・服部哲也の各氏の他、愛知県埋文センター職員の過激なまでの叱咤激励により、ようやくまとめ上げ得た。また図版作成にあたって鈴木規子氏の協力を得た。文末ながら感謝の意を表わしたい。

〔注〕

(1)　愛知県教育サービスセンター「朝日西遺跡Ⅰ」（『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』1984）
　愛知県教育サービスタンター「朝日西遺跡Ⅱ」（『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』1985）

(2)　三重県教育委員会三重県斎宮跡調査事務所「斎宮跡の土師器」（『三重県斎宮跡調査事務所年報1984』1985）の中で、後Ⅰ期、後Ⅱ期とした土師器の中に類似したものが見られる。

(3)　田嶋明人「加賀地域に見る10世紀から13世紀にかけての土師器の変遷」（『第４回中世土器研究集会10・11世紀の土器・陶磁器を中心にして』1985）
　坂本美夫「甲斐国における古代末期の土器様相」（『神奈川考古第21号　シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題』1986）
　川上　元「信濃国における古代末期の土器様相」（『同　上』）

(4)　坂本美夫「柱状高台の皿・杯について」（『同　上』）

(5)　注(2)と同じ

(6)　横田洋三「平安末～鎌倉の土師器（京都を中心に）」（『中世土器研究19』1982）で、横田氏はA_2タイプが全国的な広がりを見せることを指摘している。

(7)　横田洋三「出土土師皿編年試案」（『平安京跡研究調査報告　第５輯　平安京左京五条三坊十五町』1981）
　横田洋三「土師器皿の分類と編年観」（『平安京左京四条三坊十三町　長刀鉾町遺跡平安京跡研究調査報告　第11輯』1984）

(8)　注(1)と同じ

(9)　遺物整理がまだ十分に進んでいないため、完形品に近いもののみの平均値をとった。

(10)　堀内明博「瓦器成立以後の平安京の土器」（『中近世土器の基礎研究』1985）
　渋谷高秀「紀伊　11～14世紀代　日常雑器類の編年　有田郡を中心にして」（『和歌山県埋蔵文化財情報17』1985）

この原因については土師器のみの型式学的変化として捉えるだけでなく、他の陶磁器類、木製品の供膳形態を含めて検討し、中世社会全体の問題として捉えていく必要があり、これからの課題であろう。

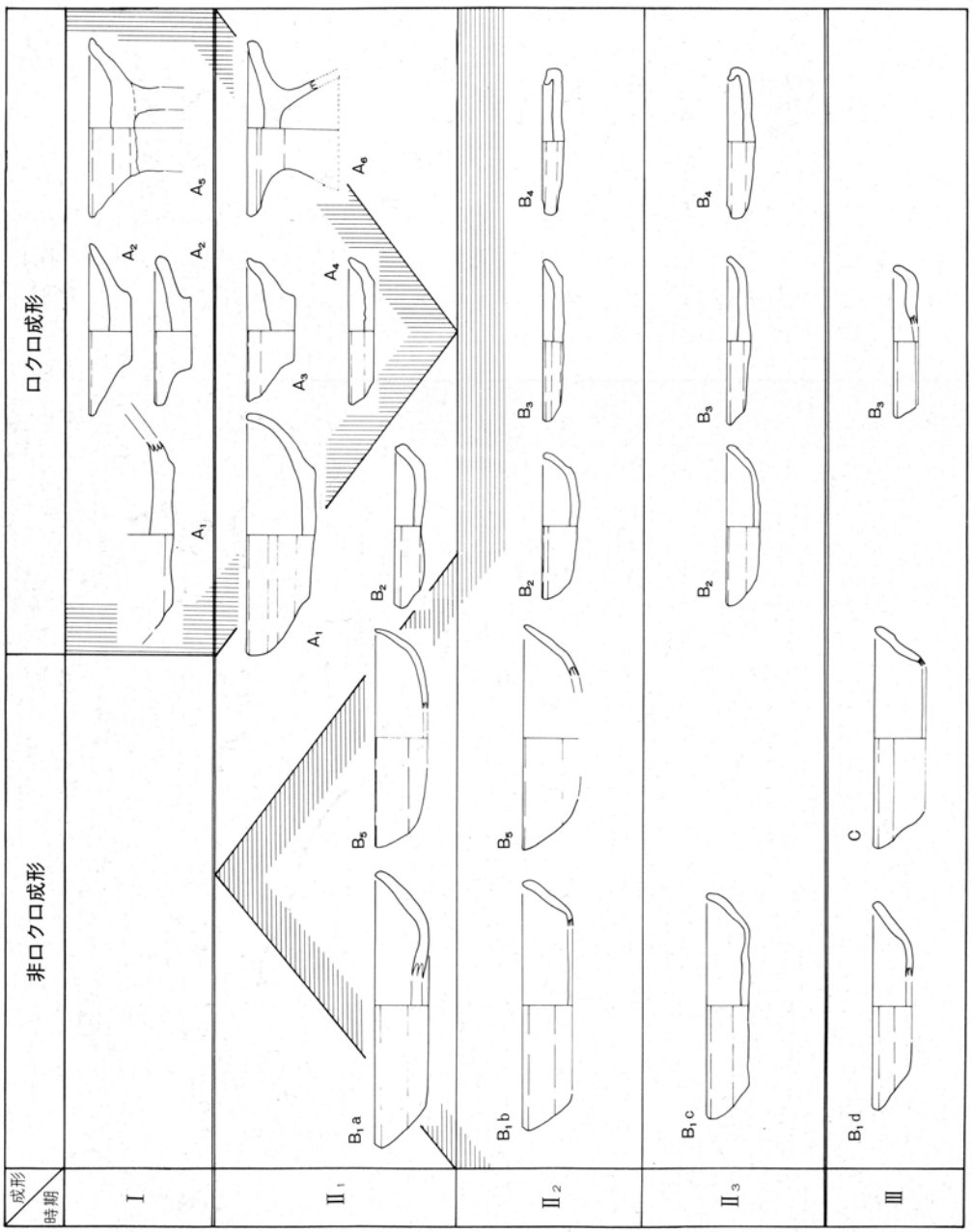
(11) 楢崎彰一「猿投窯の編年について」（『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ』1983）
前川　要「猿投窯における灰釉陶器生産量最末期の諸様相　瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にして」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』1984）
藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」（『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅰ』1982）

(12) 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」（『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅰ』1982）
赤羽一郎（『考古学ライブラリー23　常滑焼　中世窯の様相』1984）

(13) 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」（『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅰ』1982）

(14) 注(13)と同じ

(15) 田口昭二「美濃窯業史(1)　須恵器から古瀬戸系施釉陶器まで」（『美濃陶磁歴史館報Ⅰ』1981）



第5図　編年試案　　1：4